

対馬の民家および集落の空間構成と  
聖性に関する研究

松永 達

①

# 対馬の民家および集落の空間構成と 聖性に関する研究

1997

松永 達

## 論文の概要

本論文は「対馬の民家および集落の空間構成と聖性に関する研究」と題し、本島民家および集落の空間構成は生活領域に内在する〈聖・穢〉観念をもとにした聖性・祭儀との関連による象徴的体系の顕現であると捉らえ、これを実証した。したがって、本研究では、民家の空間構成と聖性・祭儀との関連を解明し、さらに集落を対象にして民家から集落にいたる整序性を明らかにし、ここに成立する空間構成原理を聖性・祭儀と関連づけて明らかにすることを目的とした。このため、本論文は主として次の二つの視点より研究を進めた。

第1には、民家主屋内でダイドコに設けられた平柱（長方形断面の柱）に着目し、この平柱をはじめとする構成要素を民俗学的観点よりとらえ、ダイドコの空間観念および平柱の形態成立の要因を解明した。さらに、平柱の偏在する配置分布が聖性を示す指向の顕現であることを明らかにした。（第3章）

第2には、〈聖・穢〉観念をもとに集落の空間構成を〈聖〉〈俗〉〈穢〉空間の三つの構成要素に分類し、この相互間に内在する整序性を究明し、民家主屋に内在するこの聖性を示す指向と集落の空間構成との関連に視座をおき、民家から集落にいたる聖的空間構成原理を実証的に解明した。（第4,5章）

本論文は全6章からなり、研究の目的、方法、意義、既往研究および本研究における「聖性」を定義した第1章「序論」から始まり、第2章から第5章までが本論である。第6章では各章の結果を要約し、民家および集落の空間構成にいたる構成原理に対する知見を総括し結論とした。

本論のうち第2章「民家および集落研究の到達点および本研究の位置づけ」では、本研究で主眼とした「民家および集落と聖性・祭儀との関係」に関連した研究分野の既往研究を①民家および集落に関する研究、②民家に関する研究、③集落に関する研究の三項に分け、主要な観点を示した。また、これらの研究の到達点を検証し、本研究分野における本論文の特色および位置づ

けを明らかにした。

第3章「対馬民家のダイドコにおける空間構成と聖性・祭儀」では、主屋内部のダイドコおよびここに設けられた平柱をはじめとする構成要素に着目し、ダイドコの空間観念が生活の中心的機能をもつとともに聖性・祭儀を象徴した空間による重層的空間であることを究明した。さらに、平柱の偏在に視座をおき、主屋の平面型およびダイドコの構成要素と聖性・祭儀との関連を論じ、主屋内部の聖性を示す指向をも明らかにした。

第4章「群倉を形成する対馬集落の空間構成と聖性」では、本島に成立した二タイプの小屋の配置形態のうち本章では群倉を形成する集落を対象とし、群倉が生活領域において聖的存在であること、特に産、死に対する聖的再復活の場であることを明らかにした。また、生活領域に内在する〈聖・穢〉観念をもととした《カミ：山方向・シモ：海方向》観念に着目し、俗域である居住域を中心として集落の〈聖・俗・穢〉空間の三つの要素からなる空間構成を明らかにした。さらに、集落の空間構成において主屋内部に成立した聖性を示す指向との関連を論じ、主屋の向きと集落の空間構成における整序性を究明した。

第5章「対馬の群倉を形成しない集落の空間構成と聖性」では、小屋が点在または塊状を成す集落、つまり群倉を形成しない集落を対象とし、集落の空間構成と聖性・祭儀との関連を論考した。こうして、本島集落の空間構成は次にあげる4原則より成り立っていることを実証した。

①《カミ》から《シモ》に向って〈聖・俗・穢〉空間の順に配置する原則。

②聖域である群倉および小屋の配置・分布は俗域の聖化とともに穢への忌避的手段として配される原則。

③聖化された俗域における主屋の向き、つまり聖性を示す指向は《カミ：山》へ向う原則。

④《カミ》に聖域が存在することにより群倉の必要性はなく、また聖域が存在しない場合、これに代わる群倉を必要とする。つまり、群倉の成立は《カミ》における聖域の有・無による原則。

第6章「結論」では、以上の各章の結果を要約し、民家および集落の空間構成と聖性に関する知見を総合的に示し、結論とした。

本島集落の空間構成は民家主屋内の構成から集落の構成にいたるまで、生活領域に内在する《カミ・シモ》観念を基層におく、象徴的体系の中で俗域の聖化と穢からの忌避観念にもとづいて一貫した空間構成原理によって秩序だてられていると結論づけた。

# 目 次

第1章 序論	1
1.1 研究の目的	1
1.2 研究の意義	4
1.3 既往研究	6
1.4 本研究における「聖性」	9
1.4.1 本島における「聖性」	9
1.4.2 「聖性」の特徴	11
1.4.3 「聖性」の位置づけ	12
1.5 研究方法	13
1.6 民家および集落に対する調査内容	14
1.7 論文の構成	16
第2章 民家および集落研究の到達点と本研究の位置づけ	21
2.1 研究の目的・方法	21
2.2 本研究分野の到達点	21
2.2.1 民家および集落を対象にした研究	21
2.2.2 民家を対象にした研究	25
2.2.3 集落を対象にした研究	28
2.3 本研究の特徴と位置づけ	31
第3章 対馬民家のダイドコにおける空間構成と聖性・祭儀	36
3.1 研究の目的	36
3.2 研究方法	37
3.3 ダイドコの空間構成と聖性・祭儀	38
3.3.1 対馬民家の特徴	38
3.3.2 ダイドコの性格と祭儀	51
3.3.3 ダイドコにおける平柱の分布と聖性・祭儀	55
3.3.4 平柱の分布上の指向性と聖性・祭儀	59
3.4 小結	63

第4章 群倉を形成する対馬集落の空間構成と聖性 .....	68
4.1 研究の目的 .....	68
4.2 研究方法 .....	70
4.3 対象集落の空間構成の特質 .....	71
4.4 集落構成と聖性・祭儀 .....	73
4.4.1 群倉と聖性・祭儀 .....	73
4.4.2 集落の空間構成と聖性・祭儀 .....	74
4.4.3 主屋の聖性を示す指向と聖性 .....	80
4.5 小結 .....	82
第5章 対馬の群倉を形成しない集落の空間構成と聖性 .....	86
5.1 研究の目的 .....	86
5.2 研究方法 .....	88
5.3 対象集落の空間構成の特質 .....	89
5.4 集落構成と聖・穢性 .....	90
5.4.1 コヤ・墓所の配置と聖・穢性 .....	90
5.4.2 空間構成要素と聖・穢性 .....	91
5.4.3 主屋の聖性を示す指向と聖性との関係 .....	93
5.4.4 群倉を形成する集落としない集落との比較 .....	98
5.5 小結 .....	101
第6章 結論 .....	104
6.1 序 .....	104
6.2 本研究の総括 .....	106

# 対馬の民家および集落の空間構成と聖性に関する研究

## 第1章 序論

本章では、本研究の序として研究の目的、意義、方法ならびに調査内容、既往研究、本研究における聖性および論文の構成について述べる。

### 1.1 研究の目的

本研究は、民家および集落の空間構成に生活領域に内在する共通観念としての聖性がどのように影響しているかを解明することに主眼を置いた。それだけに本研究では、①民家の空間構成、および②民家の集合体である集落の空間構成と聖性との関連の2つの視点より論考することを主目的とした。

#### ①民家の空間構成

民家の建築的形態およびその空間秩序は、民家を取りまく生活空間の全領域との関わりの中なかで考察できる。

民家の成立は、次の2つの要因が考えられる。第一には、地理的環境要因であり、第二には、聖性・祭儀など人文的要因を挙げ得る。前者は、本島においても、民家の建築形態の中なかによく反映されているとみられる。本研究で着目したのは、後者の民家における空間秩序に関する整序性の一つの発動要因としての聖性・祭儀である。

本島民家の空間秩序には、これを取りまく生活空間の領域との間に、ある共通観念が発動していると考えられる。この観念とは、本島固有の聖域をもつ中世初期に宗儀が完成した天道信仰<sup>1)</sup>に関する聖性・祭儀である。

この天道信仰は、穀霊信仰、日神信仰を中心とする信仰である。その要所は、上島の佐護、下島の豆酸に存在する天道山を中心とし、島内各地の山上、川辺、集落附近または集落内部に存在する。このような、みだりに入ることのできない聖域<sup>2)</sup>である祭儀空間が全島に分布している。天道山を中心とする聖域が、本島における信仰の要を形成している。さらに、万松院をはじ

め全島において聖道門系寺院への転宗<sup>3)</sup>が行われたことから、本島全域は天道山を中心とする聖的空間<sup>4)</sup>とみなし得る。このような聖性の存在のなかに主屋、板倉(コヤ<sup>5)</sup>と呼んでいる)、雑屋から構成される民家が成立している。この主屋内部のダイドコおよびコヤに平柱(断面が扁平な柱)<sup>6)</sup>が設けられる。それだけに、本研究では主屋の平面形態および平柱の配置と聖性・祭儀との関係を論じる。つまり、本島民家の平面形、構成要素および空間構成は聖性・祭儀の影響を受け、その聖性の象徴的顕現によるものと捉え実証的に論考した。

## ②集落の空間構成

本島集落の基本的な構成要素としては生活用水としての井戸・川<sup>7)</sup>、社寺、天道の不入域、その他種々の信仰施設、集落内外に分布する墓所、民家の主屋、付属施設としてのコヤ、雑屋がある。この内、本研究ではコヤおよびその集合としての群倉を重要な要素として特に着目した。コヤは敷地内部に設けられる場合、敷地外部に点在する場合、および集落の一部に群倉として設けられる場合の三種類の配置形態がみられる。いずれも主屋とは別棟である。主屋とコヤの分離配置は、火災防止を考慮したことも事実であるが、むしろこの配置形態の基層に存在する成立要因として聖性・祭儀を反映したものと考えられる。

このような事象から、本島では生活の基層に共通観念として天道による聖的観念が内在し、この聖性・祭儀がここに成立する集落の空間構成に対し秩序性の一要因として影響していると本研究では捉らえた。

本研究は、以上に述べた生活領域に内在する天道による聖性・祭儀に着目し、本島の地理的、人文的要因のなかに成立した民家および集落の空間構成について聖性・祭儀との関連を論考した。

本研究の目的は以下の2項に要約される。

- (1) 民家の空間構成を平面型および構成要素と聖性・祭儀との関連をとおして明らかにすることを目的とする。
- (2) 本島の集落において群倉を形成する集落およびコヤが点在または塊状

を成す集落<sup>8)</sup>、すなわち群倉を形成しない集落の2タイプを対象とする。この2タイプの集落の配置構成は、ともに生活領域に内在する天道信仰による〈聖・穢〉観念を基層とした聖性・祭儀との関連により成立すること、ならびに群倉の成立を明らかにすることを目的とする。さらに、2タイプの集落の配置構成を総合的に明らかにすることにより、民家から集落の空間構成に至る構成原理を明らかにすることが主目的である。

## 1. 2 研究の意義

従前の民家研究は、各地域で調査された平面および構造形態を分析し、これらの編年並びに類型化をとおして、その変遷や発展過程を明らかにすることに主力が置かれていた。一方、民家の建築的形態の成立に関する研究や空間秩序の解明に関する研究もすすめられた。

民家の形態および空間秩序の成立要因としては、自然、風土などの地理的要因および祭儀、習俗など人文的要因の2つが挙げられ、近年の研究では主として後者に着目されてきた。

民家の建築的形態の成立は、地域の自然・風土環境に歴史的な生活の蓄積を重ねた結果であり、本研究では前者を基に後者が、重層的に関与していると考えている。

本研究は、建築的空間秩序の構成要因として人文的要因の一つであり生活の基層に存在する聖性・祭儀を対象とした点に特色があり、さらに民家の空間構成との関連の解明に主力を置いたところが特徴である。具体的には本島民家のダイドコの空間構成、ならびに集落の空間構成と聖性・祭儀との関連を実証しようとするところがこれまでの研究と異なる。

本研究のもう一つの意義は、従前の民家の研究方法では、解明し得なかった前時代（中世）の形態的・計画的側面を推定する手がかりが得られるところにある。

集落の空間構成との関連における本研究の特徴は、本島集落における民家の配置構成が、主屋の空間構成を規定する聖性を示す指向との一連の観念の上に成立したと捉えた点である。さらに、本島の集落構成は群倉およびコヤの分布域を聖域として配置構成されていることを検証し、集落構成が聖性を示す指向とともに集落内部の忌避的処理によることを明らかにした。かかる本島集落の空間構成が、《カミ（山方向：聖）》から《シモ（海方向：穢）》へと〈聖・俗・穢〉域からなることを、集落の配置構成からだけでなく、断面構成からも明らかにしたところに本研究の意義がある。

従来の研究に対し民家から集落の構成に至る一貫した構成要因として聖性・祭儀および〈聖・穢〉観念に着目した点が本研究の特色である。また、民

家および集落の各構成要素の空間観念との関連を明らかにするため、聖性・祭儀を基に、これに関連する民俗的資料と建築・集落空間的調査を融合した研究方法は対馬のみならず、生活領域内に同様の条件を具備した他地域においても民家および集落の空間構成に関する新たな研究分野として成立することが指摘できる。

### 1. 3 既往研究

本項では本研究に関連した既往研究を①民家および集落に関連した研究、②民家に関連した研究、ならびに③集落に関連した研究の三項に分けて検討する。

①民家および集落構成と聖性との関係についての既往研究では、坂本磐雄氏の「沖縄の集落景観」<sup>9)</sup> および鳴海邦碩氏らによる「神々と生きる村 王宮の都市 パリとジャワの集住の構造」<sup>10)</sup> が挙げられる。「沖縄の集落景観」では景観論の立場より民家および集落を対象とし、それまで沖縄の民家において普遍的とされていた右一番座およびそれ以外のものも対象として、沖縄の民家を家屋配置および方位を基に集落景観に関する地域性を究明している。本研究を進めるにあたり多くの示唆を得た。

鳴海邦碩氏のバリ島の集落を対象とした研究<sup>11)</sup> では、〈山と海〉〈東と西〉の二軸の空間観念により成立する方位基準にもとづいた民家内部の構成と集落の向きおよび配置構成を論じている。本研究の空間構成に対して多くの貴重な示唆を与えた研究である。

両研究は民家から集落に至る範囲を研究対象とし、聖性との関わりをも論考した点においては本研究と共通した基盤にあり、本研究分野における民家および集落と聖性との関連に観点を おいた研究として貴重である。

②民家に関連した研究のうち聖性との関連を基とする研究として、場所論的立場から西垣安比古氏による朝鮮の伝統的なすまいについての研究<sup>12)</sup> が挙げられる。この研究では、朝鮮のすまいにおける「マル」(板間)に着目している。「すまい」を構成する象徴を体系的に論じ、朝鮮のすまいにおける「マル」は最上位の聖なる場所と説き、諸場所の関係を解明しており、本研究の概念構築の参考とした。

建築における聖性の存在に関する研究では、玉腰芳夫氏の「古代の家 ― 一場所の研究 ―」<sup>13)</sup> が挙げられる。この研究では「家なる空間の本質は、現代と異なって、聖なる空間ということになる」ことを指摘し、「建築を聖

なるもの」と位置づけている。これらの研究は、民家における聖屋的観念を示し、本研究における民家の空間と聖性との関係に多くの示唆を与えた。

民家の平面構成および形態成立に関する研究では、大岡敏明氏の「旧藩領域からみた江戸時代後期～明治期における農民住宅平面構成の地域的相違に関する実証的研究」の研究<sup>14)</sup>がある。この研究では、人文的諸条件を民家成立の契機としている。その平面構成の地域的相違は、自然、地理、風土的条件よりも人文的文化的条件<sup>15)</sup>により規定されることを明らかにし、さらにこれらの条件においては、重層的関係を指摘している。

広間型平面の性格および成立に関する研究として、大河直躬氏の「住まいの人類学」<sup>16)</sup>および玉井哲雄氏の「近世における住居と社会」<sup>17)</sup>が挙げられる。大河直躬氏は広間型を「前座敷三間取り型」と本島民家が属する「広間型」とに分類し、「広間型」について祭壇の位置およびその向きから広間と上手の祭壇のある部屋との関係の緊密性ならびに儀礼・信仰との関係を示唆した。

玉井哲雄氏は、畿内の村落社会における上層階級の住居様式である「前座敷三間取り型」と永井規男氏<sup>18)</sup>が明らかにした「摂丹型」との多くの共通点を示し、両者において様式の性格および民家形態の成立事情に共通する要因として社会階層および歴史的な政治体制との関連を挙げている。これらの研究は、民家の形態成立に対する歴史的研究として示唆に富む研究である。

対馬の民家を対象とした持田照夫氏、大河直躬氏の「日本の農家の四つ間取の研究——広間型の追求——」<sup>19)</sup>は、本島民家を広間型とみなしている。このなかで本研究に関連する視覚的効果のなかで平柱や三尺間<sup>20)</sup>（チュウジキ、コドコとも呼ばれる）が設けられる居間（ダイドコ）が、農民社会における身分・格式をあらわす象徴的空間であったと論じている。このような平柱や設備は、堅固さや重々しさを強調するような家の観念の視覚化と位置づけている。「長崎県の民家」<sup>21)</sup>でも平柱については、家の立派さをほこるために用いられたと指摘している。これらの研究は、対馬の民家に関する貴重な研究といえる。

以上は民家の平面、表現形式および地域性の成立について社会的、格式、身分および地域特性に要因を求めた研究である。

③集落に関連した研究では、すでに文化人類学、民俗学、宗教学、地理学等、様々な立場から行われてきたが、建築学の分野では農村計画をはじめ建築歴史、都市計画等の分野で蓄積されてきた<sup>22)</sup>。

集落の空間構成および整序性に関する研究としては聖域および信仰域を集落の一構成要素と捉えた重村力氏らによる集落内部における共同性を基底においた研究<sup>23)</sup>がある。また、寺門征男氏による集落の空間秩序について地名に着目した集落空間の整序性についての研究<sup>24)</sup>が挙げられる。

民俗学の分野では本島の集落を対象とした鈴木正崇氏の一連の研究<sup>25)</sup>があり、集落の聖地構成、祭祀伝承による集落内部の世界観についても論じている。この研究は集落の空間構成について具体的な建築的要素を対象とするものではないが、集落構成において示唆に富む研究である。

次に、土井崇司氏の「日本における伝統的集住の空間構造に関する研究」<sup>26)</sup>が挙げられる。この研究では集住の場所は「山という聖なるもので象徴的に防御され、聖化されている」<sup>27)</sup>と指摘しており、集落の空間認識について多くの示唆を得た。

## 1. 4 本研究における「聖性」

### 1. 4. 1 本島における「聖性」

本研究で対象とした15集落のうち、聖域が集落内部および周囲に存在する11の集落が確認された。以下に事例を示す(表-1)。

- ①西泊では集落の西北に位置する権現山の中腹に権現社が祀られ、山を聖域とする<sup>28)</sup>。
- ②湊では集落の北に位置する天道山が不入域である。豆殿の天道山(竜良山)とともに本島における天道信仰の要所であり聖域を成す。山裾に多久頭魂神社が鎮座し、天道山に対する拝所となっている。
- ③一重では集落背後の権現山を聖域とする。
- ④志多賀では背後の山を介し、集落と対峙する山裾の林に祠を祀り「シゲ」(林)と称する不入域を成す。
- ⑤芦浦でも集落の背山を介し、祠を祀り不入域である「シゲ」が聖域を成している。
- ⑥久須保では集落の対岸が墓所(捨墓)とされ、対峙する集落背後の山裾に「サンガツサマ」と呼ばれる祠を祀り聖域を成す。
- ⑦小茂田では集落の背後の山頂に「サンボンマツ」と呼ばれる不入域である聖域が存在する。
- ⑧内院では集落北部の山を天道法師の入定の地とする不入域が聖域を成す。

表-1 集落と聖域

NO	集落名	聖域	NO	集落名	聖域
1	西泊	権現山	7	小茂田	サンボンマツ
2	湊	天道山	8	内院	天道山
3	一重	権現山	9	志多留	カナグラ・シゲンバル
4	志多賀	天道シゲ*	10	阿達	オヒデリサマ
5	芦浦	天道シゲ	11	権根	カミノジンジャ
6	久須保	サンカ*ツサマ			

⑨ 志多留では集落背後の山頂に「カナグラ」と称する聖域を配し、さらに集落内部に不入域として「シゲンバル」と呼ばれる聖域が存在する。

⑩ 阿連では集落の北東に位置する山裾の川辺に「オヒデリサマ」と呼ばれる祠を祀り聖域を成す。

⑪ 椎根では集落北部の山裾の川辺に「カミノジンジャ（豊和多海神社）」と称される不入域が岩壁下に御幣を供え聖域を成している。

以上の事例は、次の3タイプに分類できる（図-1）。

(I) 集落の背後の山頂、山腹または山全体を聖域または不入域とするタイプ  
西泊、湊、一重、久須保、小茂田、内院および志多留の7集落が挙げられる。

(II) 背後の山を介し、集落と対峙する山裾の林に祠を祀るタイプ  
志多賀、芦浦の2集落が挙げられる。両集落では、「シゲ」（林）と称される不入域が聖域を成す。

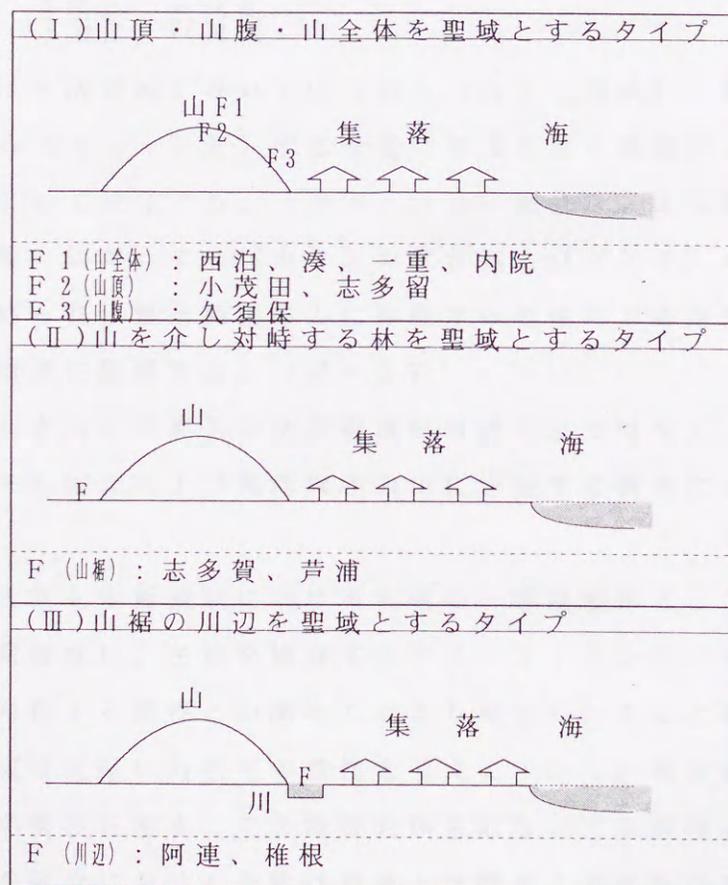


図-1 聖域分布の類型図

(Ⅲ)集落の上流に位置する山裾の川辺に聖域を成すタイプ

川辺に祠を祀る阿連および岩壁下に聖域を成す椎根が分類できる。

以上に示した聖域は、天道信仰を基に山や林に成立する。豆酏および佐護の両天道山<sup>29)</sup>をその要所とし、聖域の多くは天道シゲまたはシゲと称される不入の禁足地である。

事例に示すように聖域は、両天道山を規範として集落を取り囲む山上または山中の川辺に分布し、みだりに入ることのできない不入域として存在する。この聖域をなす主体は山中の祭場または山上における石積みの祭壇、林(シゲ)や山全体が聖なるものとして存在する。

以上のように、これらの聖域には聖性が認められ、その聖性とは聖域に存在する聖なるものによる観念である。

#### 1.4.2 「聖性」の特徴

本島集落では生活領域において山方向を《カミ：聖域》、海方向を《シモ：穢域》とする《カミ・シモ》観念を基に集落を貫く基軸が、「俗域(居住域)」を中心として成立する。《カミ・シモ》観念は、さらに集落を取り囲む「山」・「海」に対しても《カミ》の聖性および《シモ》の穢性が一對の観念として認められ、集落周囲の山に存在する聖性による指向性が民家および集落の空間構成に影響する。(図-2)

民家主屋の向きおよび集落の空間構成は自然方位ではなく、この基軸となる《カミ・シモ》観念および集落周囲の山に存在する聖性による影響を受けている。

本研究では民家を生活領域における集落の一構成要素として捉らえており、民家主屋の空間構成は、主屋を構成するダイドコ・ナンド・ザシキ・ドージの要素<sup>30)</sup>に内在する聖性との関わりにより成立したものと捉らえた。また、集落の空間構成は民家に内在する聖性と《カミ・シモ》観念にもとづいた一連の指向を示す聖性を基本とする象徴的体系のなかでの顕現と捉らえている。したがって、本研究における聖性は聖域と民家および集落の空間構成との間に一貫した指向性の存在を特徴とする。

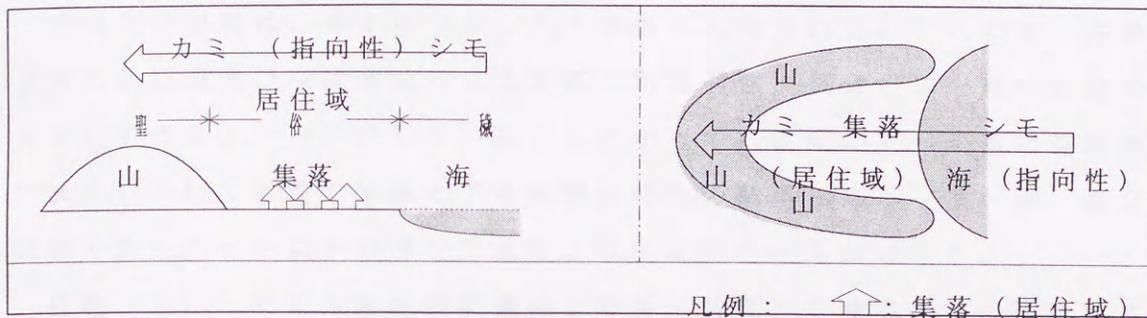


図-2 : 本島の生活領域の空間モデル

### 1.4.3 「聖性」の位置づけ

聖性を基にした一連の観念により規定される民家主屋の空間構成は、聖性を内在したダイドコに偏在する平柱の分布傾向により、内部に生じる聖性を示す指向をもって解明し得た。

集落の空間構成においては、基軸となる《カミ・シモ》観念との関わりによって本島集落の空間構成が、《カミ》から《シモ》へと〈聖・俗・穢〉域からなることを実証する。さらに、集落の基軸となる《カミ》への指向および居住域をとりまく山への指向性と民家ならびに集落の空間構成との関連に視座をおくことにより、その構成原理を解明し得た。

したがって聖性を基本的観点と位置づけ、指向性の概念の導入により民家および集落の空間構成を解明する方法は、以下の点より重要かつ有効な方法と成り得た。

- ①対象集落の聖域は両天道山を規範としたこと。
- ②聖性は聖域（聖なるもの）に対する観念と捉え得たこと。
- ③生活領域内に《カミ・シモ》観念に基づいた聖性を示す指向が存在していたこと。
- ④聖性を示す指向の概念の導入により民家および集落の空間構成を解明し得たこと。

## 1.5 研究方法

本研究の目的は、第1節で示した2項目に大別される。すなわち、本島の民家および集落の空間構成の成立要因である聖性・祭儀との一連の関連を明らかにすることを目的としている。したがって、民家および集落の空間構成の成立について聖性を基層とする象徴的空間の顕現である〈聖・穢〉観念の反映であることを以下の研究方法により実証的に明らかにした。

目的(1)：民家主屋の空間構成と聖性・祭儀との関連を明らかにするにあたり、以下の2方法で展開した。

- ①本島民家の構成要素、特にダイドコとその周壁に使用される平柱の象徴的意味を明らかにするため民俗的資料と民家の空間構成との関連による分析を行った。
- ②ダイドコにおける平柱の配置分布および向きに関して数量的分析を行い聖性・祭儀との関連を考察するとともに主屋内部の聖性を示す指向を明らかにした。

目的(2)：集落の空間構成と〈聖・穢〉観念との関連の究明については、(A)群倉を形成する7集落、および(B)群倉を形成しない8集落を事例とする2タイプに分類し(表-3)、以下の4方法で考察した。

- ①群倉、コヤおよび墓所(詣墓・捨墓)など生活領域に存在する集落の構成要素に関する観念を明らかにするため、民俗的資料および建築・都市空間構成に関する資料から総合的に分析を行った。
- ②集落の空間構成を断面構成より明らかにするとともに生活領域内で認識される〈聖・穢〉性と主屋内部の聖性を示す指向との関連による主屋の向きを分析した。
- ③2タイプの集落の空間構成を比較分析することにより、本島集落の空間の構成原理を検証した。
- ④群倉の成立を聖性との関連において考察した。

各章において個別の研究目的に対する研究方法、分析方法について示している。

以上の研究方法に対して以下の調査を行った。

## 1.6 民家および集落に対する調査内容

民家についての現地調査は1980年より91年にかけて4回実施し、主屋およびコヤの現状の平面構成と平柱の分布状況、配置、断面の実測調査および聖性・祭儀に関する聞き取り調査を行った（表-2）。採集した図面は現状図である。採集した平面形および構成要素を検討すると、本島民家のダイドコは大きな変化はなく、祖形を保っていると考えられる。このことは「長崎県の民家」<sup>31)</sup>に確認できる。聖性・祭儀に関する調査では、ホタケ<sup>32)</sup>、コウジンなどの祀られている位置および神体の確認ならびに年中行事に関する聞き取り調査を行った。参考にした資料は、「九学会特別報告」<sup>33)</sup>、「長崎県の民家」<sup>34)</sup>ならびに野村研究室<sup>35)</sup>による調査資料を主に用いた。

表-2 現地調査および資料

調査	調査戸数	調査内容	調査年月
現	第1回	配置図 : 4戸 主屋の平面図 : 12戸	1980年8月
		断面図 : 1戸	
地	第2回	配置図 : 10戸 主屋の平面図 : 11戸	1981年8月
		コヤの平面図 : 4戸	
調	第3回	配置図 : 1戸 主屋の平面図 : 5戸	1985年8月
		断面図 : 1戸	
査	第4回	聖性・祭儀に関する聞き取り調査	1991年8月
	第5回	主屋・コヤの配置構成および聖・縁域の実態調査	1993年8月
	第6回	主屋・コヤの配置構成および聖・縁域の実態調査	1994年8月

集落の空間構成に関する資料としては、各町村より入手した集落地図（表-3）を主資料とし、航空写真および住宅地図<sup>36)</sup>を参照した。これらの資料を基に主屋、コヤの配置形態<sup>37)</sup>および生活領域内における「聖・穢」域の位置と領域を確認し、配置構成図を作成した。このうち不明確な点については、現地調査で補足した。

現地調査は、4回の民家調査とともに集落内外におけるコヤの配置状況の調査に加え、1993, 94年の8月に対象集落の主屋、群倉、コヤの配置状況、「聖・穢」域について実態調査を行った（表-2）。

調査内容は主屋の聖性を示す指向、主屋の向き、コヤの配置、聖域、天道のシゲ地をはじめとする民間信仰および墓所（詣墓・捨墓）などの「聖・穢」域の位置ならびに方位等、集落の構成要素と「聖・穢」域との関係を調査した。また、これらに関連する年中行事としてコヤ、墓所（詣墓・捨墓）における祭儀内容、天道（聖域）および民間信仰に関する〈聖・穢〉観念ならびに聖性・祭儀に関わる民俗的慣習についての聞き取り調査を併せて実施した。

表-3 2タイプの事例集落および集落地図

(A) 群倉を形成する集落				(B) 群倉を形成しない集落			
NO	集落名	集落地図名および縮尺	発行年月	NO	集落名	集落地図名および縮尺	発行年月
1	鷺浦	上対馬町道路台帳平面図：1/1000	1992, 2	1	西泊	上対馬町平面図：1/1000	1979, 5
2	舟志	上対馬町平面図：1/1000	1992, 2	2	淡	上県町平面図：1/1000	1980, 8
3	志多留	上県町平面図：1/1000	1980, 8	3	一重	上対馬町平面図：1/1000	1992, 11
4	青海	峰町道路台帳：1/1000	1982, 3	4	志多賀	峰町道路台帳現況平面図：1/1000	1982, 3
5	木坂	峰町道路台帳：1/1000	1982, 3	5	芦浦	森林基本図：1/5000	1986, 6
6	阿達	巖原町道路台帳図：1/500	1979, 8	6	久須保	森林基本図：1/5000	1986, 6
7	椎根	巖原町道路台帳図：1/500	1979, 8	7	小茂田	巖原町道路台帳図：1/500	1979, 8
				8	内院	巖原町道路台帳図：1/500	1979, 8

## 1.7 論文の構成

本論文は第1章から第6章よりなる。第1章を序論とし、第2章から第5章を本論、第6章の結論より構成される。

第1章の序論では、研究の目的、方法、意義および本研究における「聖性」を定義した。

本論（第2から5章）のうち第2章では、民家および集落の空間構成に関連した研究分野における到達点を明らかにし、本研究の位置づけを行った。第3章では本島民家の実例を挙げ、民家主屋の平面形態と空間構成および構成要素による象徴性、ならびに聖性を示す指向を聖性・祭儀との関連を基底におき実証した。第4、5章では群倉を形成した集落および群倉を形成しない集落の2タイプの集落を対象に集落の各構成要素の象徴的意味および民家から集落の空間構成にいたる構成原理を究明した。第6章（結論）では以上の各章で得られた知見を総括し、本論文の結論を示した。

## 注記

- 1) 永留久恵：「海神と天神」、白水社、1988年 P104 豆酏での天道の赤米による稲作儀礼を挙げ、稲霊と祖霊を一体とする家内での「オタケサマ」信仰および竜良山（天道山）における天道法師の聖地の存在を示し「天道信仰は、一中略一日ノ神と穀霊と祖霊の信仰が渾然一体となったもの」と述べ、P358に「天道信仰の本質は、この穀霊信仰、日神信仰を核として、祭祀の形式は雄神（御子神）と雌神（母神）を配祀している所が多いことにある。」、またpp. 359-360に下県の豆酏と並んで上県の佐護の湊に天童の母神として祭られ「対馬神社誌」に「女房神」と呼ばれる神像の「像底には永享十一年（一四四〇）の銘がある。」とし「室町前期にはすでに天童伝説が固定していたことは確実である。」と述べている。
- 2) 前掲 1) P144：「上県の佐護の天道山は、雄嶽と雌嶽の両峰があり、南を雄嶽、北を雌嶽、下県の豆酏の天道山（竜良山）にも雄嶽（雄竜良）と雌嶽（雌竜良）」を中心に天道による聖域は、シゲまたはシゲ地とよばれ全島に分布している。
- 3) 赤田光男：「対馬の両墓制及び両墓制に代るものについて」、日本宗教の歴史と民俗、隆文館、1976年、P439、厳原の宗家菩提寺である万松院は寛文十二年(1635)に天台宗に転宗したとし、またP450に「両墓制及びそれに準ずる墓制が存在する理由」として「曹洞宗や天台宗の寺院が多く、浄土門系寺院とちがって、かかる聖道門系寺院は死の穢れをさけようとする性格がある」と指摘している。このように全島域において聖的空間観念が存在し、忌避観念の存在が捉えられる。
- 4) 豆酏、佐護の両天道山を聖域の中心に位置づけ、これを規範とする聖域が生活空間と共に対馬全域に分布する総体としての空間を意味する。
- 5) 現地での聞き取り調査において日常生活の中で板倉を「コヤ」と呼ぶことを確認したため、本論文は「コヤ」の呼称を使用した。
- 6) 九学会連合対馬共同調査委員会編：「九学会特別調査報告」、1954年 P337：この名称は、本島の民家の主屋および小屋（倉）の周壁に設けられる。断面が扁平な柱を「平柱」とよんでおり、本研究ではこれを参考にした。
- 7) 宮家 準：「宗教民俗学」、東京大学出版会、1994年、P286「俗域である里と聖域である山と海とむすぶ境界領域」としている。
- 8) 本研究では、群倉は小屋相互において桁端を接し群を成し、または小屋間は通路程度に使用されるのに対し、小屋相互間は接しておらずその間を耕作地、乾燥場や作業場として利用される形態を点在または塊状ととらえられた。
- 9) 坂本啓雄：「沖縄の集落景観」、1992年10月 九州大学出版会、P12 この研究では、分析基点を自然方位ではなく東方尊重を基本概念とし、沖縄の民家の普遍性の高い一番座に着目して、一番座を起点としてヨコ方向では「上手-下手」、タテ方向では「前面-背面」の二軸を分析軸としている。また、この研究では沖縄の民家において普遍性の高い一番座に着目し、分析基点を自然方位ではなく東方尊重を基本観念としている。
- 10) 鳴海邦碩、アルディP. パリミン、田原直樹：「神々と生きる村 王宮の都

- 市　パリとジャワの集住の構造」、1993年12月、学芸社
- 11) 前掲10) この研究では、〈山と海〉〈東と西〉に価値を認め、さらにこの二軸が直交し、四つの方向とその中間的四方方向および中心を加えた、九つの神により表される空間概念「ナワ・サンガ」による集落構成を明らかにしている。
  - 12) 西垣安比古：「朝鮮のすまい」－象徴体系の構造論的研究－、人文学報、第60号、1986年3月、京都大学人文科学研究所
  - 13) 玉腰芳夫氏：「古代の家」－場所の研究－　1972年8月　日本建築学会論文報告集　第198号
  - 14) 大岡敏明：「旧藩領域からみた江戸時代後期～明治期における農民住宅平面構成の地域的相違に関する実証的研究」、1986,5日本建築学会計画系論文報告集　N0363　江戸時代の農民住宅の平面構成を地域間（藩領域）においてその構成の相違を文化圏域としての旧藩領域にその契機を求め、五地域（九州、東北、近畿、北陸、中部地方の27藩）にわたり実証的に考証している。
  - 15) 前掲14) その藩の家作規則、武家住宅、農業形態と生産力、伝承慣習行事、藩内の諸政策と支配体制、そして隣接する藩と藩の関係などに規定されると論じている。
  - 16) 大河直躬：「住まいの人類学」日本庶民住居再考、1990年10月、平凡社
  - 17) 玉井哲雄：「近世における住居と社会」日本の社会史、第8巻、生活感覚と社会、1988年12月、岩波書店
  - 18) 永井規男：「摂丹型民家の形成について」1977年1月、日本建築学会論文報告集第251号　この研究では、摂津西部地方における民家の平面および立面型の成立を人文的要因としてこの地方の歴史的政治体制にこの型の成立契機を求めた研究である。
  - 19) 持田照夫、大河直躬：「日本の農家の四つ間取の研究　－広間型の追求－」、(財)新住宅普及会住宅建築研究所報、1978年
  - 20) 長崎県教育委員会：長崎文化財調査報告書　第12集（前編）、「長崎県の民家」、長崎県緊急民家調査報告書、1972年　P27に三尺間の形態および発展過程は、詳述している。また、前掲19) P175では最初は簡単な形態から複雑化し居間のなかでも上手の一番象徴的位置にあるとしており身分、格式を現す社会的意味を示した。そして、本論ではこの三尺間に山の神、テガキなどの民間信仰における祭儀設備として成立することは、ダイドコが祭儀空間として成立する一構成要素であるにとらえた。
  - 21) 長崎県教育委員会：長崎文化財調査報告書　第12集（前編）、「長崎県の民家」、長崎県緊急民家調査報告書、1972年、P22
  - 22) 日本建築学会：1993年度　日本建築学会大会（関東）研究協議会資料　「共生と現代　――東アジア集住文化を通底するもの――」、日本建築学会編：図集、集落　その空間と計画　都市文化社　1989年8月
  - 23) 重村　力、山崎寿一：「中久保集落の共同性の展開過程　――共同性の空間構造――」　1991年6月、日本建築学会計画系論文報告集　第424号　この研究では村落社会における共同性を空間の成立原理の基本におき、モノグラフィック的研究方法をとおして集落の内部構造を明らかにしている。

- 山崎寿一、重村 力：「生活地名からみた中久保集落の空間意識の構成——共同性の空間構造——」、1993年9月、日本建築学会計画系論文報告集第451号 において信仰空間について述べている。
- 24) 寺門征男：「空間言語（地景名）からみた集落空間の組織化と構成原理について——農村集落の空間的整序性に関する研究 その1——」1990年10月、日本建築学会計画系論文報告集 第416号 この研究では、地景名を集落レベルの特定集団の即地的日常生活において共有される空間言語としている。この内空間言語の内容として 1)自然地景語群として①山系、②谷系、③川系 2)道景語群として①道系、②施設系 3)聖地景語群として①神仏系、②祠系 4)人家景語群として①組系、②家系、③野良系と4語群10系に分類し考察している。
- 25) 鈴木正崇：「対馬・木坂の祭祀と村落空間」、「日本民俗学」140号、1982年では木坂八幡宮とその末社の祭祀内容、村人の習俗について考察し村落の世界観を明らかにしている。「対馬・青海の祭祀と村落空間」「稲・舟・祭」松本信広先生追悼論文集 大興出版 1982年では年中行事を中心とした伝承を主に村落空間を明らかにしている。「対馬・仁位の祭祀と村落空間」、「日本民俗学」151号 1984年についてはシゲ、フチ、タケの霊的存在を祀る聖地を考察し聖地構成を解明している。さらに祭祀組織、祭祀伝承および祭祀対象者について考察し神社祭祀と社会組織との関連を示している。
- 26) 土井崇司：「日本における伝統的集住の空間構造に関する研究」、1994年1月、学位論文
- 27) 前掲26) P244
- 28) 前掲 3) P439では「集落の背後に権現山があり、神山として崇拝され、その山の中腹には権現社（能理刀神社）が鎮座し、神社祭祀が厳粛に行われている。」と述べている。
- 29) 前掲 1) P144：この天道山について「上県佐護の天道山は雄嶽と雌嶽の両峰があり—中略—雄嶽の頂上に天道菩薩が鎮まっている」とし、また「下県の豆飯の天道山（竜良山）にも雄嶽（雄竜良）と雌嶽（雌竜良）があり、雄竜良の南麓に表八丁角、北麓に裏八丁角があつて、表八丁を天道法師の祀、裏八丁を天童の母公の祀と伝えている。」と述べている。さらに「島の南北に同じモチーフの所伝があり、両地が対馬における天道信仰の中心」であることを示し、「天道祭祀（聖地）は山上（山中）にある例と水辺にある例が多いが、山上は御子神の祀、水辺は母神の祠、—中略—嶽之神は御子神、水辺の神は母神という祭祀の形態が天道信仰の基本形式であつた」と指摘している。
- 30) 日本建築学会民家語彙集録部会編：「日本民家語彙解説辞典」では「ドウジ」とあるが、現地での聞き取り調査では「ドージ」と確認したため、本論文においては「ドージ」を使用した。
- 31) 前掲21)
- 32) 九学会連合対馬共同調査委員会編：「九学会特別調査報告」、1954年 和歌森太郎、櫻井徳太郎 P341：「全島いずれの村を訪れても、この神を祀らない家はない」と報告されている。永留久恵：「海神と天神」、白水社、1988

年 P149:「これを天道信仰の家庭内祭儀」、また「家庭内祭儀の中心はホタケサマである」と論じている。このように天道の別姿とし全島に祀られながらもホタケは、農耕神として生活のなかにねざし、また表面化しにくい神として観念されている。対馬郷土研究会:「対馬風土記」 13号、1976年 P29:ホタケの神体は、「ダラの木を十字に割(門松に供えてあったもの)ヨシの穂と茎を一、二本づつはさみこむ」また現地調査では弓、矢、御幣の型を稲穂、ヨシ、ラダの木および麻糸による作製を確認した。

33) 前掲 6)

34) 前掲21)より主としてダイドコ周壁の平柱の分布状況、13戸を参考にした。

35) 野村研究室 九州産業大学 工学部 建築学科 1981年 4調査:主としてダイドコ周壁の平柱の分布状況、17戸を参考にした。

36) 対馬(上県郡、下県郡)91ゼンリンの住宅地図、(株)ゼンリン、1990年11月

37) 小屋内部の使用方法は聞き取り調査を行った。

## 第2章 民家および集落研究の到達点と本研究の位置づけ

### 2.1 研究の目的・方法

本章では、本研究で主眼とした「民家および集落と聖性との関係」に関する研究分野において本研究に関連した既往研究を①民家および集落を対象にした研究、②民家を対象にした研究および③集落を対象にした研究の三項に分類し、到達点を明らかにする。しかる後、この分野における本研究の特色および位置づけを明らかにすることを目的とする。

### 2.2 本研究分野の到達点

#### 2.2.1 民家および集落を対象にした研究

既往の研究のうち民家から集落に至る範囲を対象にした研究として坂本啓雄氏の「沖縄の集落景観」<sup>1)</sup> および鳴海邦碩氏らによる「神々と生きる村王宮の都市 バリとジャワの集住の構造」<sup>2)</sup> が挙げられる。

「沖縄の集落景観」の研究は景観論の観点より、沖縄の民家における主屋の向きおよび集落の景観に関する研究である。この研究において本論文と関連した事項は、民家の方位および集落構成と聖所との関係について論考した点である。

この研究のなかで民家の方位基準としてヨコ軸「上手-下手」、タテ軸「前面-背面」の二軸を分析軸<sup>3)</sup> として普遍的とされる右一番座に着目し、その成立要因について「太陽崇拜の思想と夏における風向の有利性」を挙げ「その他の方位の向きでも、右一番座が主屋平面の基準になった。」<sup>4)</sup> と指摘し、東方尊重と夏の風向きを挙げている。また、左一番座となる民家をも対象とし、その要因として①信仰、②隣家との関係、③排水条件、④給水条件、⑤主屋の規模、⑥敷地条件、⑦方位および気象条件の7項目<sup>5)</sup> を挙げている。この要因のうち本研究に関連する信仰の項目を一成立要因として挙げ「主屋に向って、左手の敷地に信仰と関係のある場所（以降、拝所）が位置する場合、当該の主屋は左一番座となり、拝所に上手側が接することに

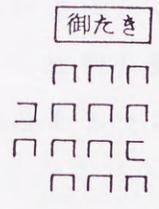
なる。これが右一番座だと、当該敷地の下手が拝所に接し、拝所に対して失礼になるので、左一番座となって上手－下手の関係が逆転する。」と論じ、主屋の向きと拝所（御嶽）との関係を明らかにしている。

集落構成については主屋の向きを対象とし、集落内部で多数を占める主屋の向きを「平坦地」、「傾斜地」、および「山すそ」の三区区分する地形条件を基に分析している。また、当該集落における多数以外の向きとなる条件を、以下の10項目<sup>6)</sup>に分類している。I) 敷地の接道条件、II) 敷地の形状、III) 習俗、IV) 主屋の規模、V) 横方向の大通り、VI) 集落の形成過程、VII) 集落の東側に位置する海、VIII) 風向、IX) 二方向あるいはそれ以上の斜面がある場合、X) 山が一方向で東側に位置する場合および二方向にある場合。この項目のうち本研究に関連する「VI) 集落の形成過程」のなかで、集落と御嶽との位置関係について「移動がない集落では－中略－当該集落における多数の向きの最後部に、祖先神をあがめる祭祀場としての御嶽（うたき）があるのが普通である。しかし集落が移動したときは、当初の御嶽から遠ざかってしまうので、移動後の集落内に通し御嶽を設けることがある。」<sup>7)</sup> ことを指摘している。（図－1：A）。さらに、集落と御嶽との位置関係により「当該集落で多数を占める主屋の向きの民家群と、左向きの民家群とが集落を二分する景観となる」<sup>8)</sup> ことを明らかにしている。（図－1：B）。

したがって、この研究では沖縄の民家の向きおよび集落の空間構成における成立要因として御嶽（拝所）の位置が重要な基点となることを明らかにしている。

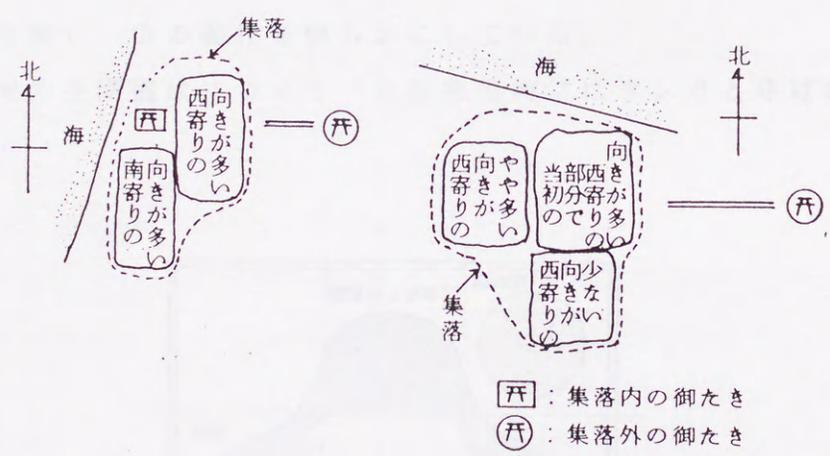
次にバリ島の民家および集落を対象とした鳴海邦碩氏の研究では、バリ島の集落および住居敷地の空間を規制する空間概念を以下のように論じている。

集落の空間構成について〈カジャ〉と呼ばれる山方向を神聖な方向であると述べ「山は祖先たちが住む場所であり、また、生命を維持するための水が流れてくる方向だからである。」と指摘し、これに対して海の方は〈ケロッド〉と呼ばれる不浄の方向である。それは、「海がすべてを飲み込む不浄の空間であり、悪魔が支配する空間」と説いている。さらに「カジャとケロッドとを結ぶ軸が重要な方位軸であり、人々はその中間である世俗の世界に住む。」<sup>9)</sup> と述べ、ここに集落空間を位置づけている。こうした山と海を



(□が多数の向き)

(A) 御嶽と多数の向きとの位置関係



(B) 集落における御嶽と主屋の向き分布

(「沖縄の集落景観」P59より転載)

図-1: 集落における御嶽と主屋の向き分布との位置関係

結ぶ方位軸に加え、東を〈カンギン〉、西を〈カウ〉と呼ぶ東西軸を捉らえ、東の「カンギン」は日が上る方向であり、一日の始まりの方向でもある。また人生の始まりの方向であり、山の方角である「カジャ」と同じ価値をもつと指摘する。西の「カウ」については日の沈む方向であり、死の方角でもあり、海の方角である「ケロッド」と同じ価値をもつとする。こうした各方位は、集落構成において明確な概念をもった基点となることを明らかにしている。

さらに、この山・海〈カジャーケロッド〉方位と東・西〈カンギン・カウ〉方位が、互いに直交する基本方位であることを指摘し、この中間的な四つの方位およびそれらの中心点を加えた九つの神によって表される「ナワ・サンガ」と呼ぶ方位体系<sup>10)</sup>を明らかにしている。この方位陣が「住居敷地構成のベースになるなど、バリにおける空間利用を律する重要なモデルとなっている」<sup>11)</sup>と指摘する(図-2)。さらに、またバリ島の世界観について

「聖なる世界と世俗の世界の接点につくられる寺は、村びとと祖先の霊の対話が行われる場でもあり、この寺から山の側には、世俗的な建物はつくりなない。」<sup>12)</sup>と指摘し、山の聖性を明らかにしている。

次に住居敷地の空間構成について「住居敷地内にはサンガと呼ばれる祠が

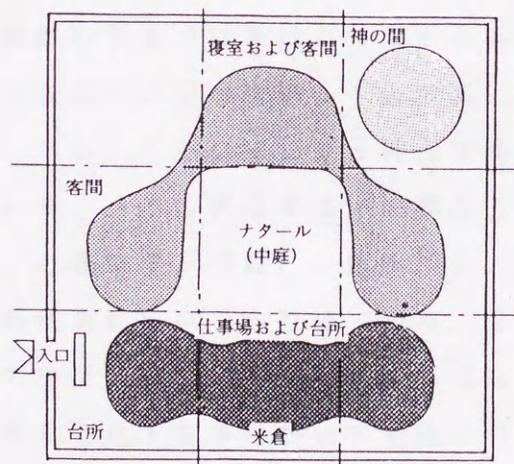


図-2 : ナワ・サンガの方位軸にもとづく住居プランの構成

(P75より転載)

あり、この配置から判断される聖なる方向を住居敷地の基本軸」と捉え、さらに「ナワ・サンガ」による方位陣内に祀られるこの祠は、「北東のゾーン（島の北部に適用すると南東ということになる。）」の最も聖なる場所に祀ることを指摘している。したがって、住居敷地内における聖なる方向は、基点となるサンガ（祠）の位置によって決定され、また集落については「ナワ・サンガの方位陣」により規制される。よって、この方位陣の構成要素である「山・海」「東・西」が明確な概念にもとづいた重要な基点となることを明らかにしている。

以上の両研究は、民家および集落の構成において基点となる構成要素と聖性との関連に視座をおいた研究として本研究分野における貴重な研究といえる。

## 2.2.2 民家を対象にした研究

本研究分野において民家における聖性を基に場所論的立場より朝鮮のすまいを対象とした西垣安比古氏の「朝鮮のすまい」<sup>13)</sup>、および建築と聖性との関連についての研究として玉腰芳夫氏の「古代の家——場所の研究——」<sup>14)</sup>が挙げられる。

「朝鮮のすまい」では、「マル」（板間）に着目し、これに関わる諸場所の意味およびその構造を「巫俗」や民間信仰を基に解明している。

この研究のなかで「朝鮮のすまいに於けるマルの聖性は祖先のチバン（紙榜）及び家宅神の中心となるソングジュ神が、このマルに於いて祀られる事から明らかである。」<sup>15)</sup>とし、さらにソングジュ神とマルとの関係（図-3）を次のように指摘している。「この神はすまいの聖なる中心であるマルに奉安されるのであるが、この際マダン（庭）に降臨する。つまりマダンが中心化する。この事は坐向の決定に於いても同様である。すまいの中心であるマルを方位づけるに際してマダンがまず中心化されねばならない。坐はマダンを原点とする事、即ち脱中心化する事に於いて定位され、再中心化する事に於いて始めて向が定められるのである。この脱中心化＝再中心化を通してマル、ソングジュ神がそして延いては家主が成立するのであり、脱中心化＝再中

心化はマダンに於いて共同体へと開かれる」<sup>16)</sup>と結論づけており、聖性との関連を基にしてマルとマダンを基点とする象徴的場所の相互関係を見事に解明している。

玉腰芳夫氏は「古代の家」のなかで柱と床について「この鎮魂を間にして柱の構成する場所と床なる場所は通い合う」<sup>17)</sup>とする。さらに、家なる空間の本質について「日常的空間は、新室ほがひ、物忌み、斎ひという呪術宗教的行為による場所の形成に負うのであるから、またこれらの諸行為は生の維持にとって不可決且つ重要な役割を演ずるのであるから」と述べ、さらに「現代と異なって、聖なる空間ということになる」と指摘し、「建築を聖なるもの」と位置づけている<sup>18)</sup>。

場所論的立場よりみた、これらの研究から本島民家の空間観念および平柱をはじめとする構成要素に内在する象徴的意味とその体系のなかに成立する空間相互の関係を対象とする本研究の理論構築に多くの示唆を得た。

次に民家の平面形態を分類し、各部屋およびその構成要素がもつ表現形式ならびに形態成立について論考した研究として、以下の研究が挙げられる。

広間型平面の成立および特質に関する研究として玉井哲雄氏の「近世における住居と社会」<sup>19)</sup>がある。この研究では「広間型平面は、囲炉裏を中心とした閉鎖的な二室ないし一室の住居から発展した」<sup>20)</sup>と論じ、さらにそ

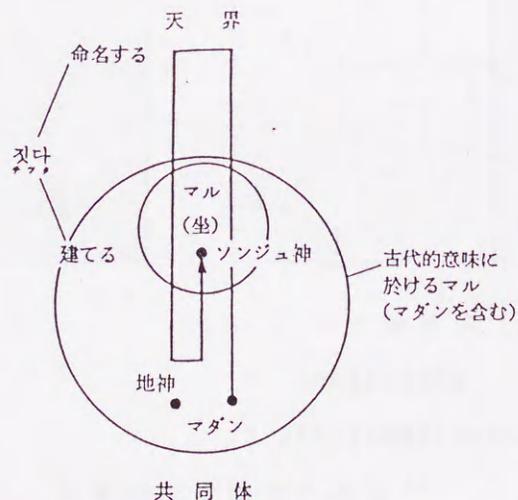
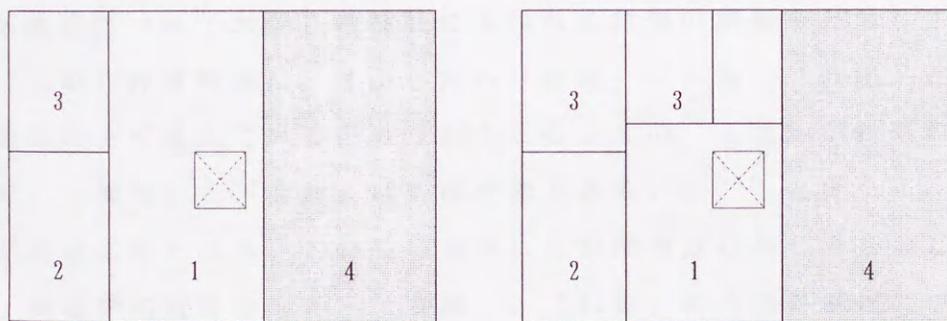


図-3 : 「朝鮮のすまい」 P186より転載

の表現形式について永井規男氏の研究「摂丹型民家の形成について」<sup>21)</sup>を挙げ、「ある民家の形式が形成された背後の歴史的、社会的事情を明らかにしようとした研究」<sup>22)</sup>として高く評価し、民家形態の成立は村落内の階層関係、政治体制および地域の固有の条件に規定される<sup>23)</sup>ことを指摘している。

広間型の平面形態をAタイプ（広間型）とBタイプ（前座敷三間取）（図-4）に分類し、各部屋およびその構成要素と儀礼、信仰についての研究として大河直躬氏の「住まいの人類学」<sup>24)</sup>が挙げられる。この研究では、住まいにおける習俗や間取りに相違が生み出される仕組みに関して感覚的反応を挙げている。この感覚的反応は民族によっても異なり、歴史的にも変化するものと捉え、住まいにおける習俗や使われ方、行為は空間秩序を作りあげる作用を持つものであると指摘し、民家内部における構成要素の配置を基に各部屋の相互関係を論じている。このなかで大河直躬氏は対馬民家をAタイプ（図-4）に分類し、ダイドコ（広間）について「このダイドコの上部の梁組や周囲の戸棚を非常に立派に作り、あたかも家の格式を表現する空間」<sup>25)</sup>であり家格の表現と捉らえている。



A : 広間型

B : 前座敷三間取

- 1 : いろいろのある大きな部屋      2 : 客間  
3 : 寝間や家財の格納用に使われる部屋      4 : 土間

図-4 : 基本的な広間型の間取<sup>26)</sup>

さらに、本島民家を対象にした研究として持田照夫氏、大河直躬氏の「日本の農家の四つ間取の研究——広間型の追求——」<sup>27)</sup>がある。この研究では、ダイドコ（居間）の表現形式について居間は農民社会における家の観念を象徴する空間であり、そのような家の観念の視覚化として建築様式的な面で太い柱や差鴨居や板戸を使って堅固さや重々しさが強調されると指摘している。また、「長崎県の民家」<sup>28)</sup>においてもダイドコ周壁に使用される平柱は、「家の立派さをほこるため」<sup>29)</sup>とし、家格の表現に用いられたと報告している。

これらの研究では、本島民家を含む広間型の表現形式および特質の成立要因として社会的、格式、身分階層および地域特性との関連を第一義として位置づけているところに共通した観点が存在する。

### 2.2.3 集落を対象にした研究

集落の空間構成を対象にし、本研究と関連した主な既往研究は、以下のものが挙げられる。

民俗学の分野で対馬の「木坂」、「青海」、「仁位」の各集落を対象とした鈴木正崇氏の一連の研究<sup>30)</sup>が挙げられる。

木坂集落について木坂八幡神社にまつわる信仰の様相をとおして考察を進め、「木坂の村落空間は、北から南へ「神地」「人地」「葬地」と分類され、その境界に山が聳えているという形をとる。この「人地」が村落の内部空間であり、「神地」と「葬地」は外部空間である。」<sup>31)</sup>と捉え、さらに浄一穢の観念にもとづき、これらの複合した空間構成のあり方を論じている。また、民俗学的資料を加え、「青海」、「仁位」の各集落構成についても聖地、神社の伝承を基に聖地、祭地による聖地構成について論考している。

青海集落について「木坂ほど極端ではないが浄一穢を意識する度合いは強く、この考え方が両墓制成立の一因であろう」<sup>32)</sup>と指摘し、集落における両墓制の成立と〈聖・穢〉観念にもとづく集落の空間構成を明らかにしている。

仁位集落の聖地構成における「シゲ」、「フチ」および「タケ」について

それぞれ「森、川、山を霊地とする自然崇拜で集落から遠近感にもとづく、同心円的な聖地構成」について論じている。さらに「シゲ」は、「森を神聖視する「霊地」としての性格を持ち、麦作や米作など生業の守護を司どると共に、境界を示す意味合もある。」<sup>33)</sup>と指摘する。また、「フチ」について「フチのある川は、集落の外にありながらも人間の手の加わらない自然内に完全には含み込まれず、人間界と自然界の中間にある半自然の場に位置する。」と述べ、「タケ」についても「仁位周辺に聳える高い峰のことで、ヤマより高いとされて、神聖な霊地として崇拜される。」<sup>34)</sup>と位置づけている。さらに「山岳を介して天神を祭る太陽信仰を基底に置いた天神崇拜が重なり合っている。シゲ、フチ、タケという自然をめぐる祭祀には生業神、祖先祭祀、太陽信仰といった考え方が複合しているのである。更にこれらの自然崇拜をめぐる集落の内と外、中心と周辺に展開する、集落内聖地（森）と集落外聖地（山）の対峙と関連がある。」<sup>35)</sup>と論じ、同心円的な聖地構成<sup>36)</sup>を明らかにしている（図-5）。また、フチは、「集落の内と外に、シゲとタケという聖地を設定し、その間の干渉地帯にフチを配するといった構成をとっている。」と述べ、特に「水界の霊に関しては、対して下流を上流に、里に対して山を、優越させる指向がある」<sup>37)</sup>ことを明らかにし、〈下〉に対する〈上〉の優位性について貴重な指摘を行っている。

鈴木正崇氏が下流より上流の優位性を指摘するように本研究では、集落構成の基層に〈聖・穢〉観念による《カミ・シモ》観念にもとづき、集落（居住域）を中心として「海」より「山」の優位性に観点をおくところに、その共通性が認められる。本研究では、さらに生活領域において《カミ：山》への指向性を内在した観念を基本的な空間観念として位置づけた。

この一連の研究より本研究では、聖性に関する研究概念の構築に多くの示唆を得た貴重な研究である。

集落の構成とこれを取りまく空間観念との関係を論考し、本島集落の聖性および聖域としての山（カミ）との関連を考察するにあたり多くの示唆に富む研究として土井崇司氏による「日本における伝統的集住の空間構造に関する研究」<sup>38)</sup>が挙げられる。土井崇司氏は、この研究において古代の集落を対象として「集住の場所での〈親密な場所〉は部屋、家、集落、都市、景観、

国土というようなさまざまな段階においてその閉合性は、それぞれ、山や森林、樹木によって囲まれて、守られていることに特徴があった<sup>39)</sup>と論じ、さらに集住の場所は「山という聖なるもので象徴的に防衛され、聖化されている」<sup>40)</sup>と興味深い指摘を行っている。

以上が民家および集落の空間構成と聖性との関連についての本研究分野における到達点である。

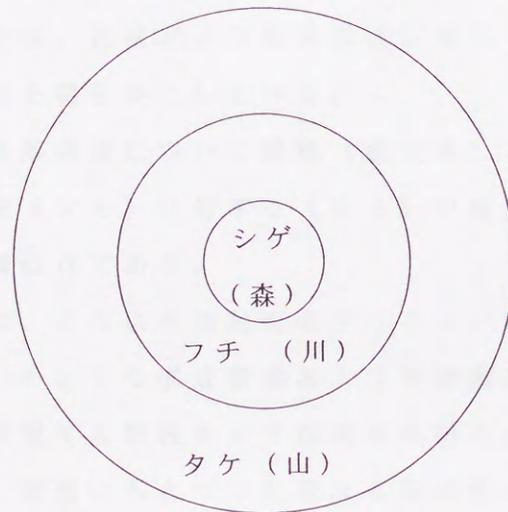


図 - 5 : 同心円的聖地構成

## 2.3 本研究の特徴と位置づけ

本研究分野における既往の研究に対する本研究の特徴および位置づけを以下に示す。

### ① 民家および集落を対象にした研究

民家および集落を対象にした坂本磐雄氏、鳴海邦碩氏の両研究において沖縄の居住敷地では、東方尊重および御嶽の位置を基点としており、バリ島の住居敷地内は基点となるサンガ（祠）の位置により決定された。また、集落構成についても明確な基点として「ナワ・サンガ」の方位陣を位置づけている。これらの研究では、民家および集落構成に対して明確な概念にもとづいた聖なる基点の存在を明らかにしている。

本研究において集落構成について俗域（居住域）を中心とし、基点となる聖なる山、または海《シモ》に対する《カミ》の優位性に視座を置いたところは、両研究との類似点である。

一方、本研究では、さらに本島民家のダイドコの周壁に偏在する平柱の分布とこの平柱をはじめとする構成要素および平面構成と聖性との関連を究明し、さらにここに顕現する聖性を示す指向をも明らかにした。また、集落構成を《カミ・シモ》観念にもとづいた聖なる指向性とこの周囲に存在する聖性との関連にもとづいた聖なる指向性をもって明らかにし得た。したがって、生活領域の基層に〈聖・穢〉性にもとづいた《カミ・シモ》観念を位置づけ、民家から集落の空間構成にいたる整序性の要因に指向性の概念を導入したところが本研究の特徴であり、両研究との相違点でもある。

### ② 民家を対象にした研究

本研究で本島民家の構成要素がもつ空間観念を生活領域に存在する聖性にもとづく象徴的体系のなかに位置づけた点は、西垣安比古氏および玉腰芳夫氏による場所論的研究と共通するところである。一方、本研究において特に平柱の配置分布に着目し、聖性を基層に据えた空間観念にもとづき数値化を図り、主屋の空間構成において聖性を示す指向を実証的に明らかにしたとこ

ろが両研究と相違する点であり、本研究の特徴である。

本研究では平柱をはじめとする構成要素の表現形式は、象徴的体系による空間観念の形象化として捉らえた。したがって、民家の空間構成および表現形式の成立は社会的、身分的格式および地域特性との関わりも認められるが、聖性・祭儀との関連に観点をおき論考するとき、空間秩序および表現形式の形成要因として明確に〈聖・穢〉観念が基本観念として位置づけられる。

本研究では、民家ひいては集落構成を総合的に捉らえ聖性・祭儀に主眼をおき指向性をもって空間観念を実証したところが、以上の研究に比しての特異点である。

### ③集落を対象にした研究

鈴木正崇氏による〈下〉に対する〈上〉の優位性の指摘は、本研究が集落構成の基層に存在する〈聖・穢〉観念にもとづく《カミ・シモ》観念を顕現する指向性に重点をおくところに共通性が認められる。しかし、本研究では、さらに具体的な建築的要素を対象とし、総合的観点にたち集落を民家の集合体と位置づけた。このことにより集落の空間構成は、民家に内在する聖性・祭儀にもとづく指向性を顕現した空間観念の延長上に成立することを実証的に明らかにしたところが、鈴木正崇氏の対馬における祭祀と村落空間に関する一連の研究との相違点である。

古代の集落が聖なる山に囲まれ、守られ、聖化した閉合性をもって〈親密な場所〉を構成することを論じた土井崇司氏の研究は、中世に宗儀を完成した天道信仰および山《カミ：聖域》にもとづく聖性と集落との関連を対象にした点において本研究との共通性が認められる。一方、本研究では、集落の空間構成における構成原理を聖性にもとづいた指向性をもって実証したところが土井崇司氏の研究と相違するところである。

また、土井崇司氏による聖なる山に囲まれ「閉合性」をもった古代の集落と「指向性」を内在する本島集落の空間観念との間に相違を生じせしめる要因および歴史的観点からみた、その変化時期の解明については、今後の課題として残されている。

本研究は、本島の民家および集落の空間構成における構成原理の要因とし

て聖性・祭儀による指向性を顕現した一連の空間観念を基本観念と位置づけた点が以上の既往の研究との相違点であり、また特徴である。

## 注記

- 1) 坂本警雄：「沖縄の集落景観」 1992年10月20日 九州大学出版会
- 2) 鳴海邦碩、アルディP. パリミン、田原直樹：「神々と生きる村 王宮の都市 パリとジャワの集住の構造」、1993年12月、学芸社
- 3) 前掲 1) P12
- 4) 前掲 1) P42
- 5) 前掲 1) P42
- 6) 前掲 1) P73
- 7) 前掲 1) P60
- 8) 前掲 1) P74
- 9) 前掲 2) PP. 73-74
- 10) 前掲 2) P74
- 11) 前掲 2) P75
- 12) 前掲 2) P73
- 13) 西垣安比古：「朝鮮のすまい」－象徴体系の構造論的研究－、人文学報、第60号、1986年3月、京都大学人文科学研究所
- 14) 玉腰芳夫氏：「古代の家」－場所の研究－ 1972年8月 日本建築学会論文報告集 第198号
- 15) 前掲13) P174
- 16) 前掲13) P186
- 17) 前掲14) P57
- 18) 前掲14) P58
- 19) 玉井哲雄：「近世における住居と社会」日本の社会史、第8巻、生活感覚と社会、1988年12月、岩波書店
- 20) 前掲19) P131
- 21) 永井規男：「摂丹型民家の形成について」 日本建築学会論文報告集 第251号 1977年 PP. 119-128
- 22) 前掲19) P115
- 23) 前掲19) P135
- 24) 大河直躬：「住まいの人類学」日本庶民住居再考、1990年10月、平凡社
- 25) 前掲24) P149
- 26) 前掲24) P94
- 27) 持田照夫、大河直躬：「日本の農家の四つ間取の研究 ー広間型の追求ー」、(財)新住宅普及会住宅建築研究所報、1978年
- 28) 長崎県教育委員会：長崎文化財調査報告書 第12集(前編)、「長崎県の民家」、長崎県緊急民家調査報告書、1972年
- 29) 前掲28) P22
- 30) 鈴木正崇：「対馬・木坂の祭祀と村落空間」、「日本民俗学」140号、1982年 「対馬・青海の祭祀と村落空間」 「稲・舟・祭」松本信広先生追悼論文集 大興出版 1982年 「対馬・仁位の祭祀と村落空間」、「日本民俗学」151号 1984年

- 31) 鈴木正崇：「対馬・木坂の祭祀と村落空間」、「日本民俗学」140号、1982年 P15
- 32) 鈴木正崇：「対馬・青海の祭祀と村落空間」 「稲・舟・祭」松本信広先生追悼論文集 1982年 大興出版 P484
- 33) 鈴木正崇：「対馬・仁位の祭祀と村落空間」、「日本民俗学」151号 1984年 P5
- 34) 前掲33) PP. 5-6
- 35) 前掲33) P10
- 36) 前掲33) P10
- 37) 前掲33) P6
- 38) 土井崇司：「日本における伝統的集住の空間構造に関する研究」、1994年1月、学位論文
- 39) 前掲38) P174
- 40) 前掲38) P244

### 第3章 対馬民家のダイドコにおける空間構成と聖性・祭儀

本島民家のダイドコおよびコヤに存在する平柱および主屋内部の空間構成を聖性・祭儀との関係に視座をおき論考する。

#### 3.1 研究の目的

本章は、民家の空間構成を平面形および構成要素と聖性・祭儀との関わりをとおして明らかにすることを目的とする。

対馬を研究の対象としたのは、以下の理由による。

- ①本島が離島という地理的環境にあるため、天道信仰が現在も存在している。
- ②生活の場（俗的空間）と天道山・シゲによる祭儀空間（聖的空間）とが対をなす状況など聖性・祭儀を含め、生活文化面に中世の遺制<sup>1)</sup>を残している。

以上のことから対馬が、本研究の対象として適していると考えた。このような地域の中に成立した民家は、この地域の聖性を反映した空間構成となったと考えられる。すなわち、本島の全域に存在する聖性が民家に影響を与えて顕現し、祭儀空間として本島民家の空間構成を特徴づけてきたと考えられよう。こうして具現化された民家の平柱は聖性の象徴的形象<sup>2)</sup>として成立したものと捉えられる。

## 3.2 研究方法

以上の研究目的に立脚して、本章では次の3つの項目について実証的に考察し、本島民家の空間構成を明らかにする。

- ①本島民家の特徴。
- ②ダイドコの空間の性格と祭儀。
- ③ダイドコと各部屋との空間相互の関係と聖性・祭儀。

①では実例を挙げダイドコ・ナンド系およびザシキ系に着目し、本島民家の平面構成を検証した。

②では、本島民家の空間的性格として、そこに天道にもとづく聖性の顕現とみられる祭儀空間の存在を実証した。

③では、主屋の平面形および構成要素を対象として空間相互間の関係を検証し、本島民家の空間秩序を聖性・祭儀との関連において考察した。このため、ダイドコの平柱に着目し、次の二つの要素を基に平柱の分布傾向を指向性という概念で、聖性・祭儀との関係を考察した。

A) 平柱の分布傾向<sup>3)</sup> と聖性・祭儀。

B) 平柱の分布上の指向性と聖性・祭儀。

A) では平柱の分布比率によって、ダイドコ内部での指向性の強弱を顕し得ると考えた。

B) では、ダイドコの各壁面における平柱の向きを、ダイドコ内部および隣接する空間への指向性と捉らえた。

この二つの点よりダイドコの空間構成と隣接する空間の関係を明らかにした。

### 3.3 ダイドコの空間構成と聖性・祭儀

#### 3.3.1 対馬民家の特徴

本島の民家主屋はダイドコ、ナンド、ザシキおよびドージが基本的な部屋である。本項では民家主屋の平面分類にあたって、ダイドコにナンドが必ず接していることと祭儀および年中行事との関連からダイドコとナンドを同じグループとして捉らえた。そこで民家主屋を①ダイドコを中心にドージ、サンジョウジキおよびナンド（オクナンド、ナカナンド）によるダイドコ・ナンド系と②ツギノマ、エンノマ、トコノマの畳敷きを主とするザシキ系とによる平面構成を次の2タイプに分類して考察する（図-1）。

タイプA：ダイドコ・ナンド系の表にザシキ系が配置されるタイプ。

タイプB：ダイドコ・ナンド系の表より上手・裏にザシキ系が配置されるタイプ。

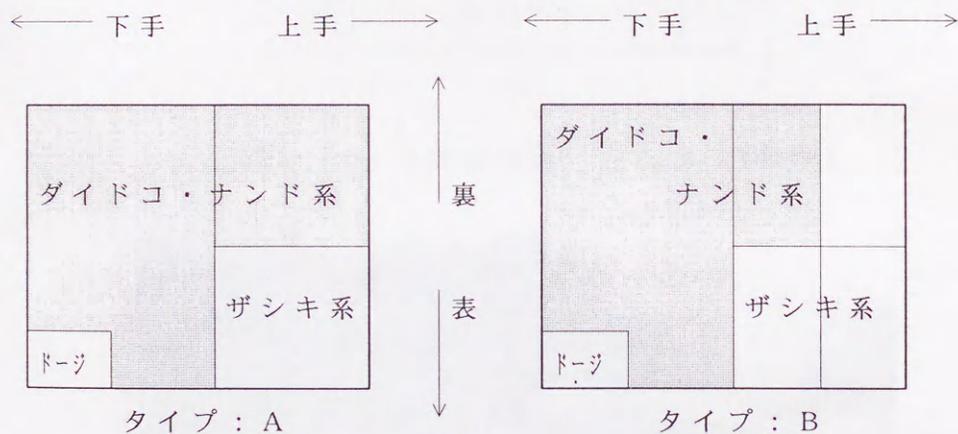
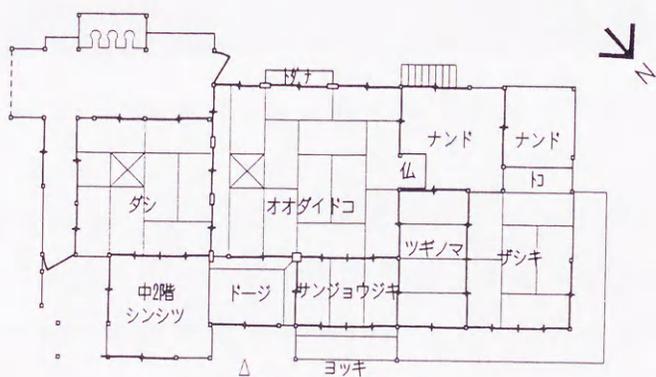


図-1 平面のタイプ

以下にタイプA、Bに対する実例を示し、検討する。

【タイプAの実例】

実例-1：主屋内部に作業用の土間はなく、イロリを設けたダイドコ、ダシ（炊事場）<sup>4)</sup> が主屋の下手の半分を占める。ダイドコ・ナンド系にザシキおよびツギノマからなるザシキ系が上手の表に配置される。ダイドコの表にはドーシおよびサンジョウジキとヨリツキ（式台）が配置される。ダイドコ、ナンド境のコドコ（三尺間、またはチュウジキとも呼ばれる）<sup>6)</sup> に仏壇が設けられ、ナンド側に張り出す。ダイドコは2.7×2.5間で畳寸法を基準とはせず、またナンドにも畳は使用しない。



実例-1：上県郡峰町 A氏宅（19C中）

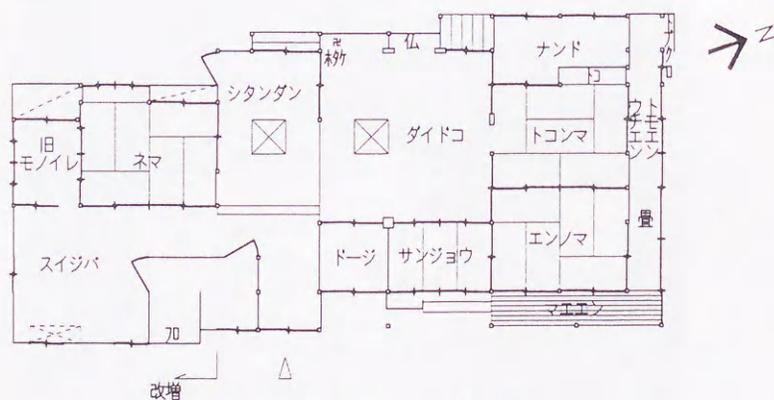


実例-1の写真-(1)：全景



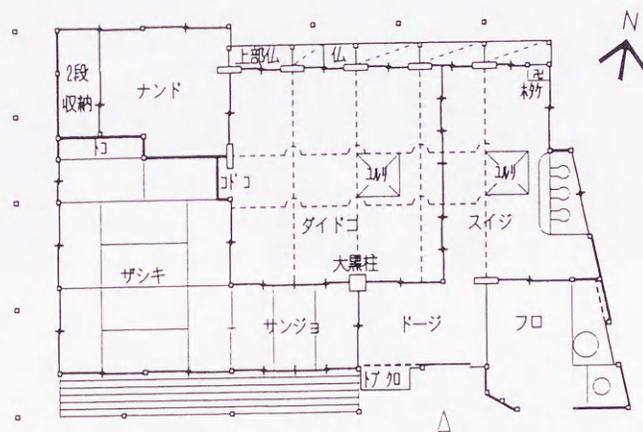
実例-1の写真-(2)：ダイドコ内部

実例-2：下手は改造しているが、主屋はダイドコを中心とし、下手にシタンダン（ダシ）が設けられ、ダイドコの裏に仏壇および下手寄りにホタケが祀られる。ダイドコの表にはドーシおよびサンジョウが設けられ、上手・裏のナンドにより、ダイドコ・ナンド系を構成する。上手の表にザシキ系（トコンマエ、エンノマ）が配置される。



実例-2：巖原町小茂田 I 氏宅（19C中）

実例-3：主屋はダイドコ・ナンド系の表にザシキ系が配置される。ダイドコの中程にユルリを設け、裏手に仏壇、戸棚および下手にホタケを祀る。上手・中央にコドコを設け表にはサンジョ、ドージを配置し下手にクドを設ける。ダイドコ周囲に平柱(1.8×0.46尺)が設けられ、柱間に規則性はみられない。表に大黒柱(1.25尺角)が建ち、上部にはヒキモン<sup>6)</sup>を組む。



実例-3：巖原町久根田舎 M氏宅(19C末)

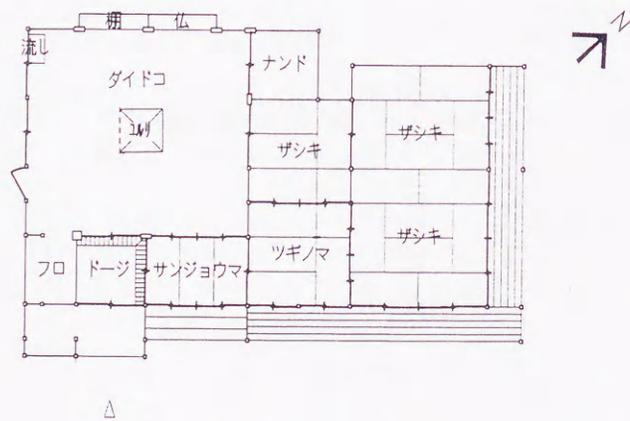


実例-3の写真-(1)：ダイドコ内部の平柱



実例 - 3の写真 - (2) : 大黒柱およびヒキモン

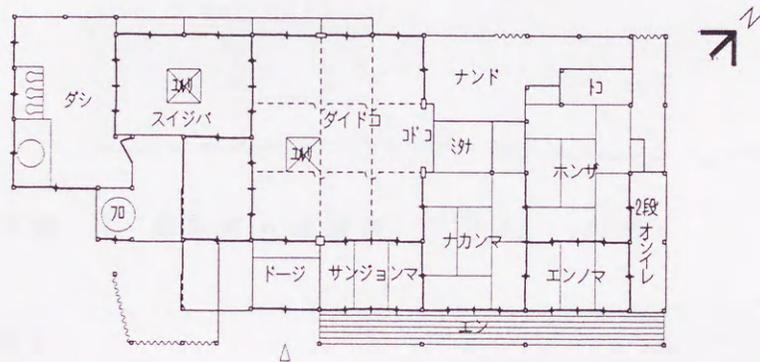
実例 - 4 : ダイドコ・ナンドに接して田の字型のザシキ系が構成される。  
 ダイドコの中程にユルリが配置され、下手裏に流しが設けられる。ダイドコ  
 の裏手に仏壇が設けられる。



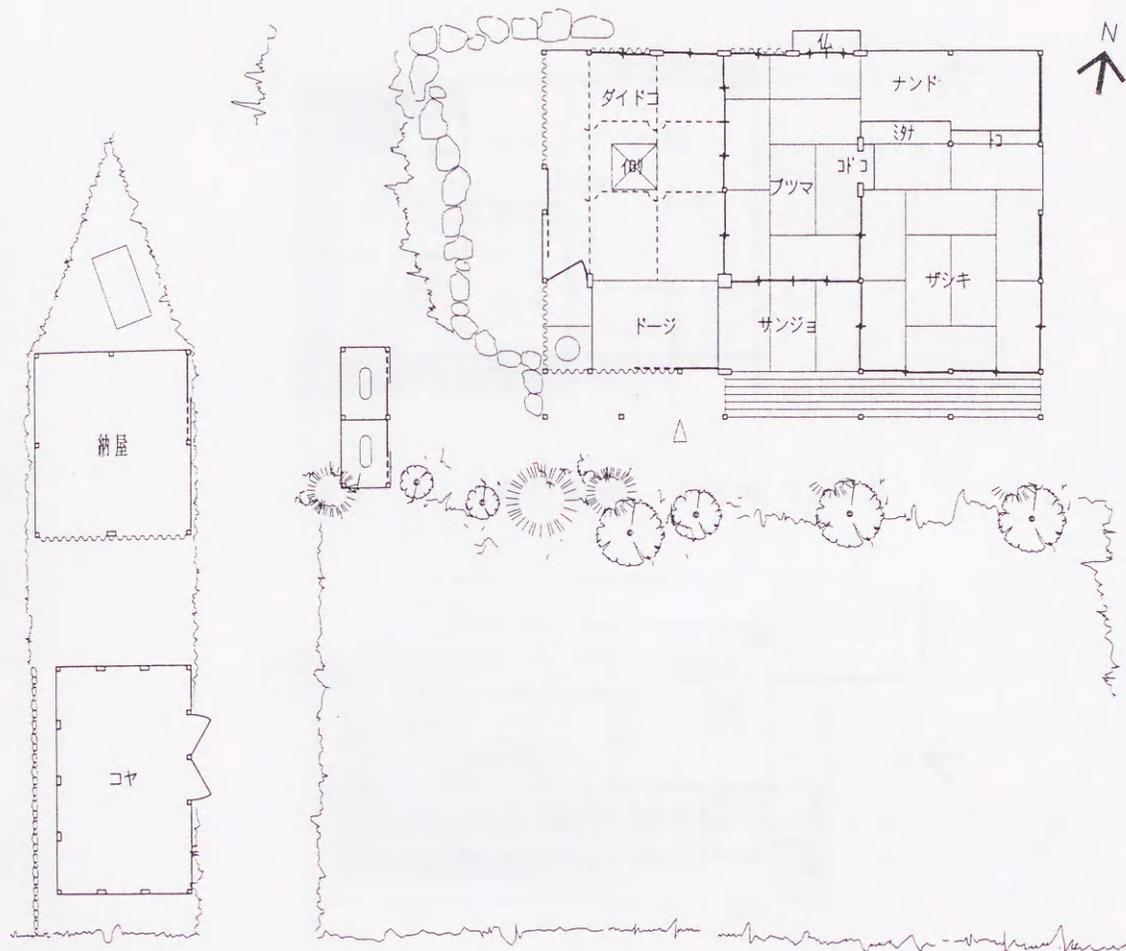
実例 - 4 : 下県郡黒瀬 T 氏宅 (19C末)

実例-5: ダイドコの上部にヒキモンを井桁に組み、2.5×3間のダイドコに接して上手・表にホンザをはじめとする畳および天井を張るザシキ系の部屋が配置され、上手・裏にはナンドを設ける。ダイドコの上手にコドコが設けられ、ホンザにもトコが配置されナンド側に張り出す。ナカンマの下手寄りにミタナが設けられる。主屋は畳と板敷きの部屋による表と裏の構成に相違がみられる。

実例-6: 敷地内は主屋、コヤおよび納屋からなる。平柱はダイドコおよびコヤに配置される。ダイドコとブツマに二分された空間は、平柱の配置および後付けの間仕切りより判断して3.5×2.5間の広さのダイドコである。ダイドコの裏に仏壇が設けられ、表にドーゾおよびサンジョが付く。上手の裏にナンド、表にザシキが配置され、ザシキの床の下手寄りにミタナが設けられる。



実例-5: 巖原町久根田舎 A氏宅(19C末)

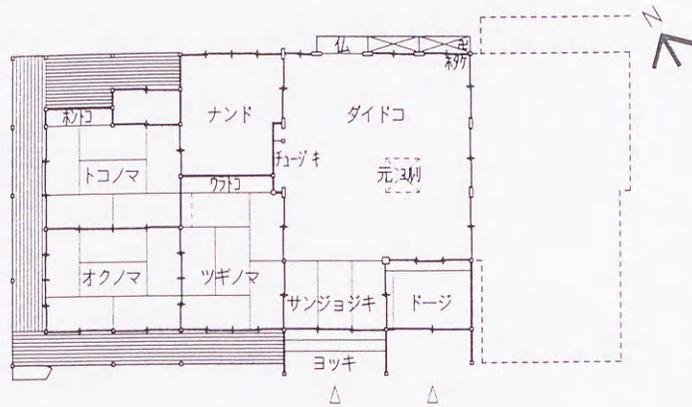


実例-6：巖原町久根田舎 I 氏宅（19C初）

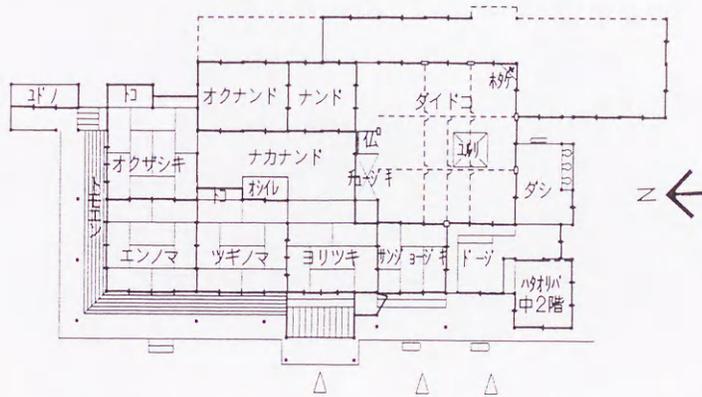
【タイプBの実例】

実例-7：ダイドコの正面には仏壇や戸棚が設けられ、下手・裏の柱上部にホタケが祀られる。表のサンジヨジキに接してヨリツキが付けられ、また畳敷きのツギノマ、オクノマ、トコノマによるザシキ系が表より上手・裏へ配置される。

実例-8：ダイドコの下手・裏にホタケを祀り、上手に仏壇を設ける。上部にはヒキモンが組まれる。ダイドコ・ナンド系（ナカナンド、オクナンド）に対し、表から上手・裏に向かって畳敷きのザシキ系（ツギノマ、エンノマ、オクザシキ）が配置される。主屋はダイドコ・ナンド系とザシキ系との間に畳と板敷きの部屋による表と裏、上手と下手との構成に相違がみられる。



实例-7: 上県町飼所 T氏宅 (19C末)

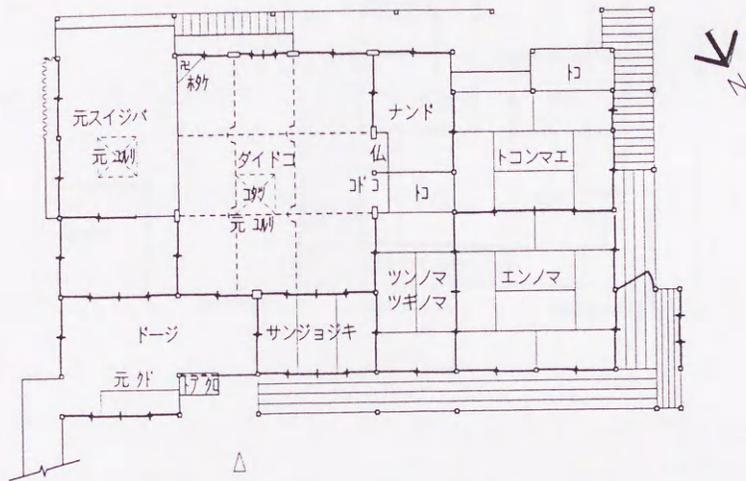


实例-8: 上県郡峰町 M氏宅 (19C中)



实例-8の写真: 表のヨリツキおよびドージ部分

実例-9：ダイドコの上手のコドコと仏壇が設けられ、下手・裏にはホタケが祀られる。ダイドコ上部にはヒキモンが組まれ、畳および天井が張られたザシキ系が上手の表・裏に配置される。また、トコンマエ、ツギノマの裏にトコが表に向い設けられる。



実例-9：巖原町大字阿連 E氏宅（19C末）

実例-10：敷地内部は主屋および前面に雑屋が配置され、作業場となる。また主屋の背後にヨマ（隠居屋）が設けられる。主屋はダイドコ・ナンド系にザシキ系が表より上手・裏に配置される。ダイドコ裏に仏壇が祀られ、トコノマにトコを配置する。

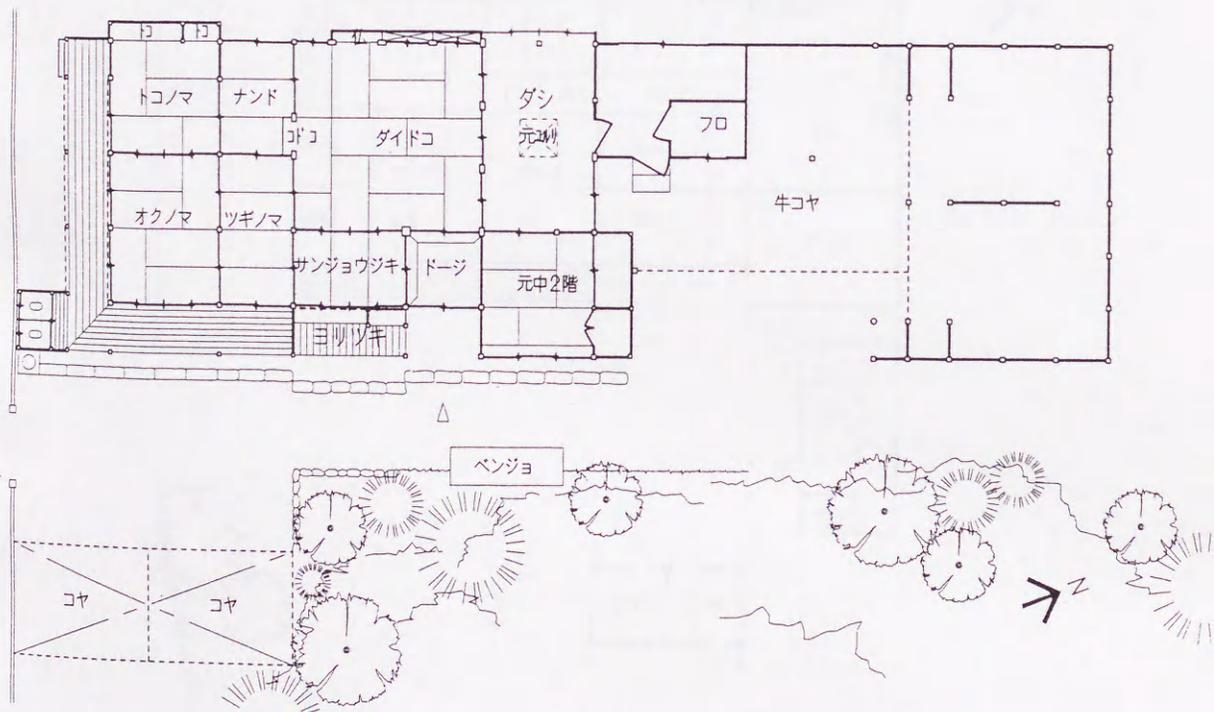
実例-11：主屋はダイドコの下手にダシが設けられ、ダイドコ・ナンド系にザシキ系のトコノマ、エンノマ、ツギノマおよびローカが配置される。ダイドコの裏手に仏壇が設けられる。敷地内部は主屋および雑屋からなり、コヤが敷地の外に配置される。本例では主屋、雑屋、コヤにより構成され、農作業は主屋の前面や雑屋およびコヤの前で行われる。



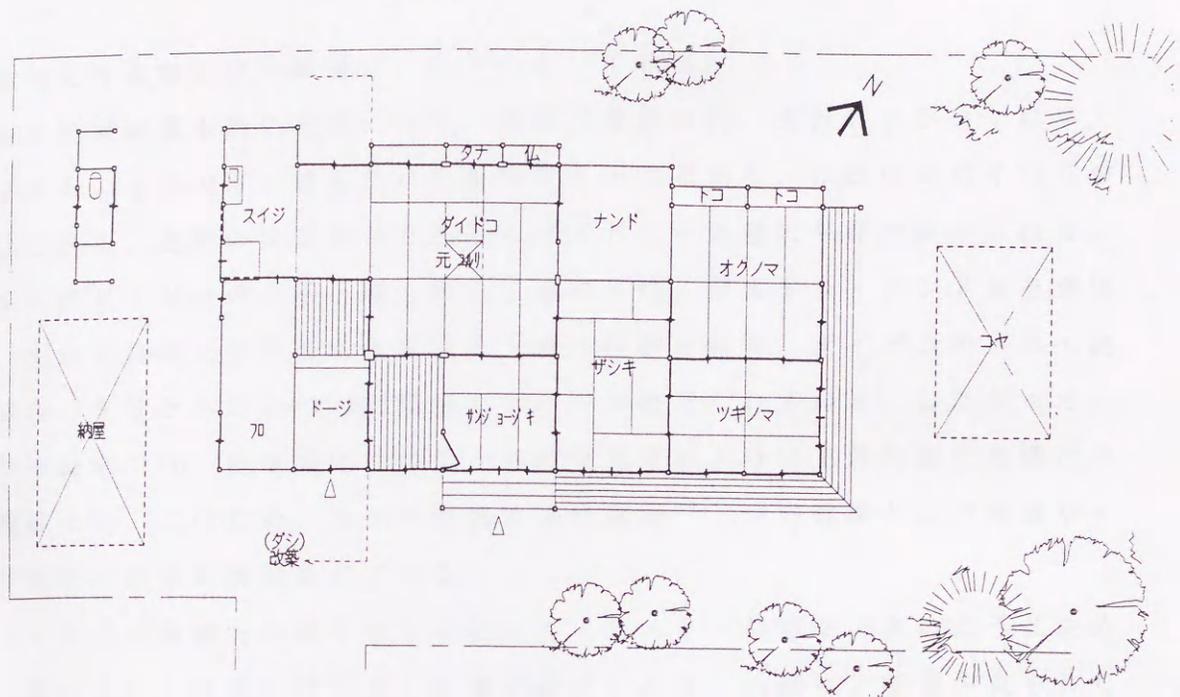
実例-12：敷地内部は主屋に接して雑屋が設けられ、主屋の前面にコヤが配置される。本島のコヤの配置は本例のように敷地内部に配置される場合、実例-11に示した敷地外部に設けられる場合があり、いずれも主屋とは別棟である。ダイドコは裏に仏壇、戸棚が設けられ、上手にコドコが配置される。ダイドコの表にドーゾおよびサンジョウジキに接してヨリツキが設けられ、下手にダシ（炊事場）と中二階が配置される。

実例-13：敷地内部は主屋の上手にコヤおよび下手に雑屋（納屋）が配置される。主屋の下手のダシ（炊事場）部分は改造される。ダイドコ・ナンド系の表より上手裏にザシキ系が配置される。

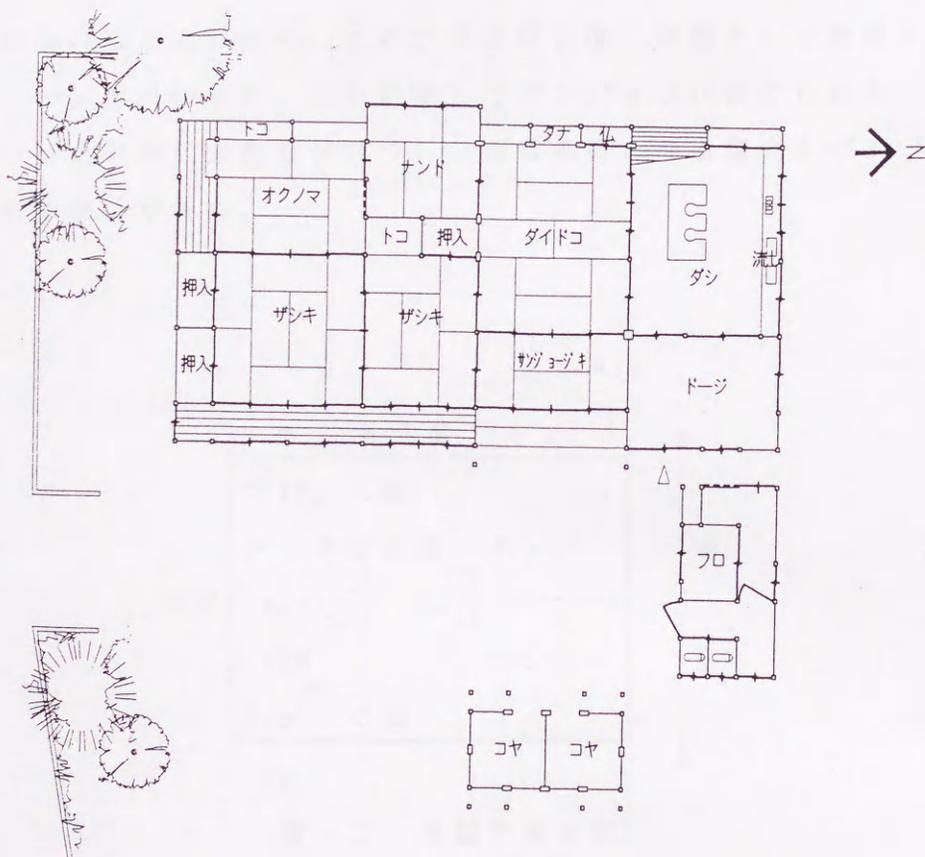
実例-14：主屋の前にコヤおよび下手寄りに雑屋が配置される。主屋の下手にクドを中央に設けたダシ（炊事場）が設けられ、ダイドコ・ナンドの表より上手裏にザシキ系が配置される。ダイドコの上手裏に仏壇を設け、オクノマおよびザシキの上手裏にトコが配置される。



実例-12：上県町仁田 I 氏宅（190末）



実例 - 13 : 巖原町大字久和 K氏宅 (19C末)



実例 - 14 : 巖原町久根 T氏宅 (19C末)

実例より本島民家の構成は、以下のようである。

本島民家は基本的に主屋、コヤ、雑屋で構成され、主屋およびコヤは平入りである。主屋内部で最も広い部屋がダイドコであり、ほぼ中央にイロリが設けられる。主屋のほぼ半分を占めるダイドコの周壁に平柱が設けられる。ナンドがダイドコの上手・裏に接して設けられ、ダイドコ・ナンド系を構成し、ザシキ系が上手の表または表より裏へ配置される。ダイドコの下手・表に間口、奥行ともに1~1.5間程度のドーシが設けられている。したがって、本島の民家では、他地域における一般的な民家のように主屋内部に作業用の土間はない。このため、コヤに付属する作業場<sup>7)</sup>や乾燥場および雑屋がその作業場の用途に使用されている。

ダイドコの各面を分析するため仮にA・B・C・D面を、次のように決めた(図-2)。A面には戸棚、仏壇が設けられる。仏壇は、壁面中央もしくはナンド寄りに配置される。A、D面の隅部の柱上部にホタケが祀られる場合が多い。B面にはナンド、ザシキの出入口が設けられる。B面中央部にコドコが設けられることが多く、このコドコは仏壇、戸棚として使用される。C面にはドーシが設けられ、これに接してサンジョウが設けられる。サンジョウとドーシとの間に大黒柱が建つ。D面は外壁となる場合とダシ(炊事場)が設けられる場合がある。

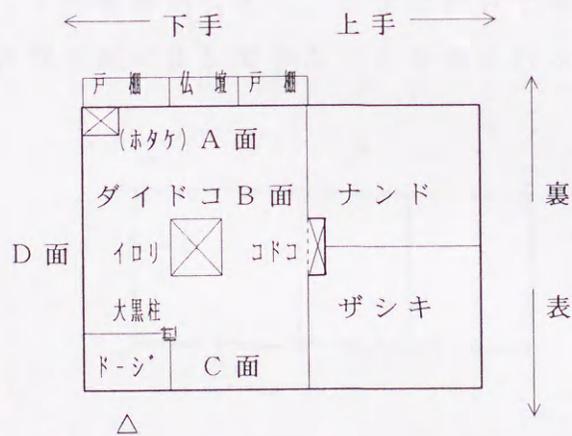


図-2 平面の基本型

ナンドは主屋の上手・裏に配置され、ダイドコと同様に畳寸法によらない。ここにナンドとダイドコの類似が見られる。

ザシキ系ではトコノマ、オクノマ、ツギノマからなり畳寸法を基準とし、天井を張る。ツギノマ、オクノマの裏手にトコが設けられ、トコの手寄りにミタナが配置される。

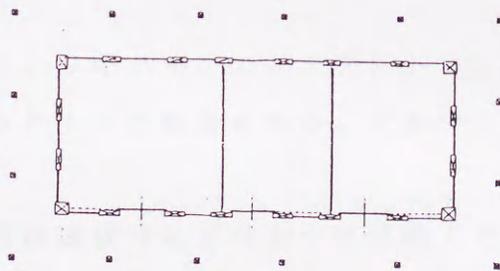
以上のようにダイドコが本島民家の中心をなすとともにダイドコとナンドを同一のグループとして捉らえることにより、ダイドコ・ナンド系とザシキ系とが空間構成上において明確に相違することが本島民家の特徴である。

### 3.3.2 ダイドコの性格と祭儀

本項では、ダイドコに設けられた平柱の配置構成と聖性・祭儀との関連を分析し、ダイドコの性格および主屋全体に対するダイドコの空間の性格を考察する。

1) 平柱の構成上の特質は、次のようである。

- ① 対馬民家の特徴である平柱は、主屋のダイドコおよびコヤの身舎部分の周壁に特定して使用される特質がある（図-3）。
- ② 平柱の配置は、ダイドコでは四周の壁に使用され、コヤでは、四隅を角柱とし、それ以外を平柱とするのが基本である。いずれも平柱は石場立とし、軒桁にたっしており、軒桁以下の構造は同じである。
- ③ コヤは穀倉としての性格がつよく、コヤにおいて平柱を使用する構造的、意匠的な必要性は主屋に比して少ないと考えられる。ゆえに、コヤの平



・長崎県文化財指定申請書(1976)より転載：藤原町権根

図-3 コヤの平面図および平柱

柱の使用は別の意味が考えられよう。それを、ここでは聖性の顕れと考える<sup>8)</sup>。

2) 平柱とする形態上の必然性としては、民俗事例としてイヤ(産後の胎盤)処理<sup>9)</sup>が挙げられる。イヤを神霊の宿る特別の木<sup>10)</sup>(大きな松の木)の下に埋める習俗がある。子供の具合が悪いと地面に近い床下の柱にくくりつけることも報告されている。このように、イヤは子供に影響を持つものと考えられ、子供の成長はイヤ処理の善し悪しで決まると考えていた<sup>11)</sup>。本島では、柱に必要以上に太い松材を用いることが多い<sup>12)</sup>。このようなことから本島では、大きな松の木を象徴して見付けが広い平柱を用いる慣習が顕れたとみられる。これは、聖性・祭儀性の顕れと考えられる<sup>13)</sup>。

3) 年中行事からみた本島民家の空間構成上の特質は、次のようである(表-1)。

ダイドコのほぼ中央に設けられたイロリ(ユルリ)は正月にカケモンやコウジンが祀られる。上手中央部のコドコは仏壇、戸棚として使用され、また正月には山の神、テガキ<sup>14)</sup>が祀られる。下手のダシまたはドージにも正月にカケモンが飾られる。

ダイドコは上部にヒキモンを掛け天井を設けず、天井を張るザシキ系とは空間の認識において相違がみてとれる。

ウチノカミ(祖先神)が祀つられるナンド<sup>15)</sup>はナカナンド、オクナンドによる発展が見られ、ダイドコの上手・裏に配置されダイドコとの一対の基本的構成を成していた。

ザシキ系ではオクノマ、ツギノマ、エンノマ、トコンマエによる畳敷きの部屋となり、天井が張られトコが配置される。ミタナ、施ガキが設けられ仏教的行事を主とする。

したがって、主屋の空間構成は以下のように要約できる。

①ダイドコ・ナンド系では、ダイドコにおいてホタケをはじめとする正月行事や生産に関連する農耕神を主とした祭儀が行われる。

ナンドは、ウチノカミが祀られ、本島民家においてダイドコとともに強い

表 - 1 年中行事<sup>16)</sup>

構成要素 祭儀内容	ダイドコ・ナンド系						ザシキ系			祭儀	
	ダイドコ						ナンド	ザシキ			
	隅部 柱上	イロリ クド	コドコ 三尺間	ドージ	大黒柱	ダシ	上部	トコ ノマ	押入		エン ガワ
1 ホタケ 正月	○										民間 信仰
2 コウジン 正月 5, 9	○	○									
3 カケモン 正月		○		○		○					
4 山の神 正月			○								
5 テガキ 正月			○								
6 七草ガユ 正月					○						
7 ウチノカミ 正月							○				
8 お日待ち 正月								○			仏教 行事
9 地主様 6月								○			
10 ミタナ 7月									○		
11 施ガキ 7月										○	事

- ①ホタケ(ホタケサマ)：ホタケは農耕神であり、ダイドコの下手・裏の柱上または戸隠内に祀られる。ホタケ信仰は本島一円に分布する天道信仰の家屋内祭儀と捉えられる。<sup>17)</sup>
- ②コウジン：ホタケと同じ神であるとするところもありイロリ、クドまたは大黒柱に祀られる。本島のコウジンは祟る神、荒ぶる神でもある。<sup>18)</sup>
- ③カケモン：魚、野菜などをつるした年なわをムシロにはりイロリ、ドージまたはダシに飾る。
- ④山の神：天道信仰でも聖地信仰でも、崇拜の対象が山である場合が多い。山の神信仰は山岳信仰の一つの現れであるが、家屋内部と各自の持ち山で祀られる場合がある。神社信仰よりはるかに日常生活に密着しており、ダイドコのコドコに祀られる<sup>19)</sup>。
- ⑤テガキ：年賀の客をもてなす飾りとして、御幣をコドコに祀る<sup>20)</sup>。
- ⑥七草ガユ：大黒柱の下にまな板、包丁、すりこぎ、しゃくしを持って行き、謡を唱えつつかゆを作って祝う<sup>21)</sup>。
- ⑦ウチノカミ：祖先神ともいわれ、ナンドで曲げものに小石を入れ祀る。ナンドは信仰上尊重される<sup>22)</sup>。
- ⑧お日待ち：伊勢講ごとに赤飯雑煮を床の間に供えて祀る<sup>23)</sup>。
- ⑨地主様：六月土用中各戸で草を七たば束ねて、床の間に供え祀ってから、これを屋敷の一隅に石または祠を祀る地主様に供える<sup>24)</sup>。
- ⑩ミタナ：ザシキやツギノマの床の間または押入の下段に櫃を組み立て祖先の位牌や供物を飾る。かつてはテボ、飯台、机などを並べて雨戸を1枚のせて作った<sup>25)</sup>。
- ⑪施ガキ：縁側に施ガキだなを作り、位牌を飾る<sup>26)</sup>。

聖性が存在する。また、ナンドは日常的な目的性よりも聖性の象徴性が著しく高く<sup>27)</sup>、家のなかの聖なる秘所<sup>28)</sup>と指摘される。

②ザシキ系は、盛大に行われる盆行事にミタナ（盆棚）<sup>29)</sup>、セガキが祀られ、仏教的行事が主である。日常の礼拝では、ダイドコの裏または上手に設けられる仏壇で行われる。しかし、盆行事では公式な仏教行儀がザシキのミタナへ位牌、供物を移動しザシキで行われる。

このように主屋および敷地内部で行われる年中行事は、その大半がこのダイドコで行われる。ダイドコ・ナンド系で行われる祭儀の内容は、農耕神をはじめ民間信仰を主としたものである。これに比して、ザシキ系では仏教行事が主である。本島民家の平面構成は、ダイドコが空間構成上の中心をなすとともに祭儀に関わる年中行事および祭儀的設備が重点的に施されており、ダイドコ・ナンド系とザシキ系とは祭儀的空間認識に相違が認められる。つまり、本島民家の特徴はこのような二元的構成を顕現した平面形態であったとみなし得る。

4) 平柱の分布は、本島以外にわが国の古代の遺跡において静岡県の上野原遺跡、秋田県北秋田郡鷹巣町小ケ田、男鹿市脇本字小谷地の発掘、鷹巣町綴子字胡桃館の発掘ならびに藤原宮第41次調査中藤原宮の前身建物の遺構からの出土が確認されている。さらに、わが国の周囲における長方形断面の柱はアジア東南部からオセアニアにかけて分布し、こうした平柱はかつて広い範囲に分布していたと考えられる。さらに、蘭嶼島の民家に使用される長方形断面を成す親柱 (tomok, tozak) は、精神的価値が高く、諸儀礼はこの親柱を中心に行われると報告<sup>30)</sup>されており、平柱と聖性・祭儀との関連を示唆する貴重な事例といえる。また、本島のように平柱が集中的に分布している事例は珍しく、本島を含めた広い範囲に共通した観念の存在を示唆し得る。

本来、構造的には角柱での処理が可能と考えられる。しかし、本島において聖屋性をもつコヤならびに主屋のダイドコに特定して、これだけ平柱が使用されるところに聖性・祭儀との関連を示唆し得る。構造的処理より聖性・祭儀との関わりに必然性があったと考えられる。したがって本島民家のダイドコの平柱は聖性を顕現し、聖性の象徴的形象と考えられる。

以上の1)～4)より本島民家のダイドコは、空間構成上の中心をなすとともに祭儀に関わる年中行事および祭儀的設備が重点的に施されており、平柱と聖性・祭儀との関連が指摘できる。

### 3.3.3 ダイドコにおける平柱の分布と聖性・祭儀

次に、ダイドコの平柱の分布傾向が示す指向性について検討し、これと聖性・祭儀との関連を考察する。

#### 1) ダイドコの平柱の寸法と分布

平柱の断面形態を仮に長辺を(X)、短辺を(Y)とすると(図-4)、平柱は表-2に示すように約 $56 \times 14$ CMから $19 \times 9.5$ CMとかなりの幅がある。見付け(X)と見込(Y)の比率をみると、1.7から4倍となり、平均比率は2.35となる。

ダイドコの四周壁面上での平柱の配置は、A壁面を三～四分割するものが多く、C壁面では、大黒柱がドーシ寄りに建ち、平柱の使用は少ない。梁行き側のB、D壁面では、三つ割りする傾向が強い。平柱の柱間寸法に規則性はみられない。

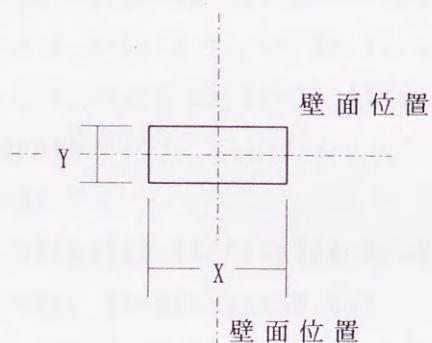


図-4 平柱の断面形態

表 - 2 平柱の形態

NO	X × Y (mm)	比率 (X/Y)	所 在
2	330×145	2.28	藤原町久根田舎
9	315×125	2.52	修町大字橋
11	225×135	1.67	豊玉町
12	260×125	2.08	豊玉町大字田
13	280×128	2.19	小茂田
14	330×128	2.58	小茂田
15	370×132	2.80	藤原町久根田舎
16	280×140	2.0	豊玉町横浦
22	288×136	2.12	上対馬町大浦
25	560×140	4.0	藤原町久根田舎
26	385×150	2.57	豆酸
34	192.5×95	2.03	上県町領所
35	240×120	2.0	上県町領園
36	240×140	1.71	上県町大字田ノ兵
37	220×130	1.69	仁田領所
39	320×125	2.56	上県郡佐養
40	320×125	2.56	上県郡左養
41	300×150	2.0	三根大字中村
42	260×140	1.86	豊玉町仁位
43	260×140	1.86	小茂田
44	400×110	3.6	藤原町上槻
45	470×120	3.92	藤原町久根田舎
46	300×125	2.4	藤原町大字阿達
47	245×130	1.88	曹
48	300×120	2.5	琴
57	290×135	2.15	美津島町大字鶏知
平均	306.9×130.3	2.35	

X : 長手方向の断面寸方 Y : 短手方向の断面寸方

・以下のものは、平柱の分布は確認できるが、そのX×Yは確認できなかった。

※ - a : 1, 4~8, 10, 21, 24, 32, 33, 55, 56

※ - b : 3, 17~20, 23, 27~30, 49~54, 58

藤原久根田舎 : 31

位田領所 : 38

※ - a : 長崎県教育委員会 長崎文化財調査報告書 第12集(前編)『長崎県の民家』長崎県緊急民家調査報告書 昭47

※ - b : 九州産業大学工学部 建築学科 野村研究室 昭56, 4調査

・NOは表-3の( )の番号に対応する。

## 2) 平柱の分布傾向と聖性・祭儀

ダイドコ周壁の平柱の分布状況を各壁面単位で見ると、平柱の配置は均一ではなく、分類の2面と3面とで約88%が設けられている。2面型では、形態2)のAB面型が最も多く、AD面型がこれに続き、この二つの型で約8割をしめる(表-3)。

3面型では、ABD面型が23戸(74%)と最も多く、ABC面型が、7戸(23%)と続き、この二つの型で約97%になる。

各壁面ごとにA面、B面、D面、C面の順となり、正面性(A面)、側面性(B、D面)、表面性(C面)の順に平柱が多く設置されている。

二面の壁面の組み合わせで見るとA・B面、A・D面、B・C面、C・D面の順となる。

以上から、平柱の配置はA壁面の正面性およびA壁面・B壁面の交差部が強調され、C壁面ならびにD壁面が弱い配置となっている。

一方、ダイドコの周壁に施された意匠、生活形態ならびに聖性・祭儀については次のようである。

① A壁面には仏壇や戸棚が設けられ、正面性を強調した意匠となっている。

② B壁面にはコドコが設けられ、ザシキと聖性を内在するナンドが隣接する。

③ C壁面に出入口(ドージ)が設けられ、表にあたる。

④ D壁面は、下手の妻側にあたり、給人層では、炊事機能としての「ダシ」が設けられ、「ホタケ」が祀られ、聖性がみられる。

以上から、平柱の配置傾向はA面を最も強調し、側面B、D面がこれにつづく。このことは、祭儀意匠に関する空間構成とナンドの聖性・祭儀とが関連した結果と考えられる。

表 - 3 平柱の分布状況別分類

分類	形態	内 容	合計
1面 3戸/58戸=5.17%	1)	  	3戸
2面 20戸/58戸=34.48%	1) 6戸/20戸=30% 6戸/58戸=10.34% 2) 11戸/20戸=55% 11戸/58戸=18.97% 3) 2戸/20戸=10% 2戸/58戸=3.45% 4) 1戸/20戸=5% 1戸/58戸=1.72%	                   	20戸
3面 31戸/58戸=53.45%	1) 7戸/31戸=22.58% 7戸/58戸=12.02% 2) 1戸/31戸=3.23% 1戸/58戸=1.72% 3) 23戸/31戸=74.19% 23戸/58戸=39.66%	                              	31戸
4面 4戸/58戸=6.9%	1) 4戸/58戸=6.9%	   	4戸 58戸

※ダイドコの各壁面位置： ※便宜上内容例の向きは左勝手とした。

※実線：平柱が存在する壁面。 ※破線：平柱は存在しない壁面。

### 3. 3. 4 平柱の分布上の指向性と聖性・祭儀

本項では、ダイドコの平柱の分布傾向と聖性・祭儀との関係をもとに、この平柱の指向性<sup>31)</sup>という概念を導入して、ダイドコに隣接する空間の聖性・祭儀との関連を考察する。そこで、ダイドコの各壁面上での平柱の分布状況(表-3)を、次の3タイプ(表-4)に分けて分析した。

- (I) 平柱が壁面の中央部に分布し、かつ端部の平柱の見付け方向が壁面方向を向く場合。
- (II) 平柱が壁面の中央部にのみ分布し、端部には平柱が存在しない場合。
- (III) 平柱は壁面の中央部に分布せず、端部の平柱の見付け方向が壁面方向を向く場合。

上記の3タイプのもつ指向性は、以下のように捉らえる。

- (I) 型は、各壁面からの中心部への指向性(正面性)および壁面方向(隣接する空間)への指向性として捉らえる。
- (II) 型は、各壁面から中心部への指向性(正面性)として捉らえる。
- (III) 型は、壁面方向(隣接する空間)への指向性として捉らえる。

ダイドコの周壁における各指向について平柱の分布状況(表-3)より戸数比(表-5)を求め、指向性を図示した(図-5)。これより、次のことがいえる。

周壁面における全要素(各壁面の中央部・端部)を対象とし、ダイドコ全体のなかでの指向性を考察する。

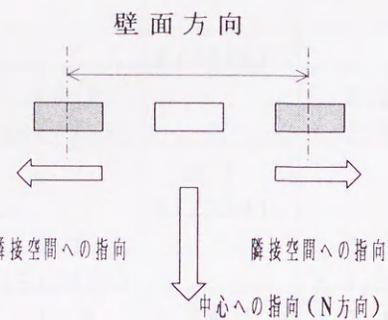
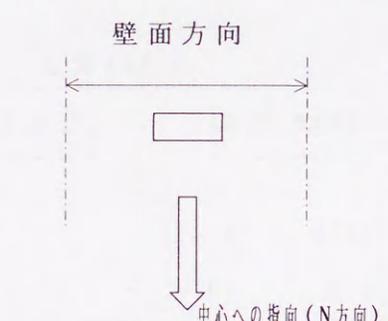
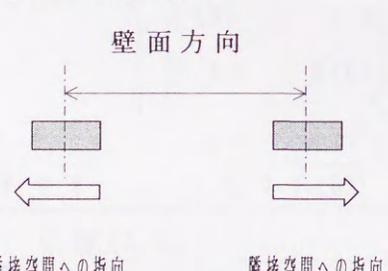
全指向性のうちA(N)(25.0%)が最も高い指向を示している。すなわち、ダイドコ全体においてA壁面からの正面性が、強調された構成といえる。このことは、ドージ、ヨリツキからの正面性の意匠を強調したものと考えられる。B(N)(21.0%)がこれにつづき、ダイドコ内部でのA(N)につづき正面性の意匠とみられる。このことは、コドコが設けられるB壁面に隣接する部屋の祭儀性を顕現したものと考えられる。

以上より、ダイドコの平柱の分布上の指向性は、A壁面、B壁面の異なった性格による正面性がともに強調された表現となっている。すなわち、祭儀

性によるB壁面の正面性とドージからみた生活上のA壁面の正面性との二重の正面強調構成がみられる。

さらに、隣接する空間への指向性としては図-5に示すように、A壁面からB壁面へ方向としてA(B)(10.7%)と最も高い数値を示している。これは、B壁面裏側への指向を示したものと考えられる。一方、C壁面からB壁面方向のC(B)(0.9%)は、低い数値を示す。このような、B壁面の表と裏側における平柱の指向の差異は、B壁面に隣接するナンドとザシキの聖性・祭儀の差異<sup>32)</sup>によるものと考えられる。

表 - 4 平柱の分布型と指向性との関係

	凡例 (表-3)	壁面のタイプと指向	指向の内容
(I)	<p>壁面方向</p> 	<p>壁面のタイプと指向</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平柱が壁面中央部に分布する。</li> <li>端部の平柱が壁面方向を向く。</li> </ul> 	<p>指向の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>中心部 (N: 正面性) への指向を示す。</li> <li>端部 (隣接空間) への指向を示す。</li> </ul>
(II)	<p>壁面方向</p> 	<p>壁面のタイプと指向</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平柱が壁面中央部に分布する。</li> <li>壁面端部には平柱は存在しない。</li> </ul> 	<p>指向の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>中心部 (N: 正面性) への指向を示す。</li> </ul>
(III)	<p>壁面方向</p> 	<p>壁面のタイプと指向</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平柱は壁面中央部に分布しない。</li> <li>端部の平柱が壁面方向を向く。</li> </ul> 	<p>指向の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>端部 (隣接空間) への指向を示す。</li> </ul>

※分布状況別分類 (表-3) の凡例および指向との関係。

 : 壁面端部の平柱を示す。

 : 壁面における平柱の分布を示す。

表 - 5 平柱の分布状況による各壁面の指向性 (%)

方向別・戸数比		各壁面				合計
		A面	B面	C面	D面	
N方向	戸数比	25.0	21.0	5.4	16.1	67.4
	戸数	56(/224)	47(/224)	12(/224)	36(/224)	151(/224)
A方向	戸数比		3.6		4.0	7.6
	戸数		8(/224)		9(/224)	17(/224)
B方向	戸数比	10.7		0.9		11.6
	戸数	24(/224)		2(/224)		26(/224)
C方向	戸数比		1.8		4.0	5.8
	戸数		4(/224)		9(/224)	13(/224)
D方向	戸数比	6.7		0.9		7.6
	戸数	15(/224)		2(/224)		17(/224)
合計	壁面別比	42.4	26.3	7.1	24.1	100
	全戸数	95(/224)	59(/224)	16(/224)	54(/224)	224(/224)

※各欄の下段は戸数、上段は総数に対する戸数比(%)を示す。

※各壁面のN, A, B, C, Dは、図-5の各指向に対応する。

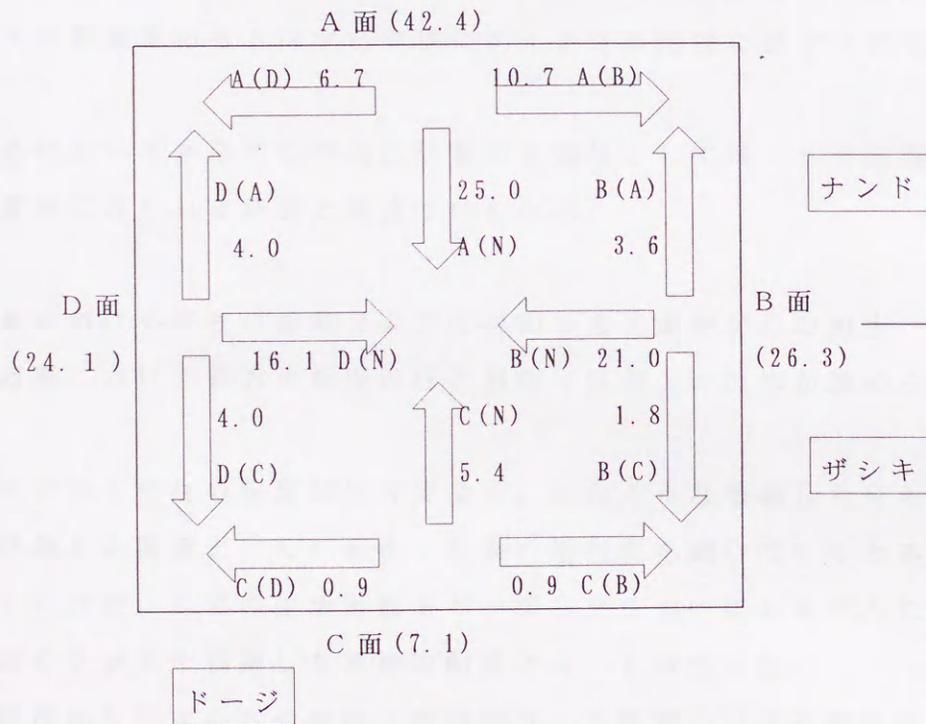


図 - 5 平柱の指向性 (%)

### 3.4 小結

対馬全島に存在する聖性が民家の空間構成に影響し、民家の空間構成はその聖性の象徴的顕現であると捉え、対馬民家のダイドコに特定して使用されている平柱の配置に特に着目して、聖性・祭儀との関連を考察してきた。

平柱は、主屋ダイドコおよびコヤの周壁に特定して用いられており、構造的必然性よりは聖性の顕現とみられる。このように判断したる主な理由は、以下のとおりである。

1) ダイドコは、次の理由により生活の中心的機能をもつと共に祭儀空間として性格づけられる。

- ①ダイドコが空間構成上の中心であり、ダイドコ・ナンドを同一のグループとして捉えられたこと。
- ②ダイドコは、聖性・祭儀の象徴的形象として体系化された空間構成であったこと。
- ③年中行事からもダイドコは祭儀空間としての性格が強いこと。
- ④平柱が聖屋性のあるコヤと同様にダイドコの周壁に設けられていたこと。

2) 本島において多用する平柱の形態的必然性としては、イヤ処理や子供に関わる習俗にみられる祭儀と関連づけられる。

3) 本島における平柱の存在およびわが国の古代遺跡からの出土、さらにアジア東南部における長方形断面の柱と聖性・祭儀との関連が認められる。

4) ダイドコの平柱の配置は均等でなく、次のような強調した分布となっており、祭儀との関連とともに聖性・祭儀の指向性を顕していることとみなし得る。

- ①ダイドコが、日常の生活形態やドージ、ヨリツキによる平入に対し、A壁面の正面性を強調した平柱の配置となっていたこと。
- ②B壁面からの中心への平柱の指向性は、A壁面につぐ正面性を強調した分布となっており、隣室の聖性・祭儀の影響とみなし得たこと。
- ③A壁面ではB方向に平柱が最も強調された配置となっており、これに対

してC壁面上手方向では、低い分布となっていた。これは、B壁面上手のナンドのもつ聖性の影響とみられたこと。

- ④下手側面(D面)、表壁面(C面)では、平柱の配置は少なく、ダイドコ正面(A面)と上手側面(B面)との対比が鮮明な配置となっており、ダイドコ全体において偏った空間構成となっていたこと。

以上の諸点より、ダイドコにおける平柱の使用およびその配置構成は、構造的必然性より生活の場としての正面性および聖性・祭儀に関連した構成となっているといえる。つまり、ダイドコの空間構成は民間信仰による聖性・祭儀と身分、格式による正面強調との重層的表現と結論づけられる。

## 注記

- 1) 宮本常一：「日本の離島 第一集」、宮本常一著作集4、未来社、1980年、P 247：「郷村においてはなお中世的な同族結合様式がながくのこっていて、中心をなす本家は大きな勢力をもち、隷属農民によって所領の経営を行っているものも少なくなかった。」と述べている。こうした中世的遺制は、現在でも本島の村落組織のなかに、かつての給人、本家、分家として日常生活のなかにもいきている。また、祭儀面では天道信仰が重要事として存在しており、この遺制の一つといえる。
- 2) ミルチャ・エリアーデ：「聖なる空間と時間」、ミルチャ・エリアーデ著作集 第三巻、セウ書房、1990年、P176、P181：「この聖性の顕現または、その延長により事物が象徴として形象化が行われる。そして、この形象化された事物は、統合化され、体系化される。」本研究では外部の天道の聖性が、民家内部へ延長され、これを形象したものであり、本島民家の建築的形態として成立し、形象された建築は、象徴として体系化されると考えている。
- 3) ミルチャ・エリアーデ：「聖と俗」、法政大学、1990年、P20：「聖体示現は空間の均質性を破り、一つの〈固定点〉を露わす。」、P13では「およそ方向づけというものは、一つの固定点を前提とする」と述べている。本論では、この固定点を外部における天道の聖地として考えている。この聖性は、固定点としてダイドコに祀られる『ホタケ』を依り代とし主屋内部での顕現により聖的祭儀空間として成立すると捉らえている。本研究では、聖的祭儀空間内部における空間相互の関係は指向性の概念の導入により明らかにし得ると考えている。
- 4) ダシは、ダイドコの下手の妻側を炊事場として使用される部屋である。
- 5) コドコの形態および発展過程は、長崎県教育委員会：長崎文化財調査報告書 第12集（前編）『長崎県の民家』長崎県緊急民家調査報告書 1972 P27に詳しく示している。また、持田照夫、大河直躬：「日本の農家の四つ間取の研究 - 広間型の追求 -」（財）新住宅普及会住宅建築研究所報 1978 P175では最初は簡単な形態から複雑化し居間のなかでも上手の一番象徴的位置にあるとしており、身分、格式を現す社会的意味を示していた。そして、本論ではこの三尺間に山の神、テガキなどの民間信仰における祭儀設備として成立することは、ダイドコが祭儀空間として成立する一構成要素であるにとらえた。
- 6) ダイドコの上において井桁に組まれた大梁をヒキモンと呼ぶ。
- 7) コヤに付属する作業場は、地域により「ペー」、「カド」または「ツシロ」と呼ばれる。
- 8) 本島においては、板倉をコヤとよび、いわゆる雑屋ではない。この小屋は、ヒョウモンゴヤ（俵物）、イショウゴヤ（衣装）などに使われ、家財の収納から収穫物の格納まで種々の目的に用いられる倉である。本島の小屋は、ペー、カドおよびツシロと呼ばれる作業場、乾燥場をもつ場合が多く基本的には穀倉である。この穀倉に関して、野村孝文「南西諸島の民家」相模書房 1976 P247に稲作民族において穀倉が、聖屋として尊重されていたことが指

- 摘されている。本島の小屋は正月にコッパラ（山中から子供らがネムの木を迎えて祝棒を作る）を供えなど（対馬郷土研究会「対馬風土記」13号 1976 P28）、小屋の聖屋的観念がうかがわれる。
- 9) 対馬郷土研究会：「対馬風土記 13号」、1976年、P11 峰町津柳：「大きな松の木の下に穴を掘り、線香・塩と一緒に白い布で包み埋める。子供の具合が悪いとイヤを掘り出し海で洗って家のスナコ（床の下）の柱にくくりつける。」
  - 10) 対馬郷土研究会：「対馬風土記 14号」、1978年、P53
  - 11) 前掲 9) P14
  - 12) 持田照夫氏、大河直躬氏：「日本の農家の四つ間取の研究 - 広間型の追求 -」、(財)新住宅普及会住宅建築研究所報、1978年、P168
  - 13) 柱の聖性については、小口偉一、堀 一郎監修：「宗教学辞典」、東京大学出版会、1989年1月、「柱と棒」のなかで「柱や棒は中心となる拠り所・支えとなるものの意味で使われる - 中略 - このように「中心」や「再生」を象徴する柱と棒の祖型は樹木崇拜に関係があると考えられている。」と記されている。
  - 14) 新対馬島誌編集委員会：「新対馬島誌」、1964年、P627
  - 15) 九学会連合対馬共同調査委員会編：「九学会特別調査報告」、1954年、PP. 340-341：「対馬では家内を守る神をいっばんにウチノカミとよんでいる。」また、「このウチノカミとは、佛教傳來以前の御先祖だとも傳えている（豊）。」と報告されている。小口偉一、堀 一郎監修：祖先崇拜（日本）〔氏神・稲霊との関係〕「宗教学辞典」、東京大学出版会、P515、では「柳田國男は民俗学的立場から（中略）農神は家の祖霊の別姿であり、盆に各家に迎え祭られる御精霊様（おしょういさま）と本体は同じである」と指摘している。柳田國男：「定本柳田國男集 第三十一卷」、筑摩書房、1978年、倉稲魂考 P166：「主婦の子を生む場所と稲の種の管理せられる小さな一室とが弘い地域に亙って以前から同じであった。（中略）納戸は、なほ二つの貴とき靈魂の聖地であり」と述べている。本島での祖先神であるウチノカミを多産豊穰にかかわる神として祀られるナンドは、主屋内部においてダイドコと同様に聖性の顕現した祭儀空間としてとらえることができる。
  - 16) 現地調査では公式行事を対象としており、日常の仏教的礼拝はダイドコで行われる場合がある。また、九学会連合対馬共同調査委員会編：「九学会特別調査報告」、1954年および新対馬島誌編集委員会：新対馬島誌、1964年を参考とした。
  - 17) 九学会連合対馬共同調査委員会編：「九学会特別調査報告」、1954年 和歌森太郎、櫻井徳太郎 P341：「全島いずれの村を訪れても、この神を祀らない家はない」と報告されている。永留久恵：「海神と天神」、白水社、1988年 P149：「家庭内祭儀の中心はホタケサマである」と述べ、天道の別姿とし全島に祀られながらもホタケは、農耕神として生活のなかにねざし、また表面化しにくい神として観念されている。また現地調査では、神体を弓、矢、御幣の型を稲穂、ヨシ、ラダの木および麻糸による作製を確認した。
  - 18) 鈴木棠三：「対馬の神道」、三一書房1972年、P214

- 19) 九学会連合対馬共同調査委員会編：「九学会特別調査報告」、1954年、P349
- 20) 前掲14) P627
- 21) 前掲14) P589
- 22) 前掲19) P340
- 23) 前掲14) P593
- 24) 前掲14) P611
- 25) 前掲10) P59
- 26) 前掲14) P611
- 27) 大河直躬：「住まいの人類学」日本庶民住居再考 1990, 10 平凡社 P149
- 28) 高取正男：「民間信仰史の研究」, 法蔵館, 1982, P378
- 29) 前掲10) P59
- 30) 乾 尚彦：「地域小集団による建築生産の研究 - 蘭嶼の居住空間 -」、(財)新住宅普及会 住宅建築研究所報、1984年、P343に静岡県の山木遺跡(11cm~12cm×5cm~6cm：弥生時代後期から古墳時代初頭)、秋田県北秋田郡鷹巣町小ケ田(一尺一寸×三寸：平安時代中後期頃)、男鹿市脇本字小谷地の発掘(17cm×7cm)、鷹巣町綴子字胡桃館の発掘(18cm×10cm, 7cm×13cm, 11cm×28cm)、藤原宮第41次調査中藤原宮の前身建物の遺構から長方形断面の柱の出土が報告されている。さらに、「柱の断面形状を長方形とするのは、フィリピン・ルソン島北部山岳地帯の諸民族や台湾高砂族の住居に典型的である。その他、オセアニアにも拡がった痕跡があり、ニュージーランドのマオリ族」の使用を示し、「アジア東南部からオセアニアにかけて、かつて広範囲に分布していた可能性」を指摘している。また、この分布域における蘭嶼島の民家に使用される長方形断面を成す親柱(tomok, tozak)は、精神的価値が高く、諸儀礼はこの親柱を中心に行われると報告している。
- 31) ダイドコ内部から聖性、祭儀性を有する空間へ指向する空間観念である。
- 32) ザシキは、畳や床の間を設けるなど身分・格式を主とする空間と共に仏教的要素を含んだ空間と捉らえられる。一方、ナンドはダイドコと同様に民間信仰を基とした祭儀空間として捉らえられる。ここに両空間の性格の差異が存在する。

## 第4章 群倉を形成する対馬集落の空間構成と聖性

本章では、群倉をもつ集落の空間構成を〈聖・穢〉観念との関連を基に論ずる。

### 4.1 研究の目的

本章は、対馬の集落および民家の空間構成が全島に存在する聖性の影響を受け、その聖性の象徴的顕現であろうと捉らえた。

本章は、群倉を形成する集落を事例に本島集落の空間構成と聖性・祭儀との関連に焦点をあて、集落の構成原理を明らかにすることを目的とする。尚、群倉とはコヤ相互において桁端を接し、またはコヤ間が通路程度に使用され群を成す配置形態である（写真-1、2）。

本島の聖性・祭儀に関連する事象を以下に挙げると、次のようである。

- ①本島固有の天道信仰による聖域が現在も存在し、みだりに入ることのできない聖域が山や川辺、集落附近の森、集落内部に点在し、古来より神道色の濃い性格が内在していた。この天道の忌避観念が現存していることから、本島は聖なる世界として認識されている<sup>1)</sup>。
- ②生活領域内<sup>2)</sup>では居住空間と天道によるシゲ<sup>3)</sup>、聖域などの聖的空間とが対をなす状況を示している。
- ③両墓制または準両墓制（以降、準・両墓制と呼ぶ）<sup>4)</sup>が慣行された集落が存在する。

本章では、この群倉を構成する集落を事例に、生活領域に内在する〈聖・穢〉観念を基底におき、聖性・祭儀と集落の空間構成との関連を論考する。



写真 - 1 : 鰐浦集落の群倉



写真 - 2 : 舟志集落の群倉

## 4.2 研究方法

以上の研究目的に立脚して、次の3つの視点から群倉をもつ本島集落の空間構成と聖性・祭儀との関連を実証的に明らかにし、集落の構成原理を考察する。

- ① 群倉の性格と聖性・祭儀との関係。
- ② 集落の構成要素と聖性・穢性との関係。
- ③ 民家主屋の聖性を示す指向と聖性との関係。

①では、集落の内外に観念として存在する〈聖・穢〉性や年中行事、習俗としてみられる祭儀との関連をとおして群倉の性格、とりわけ群倉の聖性を実証する。

②では、〈聖・穢〉性と対をなす《カミ・シモ》観念を基にして、集落の構成要素、つまり聖的空間、俗的空間、穢的空間の構成原理を明らかにする。

③では、本島民家における主屋の聖性を示す指向と集落内外の聖・穢域との関連を考察する。

前章では、本島民家のダイドコにおいてドージからナンドへ強い聖性を示す指向の存在を明らかにした。

以下、この主屋の聖性を示す指向（図-1）と集落周囲の聖域との関連を数量的に考察する。

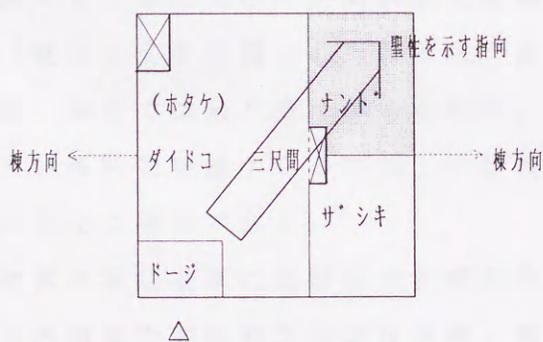


図-1 聖性を示す指向

### 4. 3 対象集落の空間構成の特質

本島の集落は、離島という環境に加え山地丘陵を背にして海に挟まれた地形に成立する地理的孤立状態にある。歴史的にも藩政期には島民と外来者との接触を阻止する政策がとられるなど、政治的にも本島集落は孤立的状況が固守された<sup>5)</sup>。このような地理的、歴史的条件下から中世的遺制<sup>6)</sup>が現在でもみられる。

このような状況下に成立した本島の集落は、強力な共同体<sup>7)</sup>を内在した社会的組織で構成された。地理的・社会的に孤立した生活領域のなかで個人的な自給自足的集落形態を成立せしめたと考えられる。

本島において群倉を形成し、準・両墓制ないし天道による聖性を内在する集落は、表-1に示した7集落が確認された。その位置は図-2に示すように本島の周辺部に分布する。

これら対象集落の空間構成上共通する特質は、次の4点に集約できる。

- ①群倉を構成していること、ならびに準・両墓制の慣行による忌避観念の存在が認められること。
- ②主屋内部においてガイドコに使用される天道の聖性・祭儀の象徴的形象として平柱がコヤにも使用されること。
- ③集落内部または周囲に天道地（シゲ地）および民間信仰による聖域の存在、または集落の配置構成に聖的空間が認識されること。
- ④集落の空間構成の基層に《カミ・シモ》観念が認められたこと。

以上の4点が群倉をもつ本島集落の空間構成を特徴づけている。

表-1において「寛文から正徳期」の戸数と現戸数とを比較すると、舟志、志多留、青海、木坂、椎根では殆ど変化がみられず、鰐浦、阿連については増加しているが、長い時間的経過からみれば、その変化は微量とみられる。社寺についてもその変化は微量である。

このように本島集落の構成要素に長時間変化が少なく中世的遺制が残されたのは地理的、自然的環境や歴史的な共同体組織と関連して、その農業生産性の低さからでもあった。

本島集落における主たる生産領域は居住域を囲む山地での焼畑（コバ）耕

作であり、これに海仕事が付随する。本島は海に囲まれてはいるが、海は副次的な生産の場にすぎなかった<sup>8)</sup>。このようなことから対象集落の空間構成には現状においても中世からの祖形が維持されているとみなし得る。

表 - 1 対象集落の構成内容 (単位:戸)

NO	集落名	寛文~正徳 <sup>*1</sup>			91年 <sup>*2</sup>		
		戸数	神社	寺院	戸数	神社	寺院
1	鰐浦	62	1	1	80	1	1
2	舟志	70	1	2	61	1	1
3	志多留	56	1	3	57	2	1
4	青海	18	1	1	24	—	1
5	木坂	28	1	2	26	1	—
6	阿連	67	1	2	102	1	1
7	椎根	48	1	1	50	2	1
総計		349	7	12	400	8	6

※1: 陶山詠菴 口上覚書六五 (寛文5 (1665) ~ 正徳2年 (1712))

新対馬島誌 P384による。

※2: 現地調査および住宅地図<sup>9)</sup> による。

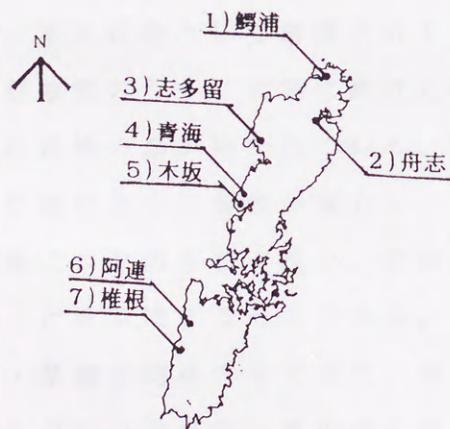


図 - 2 対象集落の位置

## 4. 4 集落構成と聖性・祭儀

### 4. 4. 1 群倉と聖性・祭儀

本島のコヤの平面は、身舎の四隅を角柱とし、周壁に平柱を設ける。柱は石場建てとし、軒桁にたっしており、瓦葺きまたは石屋根とする<sup>10)</sup>。内部は2ないし3間に分割された板倉であり、「ヒョウモンゴヤ(俵物小屋)」、「ミソゴヤ(味噌小屋)」、「イショウゴヤ(衣敷小屋)」などの機能に使用されている。コヤは穀倉としての性格が強く、コヤの前面は作業場となり、コヤと作業場が並列して並ぶ場合と群倉が作業場を囲い込む型がある。

本島全域において慣行される正月行事としてクラマツリ、クラビラキおよびダラ正月がある<sup>11)</sup>。クラマツリ、クラビラキでは米、御神酒、餅、煮物などがコヤの出入口または内部に供えられる。ダラ正月では実の成る木や地面やコヤを子供たちが生産的謡を唱えつつコッパラ(聖棒)<sup>12)</sup>で叩いてまわり、コヤの内部やダイドコのホタケなどにこのコッパラを供える。こうしたコヤにまつわる正月行事は穀霊信仰と関連していることが指摘し得る。

木坂ではコヤが産屋および忌中者の生活<sup>13)</sup>の場として使われた。特に、産屋についてはコヤ内部の穀物収納部分のみが産室として使用された。コヤがこのような産・死の穢に対して使用されたことはコヤの持つ再生力・復活力<sup>14)</sup>の顕現と考えられる。

志多留では、集落のほぼ中央に天道信仰によるシゲ地として「シゲンバル」と称する聖域があり、不入の地として認識されている。近年には不入の認識が弱まり、コヤのみが暗黙のうちに次第に設けられるようになったが、人家を建てることは今なお畏怖の念が持たれている。現在では、この聖域である「シゲンバル」を取り囲むように群倉が成立し、その周囲に主屋が配置構成されている。この聖域にコヤのみが立地し、群倉を形成した過程は、コヤに聖的観念が存在することを示唆するものである。

以上、群倉と聖性・祭儀の関係をみてきた。なかでも正月行事におけるコヤの穀霊との関係ならびにコヤが産・死の穢に対して使用されたことは、コヤの持つ再生力・復活力の顕現とみなし得る。特に産に対する観念は穀物の再生力と同一観念の上に成立したものと考えられる。その立地に関してもシ

ゲ地内にコヤのみが黙認され、群倉が形成されたことにおいてもコヤがもつ聖的観念による蓋然性が認められる。

群倉は、集落内部からの火災から穀物と家財を守る性格とともに穢に対する浄化力をもつ聖的空間としての性格を併せ持つと考えられる。

#### 4. 4. 2 集落の空間構成と聖性・祭儀

本項では〈聖・穢〉性と対をなす《カミ・シモ》観念を基として集落の構成要素としての聖的空間・俗的空間・穢的空間<sup>16)</sup>による構成原理を考察する。

事例の7集落の断面構成は、配置構成図(図-4-(1)(2)(3):事例集落1~7)の切断箇所<sup>17)</sup>で切って図化すると4タイプ(図-3:断面構成からみた集落の類型図)に類型化できる。この断面線は群倉と墓所を基点として《カミ・シモ》観念にしたがって聖域・穢域を認識し得る方向に切断することを基本とした。

事例の7集落の構成要素は〈聖・穢〉性とこれに対応する《カミ・シモ》の観念とを対応させると、〈聖域・カミ〉に対応する山、〈聖域〉としての群倉、〈俗域〉としての居住域、〈穢域〉としての墓所(捨墓)、〈穢域・シモ〉観念としての海、川下よりなる。

4タイプ共通にみられる配置上の特徴は、第1には居住域、つまり俗的空間と墓所(捨墓)や海、川下などの穢的空間とは隣接することはなく、群倉などの聖的空間を間に界している。第2には、俗的空間の両側には聖的空間である山《カミ》や群倉が配置されている。第3には聖域としての山《カミ》から墓所や海または川下の穢域としての《シモ》に向って、「聖域・俗域・聖域・穢域」の順に配置されていることが図-3にみてとれる。

A型は聖なる山《カミ》から穢域の海《シモ》に向けて「聖・俗・聖・穢」と並び、墓所が海際に設けられた典型的な型である。

B型は俗域と《カミ》観念による聖なる山を挟んだ山中に神社が祀られ、これに対峙する《シモ》方向の山頂に墓所が設けられた形態である。

C型は《カミ・シモ》観念にもとづき、俗域と穢域としての《シモ》との

間に聖領域である群倉が配置され、墓所を山裾に設けた型である。

D型は聖なる山の頂と居住域内に聖的不入域を構成し、この俗域内部の聖域に群倉を配置構成する。

さらに、この4タイプは《カミ・シモ》方向を基本観念とし、墓所（捨墓）を《シモ》に配置する型と山裾に設ける型の2タイプに集約できる。

以上の断面上の類型化をとおして、本島の群倉をもつ集落の空間構成原理を要約すると次のようになる。

- ①生活領域内において《カミ・シモ》観念に対応する〈聖・穢〉空間認識を基本に、穢に対する忌避処理として群倉が配置されている。つまり、群倉は俗的空間を穢的空間から忌避する手段としても機能していること。
- ②俗的空間を聖的空間である山および群倉で囲む構成がみてとれること。
- ③集落構成は《カミ・シモ》観念にしたがい「聖・俗・穢」の構成要素による象徴的体系の顕れとして、「聖・俗・聖・穢」空間の順に配置構成されること。

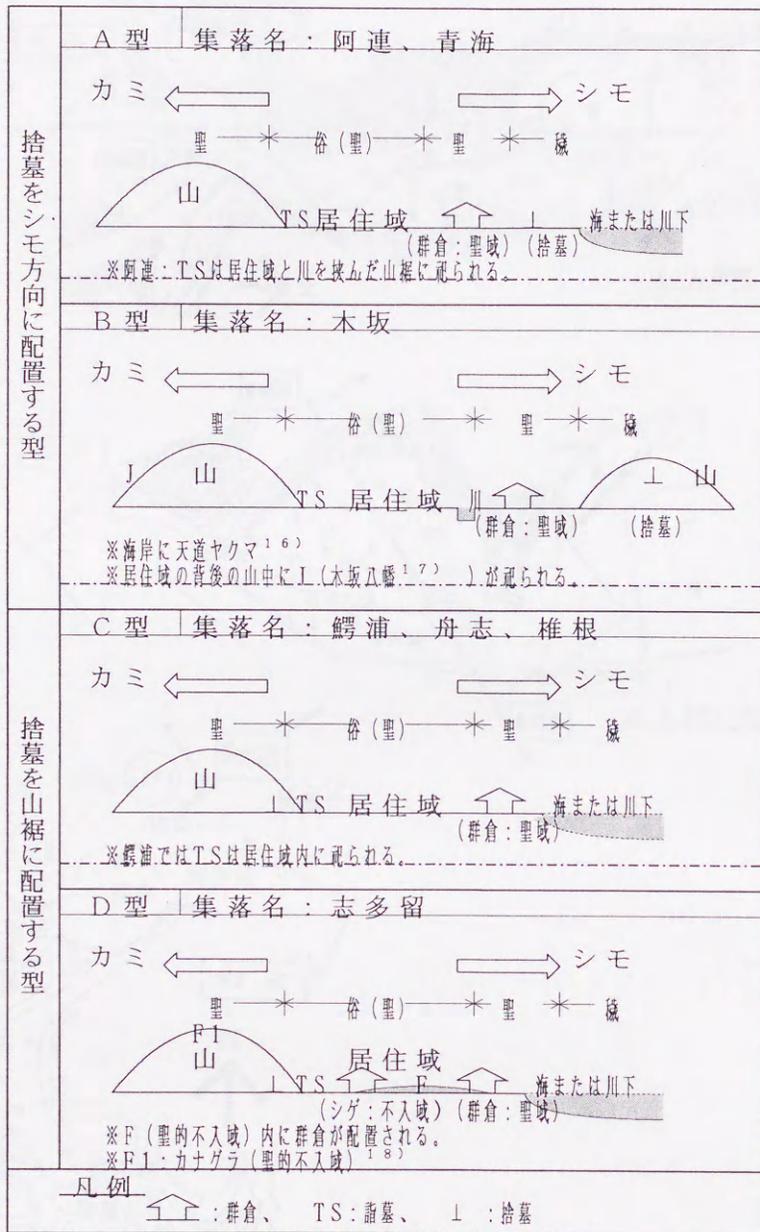
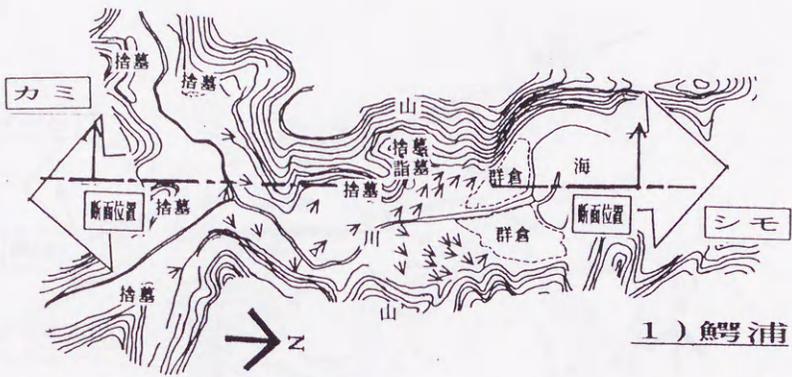
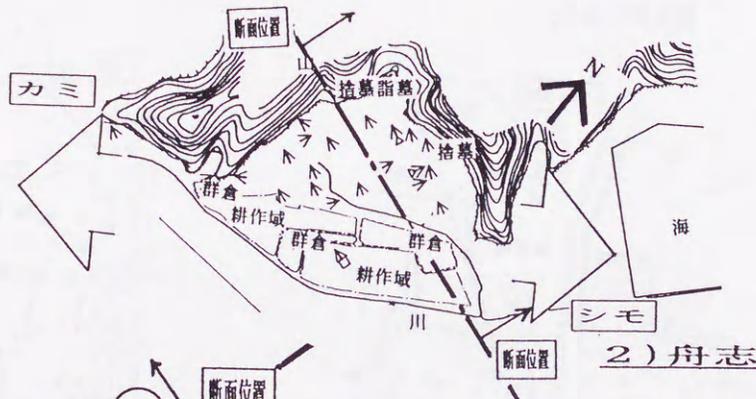


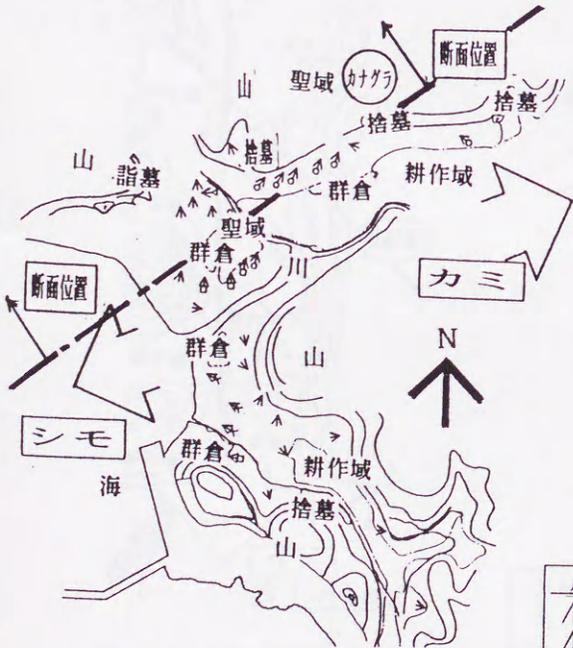
図-3 断面構成からみた集落の類型図



1) 鰐浦



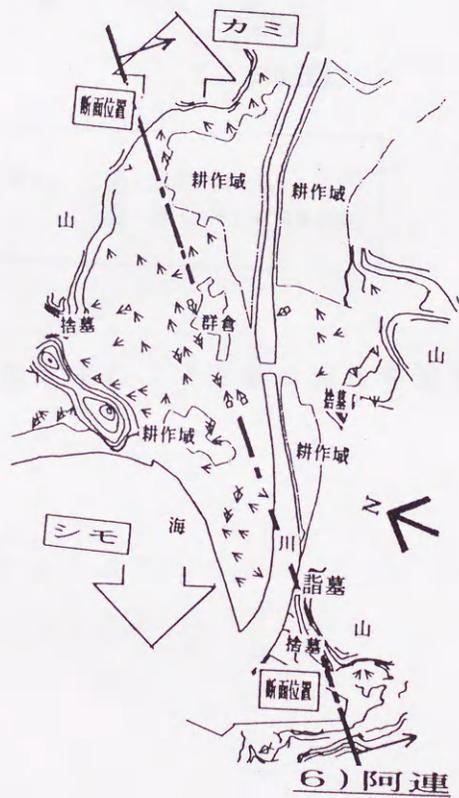
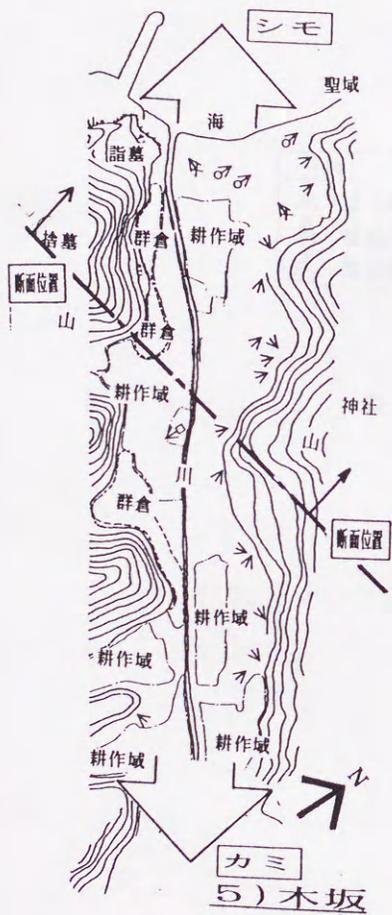
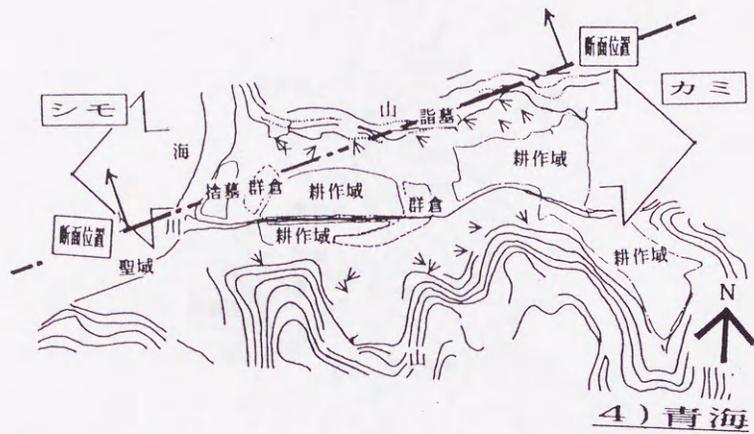
2) 舟志



3) 志多留

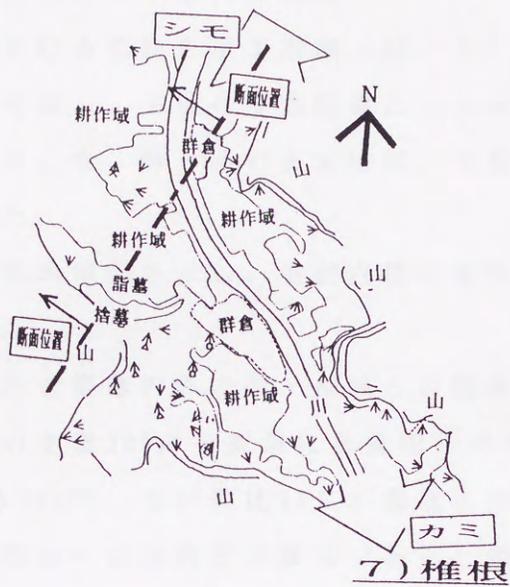
凡例	
▲ (pointing up)	: 山 (カミ) 方向を示す。
▲ (pointing right)	: 墓所方向を示す。
▲ (pointing left)	: 聖域方向を示す。
▲ (pointing down)	: 群倉方向を示す。
▲ (pointing right)	: 海 (シモ) 方向を示す。

図-4-(1) 集落の配置構成および主屋の聖性を示す指向



凡例	
↑ : 山 (カミ) 方向を示す。	▲ : 墓所方向を示す。
⊙ : 聖域方向を示す。	△ : 海 (シモ) 方向を示す。
⊠ : 群倉方向を示す。	

図 - 4 - ( 2 ) 集落の配置構成および主屋の聖性を示す指向



凡例	
↑ : 山 (カミ) 方向を示す。	△ : 墓所方向を示す。
○ : 聖域方向を示す。	△ : 海 (シモ) 方向を示す。
△ : 群倉方向を示す。	

図 - 4 - ( 3 ) 集落の配置構成および主屋の聖性を示す指向

### 4. 4. 3 主屋の聖性を示す指向と聖性

本項では民家主屋における聖性を示す指向（図-4）と集落内外に存在する聖・穢域との関連を考察し、主屋の聖的配置という面から集落の空間構成と聖性の関係を論考する。尚、図-4の各矢印は、主屋における聖性を示す指向（図-1）を示した。

対象家屋は本島の伝統的形態を示し、主屋内部に聖性を示す指向を確認し得た民家の主屋である。

主屋の聖性を示す指向と集落内外の聖・穢域との関係を調査戸数400戸（表-1）のうち対象集落の主屋225戸を対象に数量的に考察する。（表-2）

調査戸数225戸のうち200戸、全戸数比89%が聖域を指向し、25戸、11%が穢域を指向しており、聖域への指向性が顕著である。聖・穢域分類別では、集落周辺の《カミ》観念をもつ山への指向性が177戸、79%で最も強く、他の類型と隔絶している。

集落別にみてもこの傾向は変わらず、聖域への指向性が最も低い阿連でも62戸のうち52戸、84%であり、それ以外の6集落では88%以上にたっている。

この阿連は「寛文～正徳期」から現在まで戸数増加が最も多かった集落であり、新しい民家が比較的多い特質がある。ここでは穢性を内在する《シモ（海）》方向を指向する事例が9戸、14%あり、特徴的であり、住民の観念の変化が読みとれよう。

阿連以外の6集落は88%以上が聖域を指向しており、なかでも集落の周辺の山を指向している。とりわけ特徴的なのは志多留であり、集落の聖域（シゲ）と群倉を指向するものが、併せて11戸、35%となっている。

以上の集落における主屋の聖性を示す指向と〈聖・穢〉性との関連をとおしてみた集落の空間構成原理は聖性、とりわけ《カミ》観念としての山を指向することを原則としている。

表 - 2 主屋の指向性

NO	分類 集落名	聖域				穢域			調査戸数 合計
		山(カミ)	聖域	群倉	小計	墓所	シモ(海)	小計	
1	鶴翁 (戸)	28	—	—	28	1	—	1	29
	(%)	97	—	—	97	3	—	3	100
2	舟志 (戸)	19	—	1	20	2	—	2	22
	(%)	86	—	5	91	9	—	9	100
3	志多留(戸)	17	7	4	28	1	3	4	32
	(%)	53	22	13	88	3	9	12	100
4	青海 (戸)	15	—	—	15	—	1	1	16
	(%)	94	—	—	94	—	6	6	100
5	木坂 (戸)	16	3	1	20	—	2	2	22
	(%)	73	14	4	91	—	9	9	100
6	阿達 (戸)	48	—	4	52	1	9	10	62
	(%)	78	—	6	84	2	14	16	100
7	権根 (戸)	34	—	3	37	4	1	5	42
	(%)	81	—	7	88	10	2	12	100
各構成要素 (戸)		177	10	13	200	9	16	25	225
各構成要素 (%)		79	4	6	89	4	7	11	100
聖・穢 合計(戸)		200				25			225
聖・穢 指向(%)		89				11			100

※カミ：集落の空間認識において聖性を内在する山方向

※山：カミの聖性と同一概念としての集落周辺の山

※シモ：集落の空間認識において穢性を内在する海方向

※海：シモの穢性と同一概念としての海

※聖域：集落内外に存在する聖地

※群倉：聖性を内在する群倉域

※墓所：準・両墓制における捨墓

※調査戸数：94年8月現在域

## 4.5 小結

対馬全域に存在する聖性が集落の空間構成に影響し、その空間構成は生活領域に内在する《カミ・シモ》観念を基層におく〈聖・穢〉性による象徴的体系と捉らえて、集落の主要な構成要素としての居住域、群倉と聖性・祭儀との関連を考察してきた。

事例にした群倉を形成する集落では、群倉は聖的空間としての性格をもち、居住域（俗的空間）は聖的空間としての山や群倉で囲まれる。民家主屋の配置は聖域である山を指向することを原則にしていることが明かとなった。

1) 群倉は、以下より穢に対する浄化力をもつ聖的空間として性格づけられる。

- ① 聖性を顕わす平柱がコヤに使用されていたこと。
- ② 群倉は穀倉としての性格をもち、穀霊信仰を基とする習俗が慣行され、聖的観念が強く認められたこと。
- ③ 群倉は〈再生・復活〉観念をもつとともに穢に対する浄化力を内在する領域と認められたこと。
- ④ 不入域であった聖域に群倉が形成されたこと。

2) 聖的空間・俗的空間・穢的空間を構成要素とする集落の配置構成は《カミ・シモ》観念を貫くとともに、俗的空間を聖的空間で囲むことを原則にしている。

- ① 群倉は俗的空間と穢的空間の界に忌避的手段として配置されたこと。
- ② 俗的空間を山《カミ》や群倉の聖的空間で囲む構成となっていたこと。
- ③ 集落構成は《カミ・シモ》観念にしたがい「聖・俗・穢」の構成要素による象徴的体系の顕れとして「聖・俗・聖・穢」空間の順に配置構成されていたこと。

3) 主屋内部に成立する聖性を示す指向は聖域《カミ》観念としての山に向かうことを原則としている。

以上より対馬における群倉を形成する集落は《カミ・シモ》観念を基層において、それに対応する「聖・俗・穢」の空間認識による一貫した構成原理により成立していると結論づけられる。

- 1) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 2) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 3) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 4) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 5) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 6) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 7) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 8) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 9) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 10) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 11) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 12) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 13) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 14) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 15) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 16) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 17) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 18) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 19) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁
- 20) 佐々木 信之助、『対馬の歴史』、1964年、114頁

## 注記

- 1) 赤田光男：「対馬の両墓制及び両墓制に代るものについて」、日本宗教の歴史と民俗、隆文館、1976年、P450
- 2) 本研究では居住域と生産域が対峙するような限定したものではなく、信仰域をも含む総体としての領域を意味する。
- 3) 永留久恵：「海神と天神」、白水社、1988年、PP. 109-111
- 4) 前掲 1)では両墓制に関する事例として上県郡の青海、木坂、西泊、鰐浦を挙げ、両墓制に準じるものとして上県郡秦の「ケッセンドウ」、下県郡与良内院の「マンネンドウ」、上県郡志多賀、一重、下県郡小茂田、久須保、芦ヶ浦、椎根の「サンゲパンゲ（サンゲーバンゲー、サンゲパンゲドン、サンゲパンネンなどとも呼ばれる）」を挙げている。いずれも聖地、聖所とし本島に両墓制およびこれに準ずる墓制の発生について明らかにしている。これらの聖所は個家単位の墓所としてより村の共同霊を祭る場所であることを指摘している。本研究ではこのような聖所、聖地における聖性、祭儀に対する象徴的施設であり、生活領域内部における象徴的体系を基とした聖、穢空間の秩序化と考えている。
- 5) 宮本常一：「日本の離島 第一集」、宮本常一著作集4、未来社、1980年、P. 250-251
- 6) 現在でも本島の村落組織のなかに、かつての給人、本家、分家として日常生活のなかに強い共同体意識が存在している。また、祭儀面では天道信仰が重要事として存在しており、この遺制の一つといえる。
- 7) 前掲 5) P252:「地割制度を根底に持つ農民の強力な共同体とその上に土地を私有する給人（郷士）仲間が存在し、村の政治は給人から出ている下知役が中心となって行っていた」のである。本島は水田などの平坦な耕作地にめぐまれず、焼畑および畑作を主とした農耕が行われ慢性的な食料不足であった。またP236にこのため江戸初期には政策的に人口削減を行い他国者（上方）の内地送還が行われた。集落内部の社会構成は、在来の住民を本戸とよび外来者（他村者など）を寄留とよびまたこれらの関係は「オヤカタ」、「コドモウチ」とよばれる社会的、身分的区別が存在した。集落は自給自足的状況が続け外部との関係は極めて制限され、このような状況のなかで集落内において強い共同体が維持された。
- 8) 九学会連合対馬共同調査委員会編：「九学会特別査報告」、1954年、P218に本島は海藻をとり肥料とする百姓魚師であり、さらにP236に「漁業や林業が発達したのは明治以降のことに属する」とある。また、宮本常一：「対馬漁業史」、宮本常一著作集28、未来社、1983年、PP. 382-383に詳しい。
- 9) 対馬（上県郡、下県郡）91ゼンリンの住宅地図、（株）ゼンリン 1990年11月
- 10) 第3章の図-3 小屋の平面図および平柱を参照
- 11) 全島域においてクラマツリ、クラピラキは正月2日から6日、ダラ正月は6日から14日に慣行される。
- 12) 対馬郷土研究会：「対馬風土記13号」、1976年、P28
- 13) 前掲 1) P438

- 14) 高取正男：「神道の成立」、平凡社、1989年、P88
- 15) 以後、「聖・俗・穢」空間とする。
- 16) 前掲 3) PP. 139-142
- 17) 前掲 3) PP. 302-312
- 18) 鈴木正崇：「対馬・木坂の祭祀と村落空間」、日本民俗学、140号、1982年、P9

## 第5章 対馬の群倉を形成しない集落の空間構成と聖性

本章では群倉を形成しない集落<sup>1)</sup>の空間構成を〈聖・穢〉観念との関連を基に論ずる。

### 5.1 研究の目的

本章で対象とする集落は集落内部にコヤが点在する形態（写真-1）および耕作域、乾燥場や作業場を介して各コヤが接しておらず塊状を成す集落であり、コヤの配置形態は群倉と明確に相違する。

本章は、かかる群倉を形成しない集落の空間構成と聖性との関連を明らかにすることを主目的にしており、さらに第4章の対象集落とを比較考察することから、本島における2タイプの集落形態の構成原理を総合的に明らかにすることを目的とする。

以上の目的から、事例集落としては次の2項を選定条件とした。

- ① 集落内にコヤが点在または塊状を成す集落であること。
- ② 準・両墓制<sup>2)</sup>の慣行が認められること。

この条件をみたす対象集落は、表-1に示した8集落が確認でき、その位置を図-1に示した。

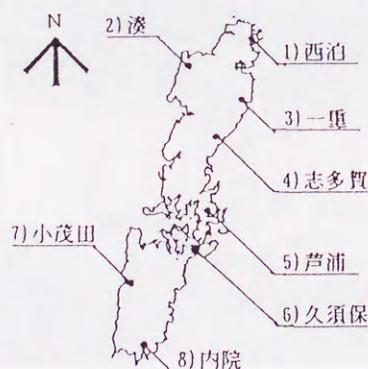


図-1 対象集落の位置

表 - 1 対象集落の構成内容 (単位:戸)

NO	集落名	寛文~正徳 <sup>※1</sup>			91年 <sup>※2</sup>		
		戸数	神社	寺院	戸数	神社	寺院
1	西泊	29	2	1	55	1	1
2	羨	83	1	1	68	1	1
3	一重	33	1	1	112	2	1
4	志多賀	78	1	3	161	2	2
5	芦浦	13	1	1	38	—	1
6	久須保	36	1	1	55	2	1
7	小茂田	30	1	1	95	3	1
	豆殿内院	3	1	—	27	—	1
8	与良内院	25	—	1	58	1	1
総計		330	9	10	669	12	10

※1: 陶山詠菴 口上覚書六五 (寛文5 (1665) ~ 正徳2年 (1712))

新対馬島誌 P384による。

※2: 現地調査および住宅地図による。



写真 - 1 : 小茂田集落の点在するコヤ

## 5. 2 研究方法

本章は次の4つの視点より、コヤが点在または塊在する集落の空間構成と《カミ・シモ》観念に対応する聖性・祭儀との関連を解明し、集落空間の構成原理を究明する。

- ①コヤおよび墓所(捨墓)の配置・分布と聖性との関係。
- ②集落の構成要素と聖性・穢性との関係。
- ③民家主屋の聖性を示す指向と聖性との関係。
- ④群倉を形成する集落および群倉を形成しない集落の空間構成と聖性との関係の比較、ならびに群倉の成立と聖性との関係。

①では、居住域の空間的性格を《カミ・シモ》観念を基層におき、聖屋であるコヤの配置および穢域である捨墓の分布と〈聖・穢〉性との関連を実証する。

②では、集落の3つの空間構成要素、つまり聖的空間、俗的空間、穢的空間の構成原理を集落の断面構成から明らかにする。

③では、本島民家における主屋内の聖性を示す指向と集落内外に存在する〈聖・穢〉性との関連を考察する。

④では、群倉を形成する集落との比較により、群倉の成立要因について論考し、本島集落の基本的空間構成の原理を明らかにする。

### 5.3 対象集落の空間構成の特質

本章で対象とした集落の空間構成上の特質は、事例集落の選定条件として前述した①の他に②～④に集約できる。

- ①条件とした聖屋であるコヤが集落内部に点在または塊状を成し分布していること、ならびに集落内外において準・両墓制の慣行による忌避観念が認められること。
- ②主屋内部においてダイドコに使用される天道の聖性・祭儀の象徴的形象として平柱がコヤにも使用されること。
- ③集落内部または周囲に天道地（シゲ地）および民間信仰による聖域が存在し、聖的空間として認識されること。
- ④集落の空間構成の基層に《カミ・シモ》観念が認められること。

以上の4点が本章で事例とした集落の空間構成を特徴づけている。

「寛文から正徳期」の戸数と現戸数とを比較すると、湊集落のみが減少し、他の集落は増加している（表-1）。他の7集落の増加は寄留<sup>3)</sup>によるものであり、明治以降の増加と考えられる<sup>4)</sup>。志多賀と小茂田の変化は古くからの分家と寄留および近年の公務員などの新入居者の増加による変化である。集落内部での寄留の家屋配置は、本戸との明確な境をもって配置された

5)

## 5.4 集落構成と聖・穢性

### 5.4.1 コヤ・墓所の配置と聖・穢性

対象集落の生活領域は《カミ・シモ》観念にもとづき聖性が内在する「山（カミ方向）」、俗的空間としての「居住域」、穢性をもつ「海（シモ方向）」の3つの構成要素に分けられる。

本項では、コヤ、墓所（捨墓）の配置と聖・穢性との関連を分析するため、集落内のコヤ、墓所（捨墓）および聖域（不入域）の分布図（図-3-(1)(2)(3)）を基に表-2にまとめた。

対象集落の聖域は、集落周囲の山頂附近または山裏に配される。居住者はこの聖域には不用意に入れず畏怖の念を持ち、「山（カミ）」の聖性に対する認識が顕著にみられる。コヤは主屋のダイドコと同様、聖的象徴である平柱が使用され、穀倉としての性格をもち、穀霊信仰を基とする聖的観念が顕現する。聖屋としてのコヤは「山（カミ）」および「居住域（俗域）」に分

表-2 コヤ・墓所・聖域の分布状況

NO	集落名	コヤの分布			墓所の分布			聖域 (不入域)
		山・カミ	居・俗	海・シモ	山・カミ	居・俗	海・シモ	
1	西泊	点○	—	—	腹○	—	—	権現山
2	羨	—	塊○	—	腹○	—	—	天道山
3	一重	塊○	—	—	裾○	—	—	権現山
4	志多賀	—	点○	—	裾○	—	—	天道シケ*
5	芦浦	—	点○	—	裾○	—	—	天道シゲ
6	久須保	—	点○	—	—	—	○	サンカ* ツサマ
7	小茂田	—	点○	—	—	—	○	サンホ* ンマツ
8	内院	—	点○	—	—	—	○	天道山

※点：集落内に点在する。

※塊：集落内に塊状を成す。

※腹：山腹に分布する。

※裾：山裾に分布する。

布し、「海（シモ）」方向には設けられていない。一方、穢観念をもつ墓所（捨墓）は、「山（カミ）」または「海（シモ）」方向に分布し、居住域には設けられない（表-2）。全ての集落において準・両墓制が慣行され、詣墓が居住域または山裾におかれる。この慣行は、居住域への忌避的手段と考えられる。こうして形成された空間構成は、居住域（俗域）を聖化する空間観念にもとづくものとみなし得る。

#### 5.4.2 空間構成要素と聖・穢性

本項では、対象集落の空間構成要素としての「聖・俗・穢」空間による構成原理を明らかにする。

事例の8集落の断面構成は、集落の配置構成図（図-3-(1)(2)(3)：事例集落1~8）の断面箇所を以て図化すると、3タイプに分類できる（図-2）。この断面線は聖域と墓所（捨墓）を基点として《カミ・シモ》観念にしたがって聖域・穢域を認識し得る方向に切断することを基本にした。

事例の8集落の構成要素は聖・穢域と《カミ・シモ》観念とを対応させると、①〈聖域・カミ〉に対応する山、②〈聖域〉としてのコヤの分布域、③〈俗域〉としての居住域、④〈穢域〉としての墓所（捨墓）および〈穢域・シモ〉観念に対応する海、川下からなる。

A型は、《カミ・シモ》観念にしたがい聖域（不入域）を山頂附近に配し、墓所（捨墓）を海辺（シモ方向）に設け、《カミ》から《シモ》に向かって「聖・俗・穢」空間の順で配置される典型的な集落構成を示している。

B型は俗域からみると山裏に聖域を配し、海を挟んで対峙する山裾に墓所（捨墓）を配置し、穢に対する忌避観念が顕著にみられる集落構成である。

C型は、聖域を山頂または山腹に配した構成であり、コヤは居住域（俗域）または山腹（聖域）に配置される。墓所（捨墓）は山裾または山奥の山腹に設けられ、居住域から離れて配置される。ここでは、詣墓が山裾におかれると共に山腹または居住域にコヤを配することにより俗域への忌避処理がみとれる。特に湊集落では「ケッセンドウ」<sup>6)</sup> と呼ばれる聖域化した詣墓が

存在する。

対象集落の空間構成は一貫して、《カミ・シモ》観念にしたがい「聖・俗・穢」空間の順に構成されることを原則としている。さらに、この3タイプは《カミ・シモ》方向を基本観念とし、墓所（捨墓）を《シモ》に配置する型と「山（カミ）」に設ける型の2タイプに集約し得る。

以上の断面上の類型化をとおして、群倉を形成しない集落空間の構成原理を要約すると次のようになる。

- ① 集落をとりまく山頂または山腹に聖域（不入域）が存在し、《カミ・シモ》観念に対応する「山（カミ）」方向に聖観念が存在し、集落構成に際立った影響を与えている。
- ② 聖屋としてのコヤは「山（カミ）」方向または居住域内に設けられ、こ

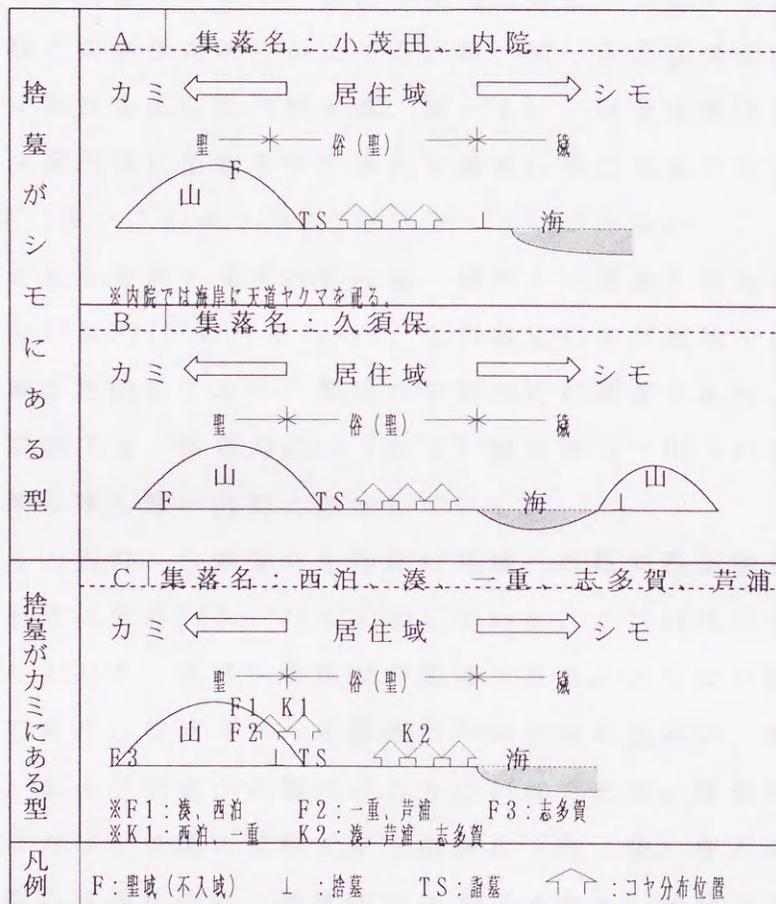


図-2 断面構成からみた集落の類型

れに対し墓所（捨墓）はA、B型にみるように「海（シモ）」方向に配置され、《カミ・シモ》観念にしたがった配置となっている。C型では、山（カミ）方向に墓所（捨墓）を配置するが、山腹に聖なるコヤを配し、また集落内では準・両墓制を慣行し、特に湊集落では聖域化した詣墓（ケッセンドウ）を配して墓所（捨墓）に対する忌避処理を行っており、俗域の聖域化をも図っている。

- ③集落の構成要素は《カミ・シモ》観念にしたがい《カミ》から《シモ》へ聖的空間・俗的空間・穢的空間の順に配置構成される。

### 5. 4. 3 主屋の聖性を示す指向と聖性との関係

本項では、民家主屋における聖性を示す指向（図-3）と集落内外に存在する聖・穢域との関連を考察し、主屋の聖的配置という面から集落の空間構成と聖性・祭儀との関係を明らかにする。尚、図-3の各矢印は、主屋における聖性を示す指向を示した（第4章、図-1）。対象家屋は本島の伝統的形態を示し、主屋内部に聖性を示す指向を確認し得た民家の主屋である。調査戸数は669戸（表-1）のうち307戸（表-3）である。

主屋の聖性を示す指向と集落内外の聖・穢域との関連を数量的に考察する（表-3）。全戸数307戸のうち254戸、全戸数比83%が聖域を指向し、53戸（17%）が穢域を指向しており、聖域への指向性が顕著である。

聖・穢域分類別では、集落周辺の《カミ》観念をもつ山への指向性が240戸（78%）で最も強く他の分類と隔絶している。

集落別にみると西泊、久須保の2集落は聖域への指向性が他集落よりは弱い、それでもそれぞれ75%、74%を示している。これ以外の6集落では、82%以上に達しており、聖域への指向が顕著である。とりわけ特徴的な集落は久須保集落であり、聖域方向への指向が74%と最も低い、他の集落に比して山（カミ）および聖域への指向がともに37%であり、特徴的である。

以上の集落における主屋の聖性を示す指向と（聖・穢）性との関連を通してみた集落空間の構成原理は、聖性が存在する《カミ》観念としての山を指向することを原則としている。

表 - 3 主屋の指向性

NO	分類 集落名	聖域			穢域			調査戸数 合計
		山(カミ)	聖域	小計	墓所	海(シモ)	小計	
1	西泊 (戸)	9	—	9	—	3	3	12
	(%)	75	—	75	—	25	25	100
2	渡 (戸)	30	6	36	—	8	8	44
	(%)	68	14	82	—	18	18	100
3	一重 (戸)	39	—	39	2	3	5	44
	(%)	89	—	89	4	7	11	100
4	志多賀 (戸)	62	1	63	6	7	13	76
	(%)	82	1	83	8	9	17	100
5	芦輪 (戸)	15	—	15	1	2	3	18
	(%)	83	—	83	6	11	17	100
6	久須保 (戸)	7	7	14	—	5	5	19
	(%)	37	37	74	—	26	26	100
7	小茂田 (戸)	40	—	40	4	5	9	49
	(%)	82	—	82	8	10	18	100
8	内院 (戸)	38	—	38	1	6	7	45
	(%)	84	—	84	2	14	16	100
各構成要素 (戸)		240	14	254	14	39	53	307
各構成要素 (%)		78	5	83	4	13	17	100
聖・穢 合計 (戸)		254			53			307
聖・穢 指向 (%)		83			17			100

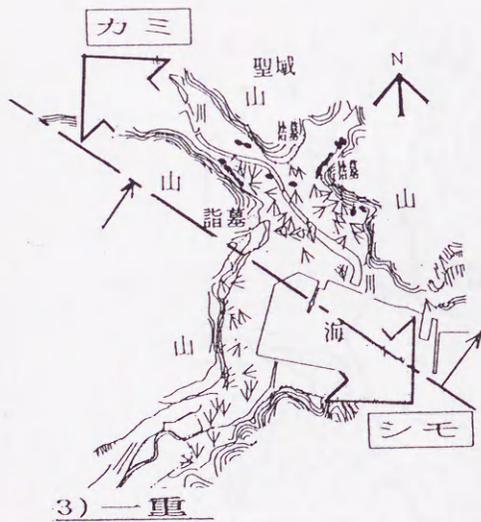
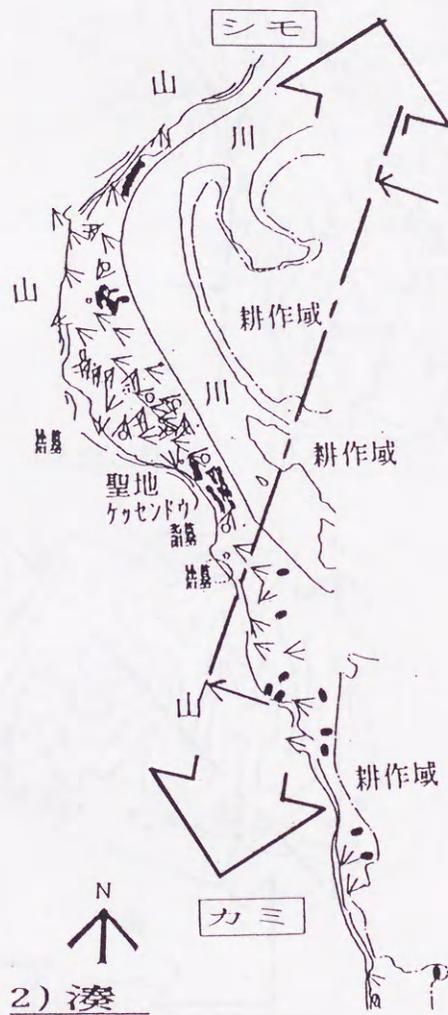
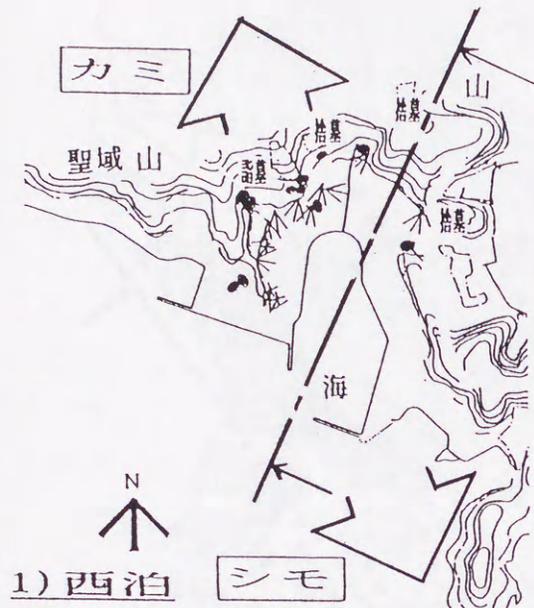
※カミ：集落の空間認識において聖性を内在する山方向 ※聖域：集落内外に存在する聖域

※山：カミの聖性と同一概念としての集落周辺の山

※シモ：集落の空間認識において穢性を内在する海方向 ※墓所：準・両墓制における捨墓

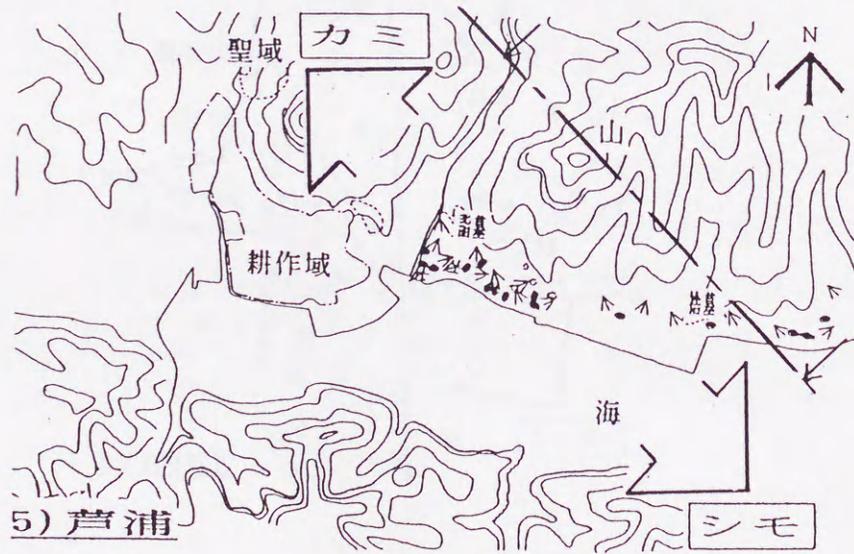
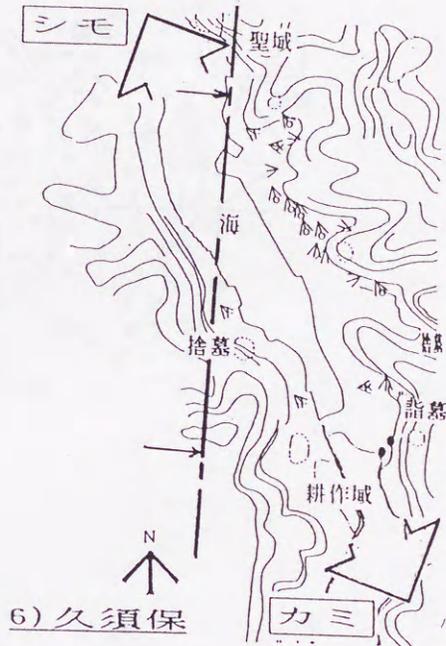
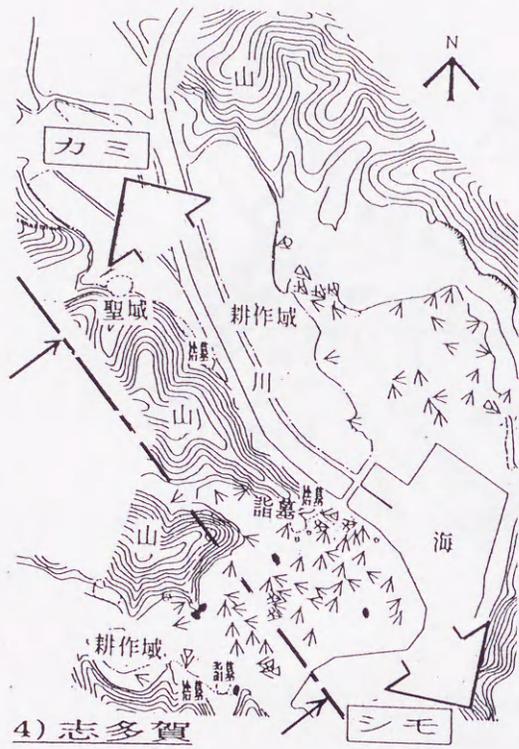
※海：シモの穢性と同一概念としての海

※調査戸数：94年8月現在



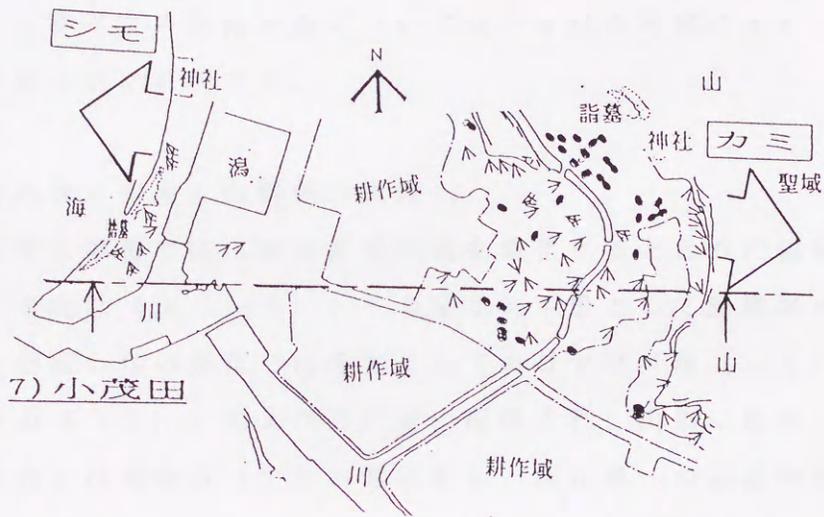
凡例	
↑ : 山 (カミ) 方向を示す。	⬆ : 墓所方向を示す。
⬆ : 聖域方向を示す。	⬆ : 海 (シモ) 方向を示す。
● : 小屋の分布域を示す。	

図 - 3 - (1) 集落の配置構成および主屋の聖性を示す指向

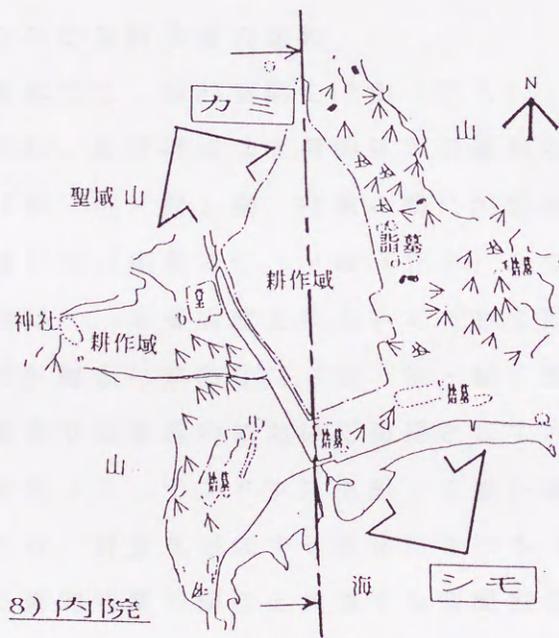


凡例	
↑ : 山 (カミ) 方向を示す。	△ : 墓所方向を示す。
⊕ : 聖域方向を示す。	⊗ : 海 (シモ) 方向を示す。
● : 小屋の分布域を示す。	

図 - 3 - ( 2 ) 集落の配置構成および主屋の聖性を示す指向



7) 小茂田



8) 内院

凡例			
↑	: 山 (カミ) 方向を示す。	△	: 墓所方向を示す。
←	: 聖域方向を示す。	◇	: 海 (シモ) 方向を示す。
●	: 小屋の分布域を示す。		

図 - 3 - (3) 集落の配置構成および主屋の聖性を示す指向

#### 5.4.4 群倉を形成する集落としない集落との比較

以上の考察をふまえて、本項では集落の空間構成と聖性・祭儀との関連に視座をおき、2タイプの集落形態について以下4点の考察により、本島集落の構成原理を総合的に解明する。

##### ①コヤの分布域と聖性との関係の比較

群倉を形成する集落では、群倉が居住域を聖化するとともに穢域としての墓所（捨墓）または「海（シモ）」への忌避的手段として配置構成された。一方、群倉を形成しない集落では聖屋としてのコヤは「海（シモ）」方向に成立せず、「山（カミ）」および居住域に配置され、山腹に墓所（捨墓）が配置される場合には聖なるコヤを山裾に配し、居住域への忌避的処理が認められた。

##### ②集落の断面からみた空間構成の比較

群倉を形成する集落では、俗的空間を「山（カミ）」や聖的空間である群倉で囲む構成がとられ、集落構成は象徴的体系の頭れとして《カミ・シモ》観念にしたがって「聖・俗・聖・穢」空間の順に配置構成された。

一方、群倉を形成しない集落では、「山（カミ）」の山頂または山腹に聖域（不入域）が存在した。集落構成上において《カミ》への聖観念が顕著に頭れ、《カミ・シモ》観念に対応し、「聖・俗・穢」空間の順に配置構成された。この内、湊集落では集落内において聖屋としてのコヤが塊状を成し、また聖域としての詣墓（ケッセンドウ）を配して居住域（俗域）の聖化がみてとれる。このことは、群倉を形成する集落における「聖・俗・聖・穢」の順に空間構成された俗的空間の聖化と共通する空間観念が読みとれる。

##### ③主屋の聖性を示す指向の比較

群倉を形成する集落としない集落において民家主屋の聖性を示す指向は共に聖域（「山（カミ）」・聖域）への指向性が顕著であり、穢域（墓所・「海（シモ）」）への指向性は弱く、共に聖なる「山（カミ）」に向かうこ

とを原則としている。

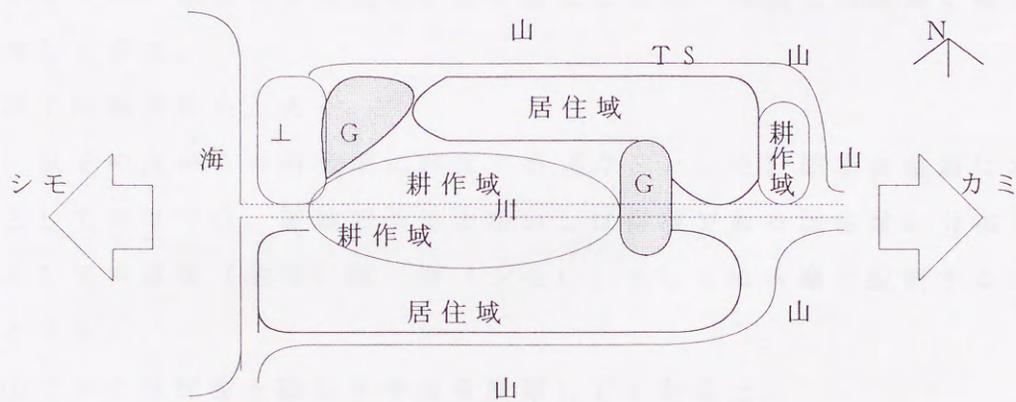
#### ④ 群倉の成立と聖性

群倉の成立は、实例に示すように集落の「山（カミ）」における聖域（不入域）の有無による。聖域が存在する場合、聖化手段としての群倉の必要性はなく、この場合、コヤは集落内部または「山（カミ）」方向に点在または塊状に分布する。聖域が存在しない場合、群倉を形成することを原則としている。それは群倉の聖化手段または忌避的手段として群倉形成の必要性が生じるためである。このようなことは、断面構成の相違として顕れる。「山（カミ）」方向に聖域がある場合、俗域まで聖化がおよび群倉を形成する必要性はなく、従って「聖・俗・穢」という断面構成になる。一方、聖域がない場合には聖化手段、忌避手段としての群倉の形成が必要となる。よって、断面構成は「聖・俗・聖・穢」の順に配置される。

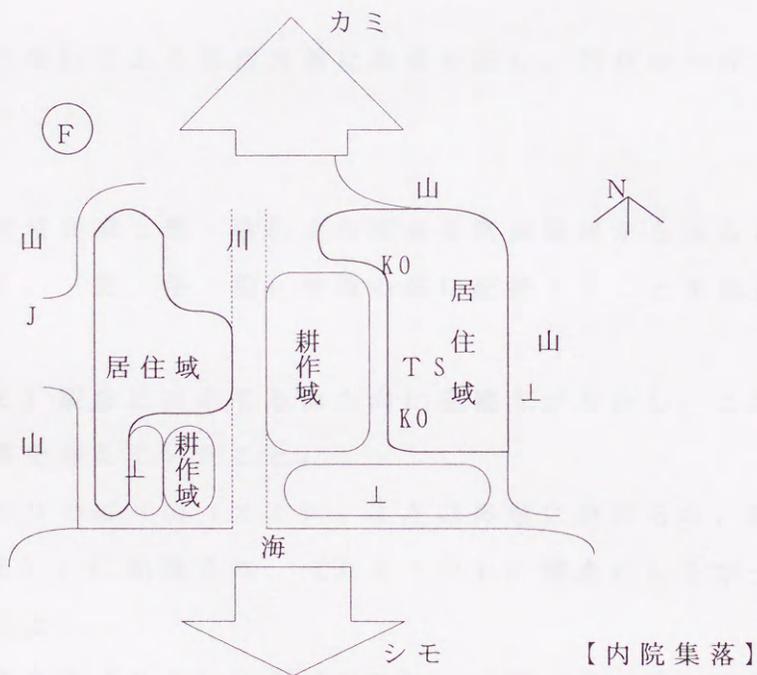
实例として本島の2タイプの対象集落のうち群倉を形成する集落において典型的形態を示す「青海」（図-4：第4章、図-4-(2)より作成）、および形成しない集落において「内院」（図-4：第5章、図-3-(3)より作成）が挙げられる。

群倉を形成する青海集落は聖域および不入域は存在せず、山・海に対する《カミ・シモ》の基軸が存在する。集落中央に耕作域が設けられ、その周囲の山裾に沿って民家が並び居住域を構成する。《シモ》方向に捨墓が設けられ、集落中央の山裾に詣墓を祀る。忌避手段とともに居住域の聖化のため、この居住域と捨墓との境および《カミ》方向に群倉が配置される。ここに明確な聖域をもたない集落における群倉の必要性が存在する。

内院集落では青海と同様に集落を貫き《カミ・シモ》の基軸が成立する。《カミ》方向に天童法師の墓所とする聖域（F：不入域）があり山全域に強い聖性が存在する。詣墓は居住域内部に祀つられ、捨墓は《シモ》方向に分布する。居住域内部にコヤが点在し、さらに居住域は山に存在する明確な聖性による聖化とともに忌避観念から群倉を必要としない集落構成が成立する。



【青海集落】



【内院集落】

〈凡例〉	⊥ : 墓所 (捨墓)	T : 寺院	S : サンカイバンレイ (詔墓)
	KO : コヤ分布域	J : 神社	G : 群倉域
			F : 聖域 (不入域)

図 - 4 青海・内院集落の配置構成概要図

## 5.5 小結

本章では、集落および民家の空間構成と聖性・祭儀との関連に視座をおき論考してきた。

以下に結果をまとめる。

1) 以下の点から本島全域に存在する《カミ・シモ》観念を基層において聖屋としてのコヤは、聖域である山ないしは俗域である居住域に分布し、一方、穢としての墓所（捨墓）は「海（シモ）」もしくは山裾に配置することを原則とする。

- ① コヤには聖性を顕わす平柱を使用していたこと。
- ② コヤの分布域は、聖的空間である「山（カミ）」および俗的空間としての居住域に限定していたこと。
- ③ 墓所（捨墓）は、穢空間としての「海（シモ）」および山裾に配置していたこと。
- ④ 準・両墓制の慣行により集落内部に詣墓を配し、居住域内部への忌避観念がみられたこと。

2) 集落空間の構成要素と聖・穢性との関係を断面構成からみると《カミ・シモ》観念を貫き、「聖・俗・穢」空間の順に配置することを原則にしている。

- ① 《カミ・シモ》観念に対応する山方向に聖観念が存在し、これが集落構成に強い影響を与えていたこと。
- ② 聖屋としてのコヤは「山（カミ）」または俗域に設けられ、墓所（捨墓）は「海（シモ）」に配置され、《カミ・シモ》観念にしたがった配置となっていたこと。
- ③ 集落の構成要素は《カミ》から《シモ》へ「聖・俗・穢」空間の順に配置構成されていたこと。

3) 主屋内部に成立する聖性を示す指向は、聖域である《カミ》観念としての山に向かうことを原則とする。

4) 次の点よりコヤが点在または塊状を成す集落および群倉を形成する集落の空間構成は、ともにコヤの分布域は聖域である「山（カミ）」または俗域に分布し、俗域を聖化するとともに穢に対する忌避的処理として配されることを原則にしている。

- ①コヤの分布域および群倉域は、聖域であり、聖域としての「山（カミ）」または俗域に分布したこと。
- ②集落の空間構成は「聖・俗・穢」空間の3要素から成り、コヤの分布および群倉の配置はともに俗域を聖化するとともに穢に対する忌避的処理として顕現したこと。
- ③民家主屋の聖性を示す指向を基準にみた集落構成は、聖域としての「山（カミ）」に向かったこと。
- ④群倉の成立は、集落の「山（カミ）」における聖域（不入域）の有無によること。

以上、本研究では対馬民家および集落の空間構成について聖性・祭儀を基層におき論考してきた。

本章において対象とした集落は、《カミ・シモ》観念に対応した〈聖・俗・穢〉の空間認識による象徴的体系のなかで一貫した構成原理により成立していると結論づけられた。さらに、群倉の成立は、集落内外における聖域の有無によることを明らかにした。

## 注記

- 1) 本研究では、小屋相互間は接しておらずその間を耕作地、乾燥場や作業場として利用される形態を点在または塊状と捉らえた。
- 2) 赤田光男：「対馬の両墓制及び両墓制に代るものについて」，日本宗教の歴史と民俗，隆文館，1976年
- 3) 九学会連合対馬共同調査委員会編：九学会特別調査報告，1954年，P199：「寄留や次男分家は本戸と同じ村落地域内に住んでいるのであるが、何れも本戸の営む伝統的な村落共同体生活に参加する資格のないもの」と述べている。
- 4) 前掲 3) P494では、陶山鈍翁の「土穀談」を挙げ、「本戸と現在呼ばれているその特定身分階層は、寛文期より多少さかのぼったころより始まったらしい」とし、また「「本戸」の特権を持たぬ層が往時はごく少数戸あって、これは、維新後漸増し、現在、本戸々数を超えるに至っている。これが現在「寄留」層と呼ばれるのは、恐らく明治の戸籍上、入村来住戸に「寄留」の語が用いられて以来のこと」とし、さらに「前住地で、本戸だったか否かには関係なく、入村寄留とするのみならず、本戸次男等が分家して本戸株を入手しえなかった家、即ち分家寄留をも、共に一括してこれらに「寄留」なる階層名が與えられている。」と述べている。
- 5) 宮本常一：対馬漁業史 宮本常一著作集28，未来社，1983年，P219「寄留は、人住まず浦の奥か、または村里からややはなれたところに家をたてて住みつくようになった。－中略－はっきりと両者の間に境をおいた」としている。
- 6) 前掲 2) PP. 443-445:ケッセンドウはオガミドコロの通称であり、祭儀を対象とする聖域である。

## 第6章 結論

### 6.1 序

本研究は、対馬の民家および集落の空間構成を生活領域に内在する〈聖・穢〉観念との関連による象徴的体系の顕現であると位置づけた。そこで、本研究では聖・祭儀空間における構成原理は、生活領域に内在する聖域に対する指向性の概念の導入により実証し得ると捉らえた。本研究では民家の主屋内部における聖性を示す指向を明らかにし、さらに、集落の空間構成における整序性を《シモ：海》から《カミ：山》への指向性に観点をおき、集落をとりまく《カミ》方向に成立する聖性と民家主屋の構成、ならびに主屋の向きとの関連を論考した。

本論文では、かかる観点にたち本研究分野における到達点および本研究の特徴を明らかにした上で、本島民家および集落の空間構成と聖性・祭儀との関連を考察してきた。

本章では以上の各章を総括し、結論とした。

本論文は、民家および集落の空間構成と聖性・祭儀との関連に視座をおき、その構成原理を明らかにすることを目的とした。よって、次の2つの視点から論じた。

第1には、民家主屋に内在する聖性・祭儀との関連を基にガイドコに着目し、ここに設けられる平柱をはじめとする構成要素からガイドコ空間の意味を明らかにすることであった。さらに、平柱の形態成立の必然性および平柱の配置分布より顕現する聖性を示す指向を究明することに視座をおいた。

第2には、集落の空間構成が〈聖・穢〉観念を基に秩序づけられていることを明らかにすることであった。したがって、集落の構成を「聖」「俗」「穢」空間の三つの要素に分類し、この相互間に存在する整序性を求めることである。よって集落を民家の集合体と捉らえ、主屋内部に成立する聖性を示す指向との関連に視座をおき民家から集落の空間構成にいたる構成原理を明らかにすることが第2の視点であり、主目的でもあった。

このため本論文は、対馬の伝統的民家の空間構成に関する研究（第3章）と集落の空間構成に関する研究（第4,5章）に大別して論考した。集落の空間構成については、①群倉を形成する集落（第4章）および②コヤが点在または塊状をなす集落（第5章）とに分類して論じた。この2タイプの集落の比較考察をとおして群倉の成立要因を究明し、さらに民家および集落の空間構成を総合的に論考した。

## 6. 2 本研究の総括

第1章は、序論として研究の目的、意義、研究方法を述べ、さらに本研究における聖性を定義し、聖性および指向性の概念が民家および集落の空間構成の解明に重要かつ有効な方法であることを示した。

第2章「民家および集落研究の到達点と本研究の位置づけ」では本研究の位置づけを明らかにするため、本研究に関連する主な既往研究を検証し、本研究分野における到達点を示し、本研究の特徴、特異点を明らかにした。

本研究分野における本研究の位置づけは、以下のように総括できる。

民家から集落に至る範囲を対象にした研究として坂本磐雄氏の「沖縄の集落景観」および鳴海邦碩氏らによる「神々と生きる村 王宮の都市 バリとジャワの集住の構造」を挙げた。これらの研究は、特に民家および集落の構成における聖性と方位、つまり基点となる聖域との関係に着目した研究であり、本研究分野における貴重な研究と位置づけた。

民家を対象とした研究として、聖性を基に象徴的場所の相互関係を論じた西垣安比古氏の「朝鮮のすまい」、ならびに建築を聖なるものと位置づけた玉腰芳夫氏の「古代の家 一場所の研究」を挙げた。両研究は民家の空間構成における整序性の要因として、特に聖性との関連を基に論じた研究であり、本研究の概念構築における貴重な研究であった。

集落の空間構成に関した研究のなかで本島を対象とし、集落構成について「同心円的聖地構造」および〈下〉に対する〈上〉の優越的な指向を明らかにした鈴木正崇氏による「祭祀と村落空間」に関する一連の研究、ならびに土井崇司氏の「日本における伝統的集住の空間構造に関する研究」で明らかにした聖化した閉合性による古代集落の構成は、ともに聖性を基盤におく点において本研究と類似するところである。本研究では、さらに集落を民家の集合体として捉らえることにより、民家主屋に成立する聖性を示す指向と生活領域に成立する《カミ・シモ》観念による〈聖・穢〉観念との関連をとおり民家から集落の空間構成に至る一連の構成原理を実証したところが本研究の特徴であり、また特異点であることを示した。

第3章「対馬民家のダイドコにおける空間構成と聖性・祭儀」では、本島民家は孤立した本島固有の地理的、歴史的環境下に強力な共同体をもつ社会組織が構成され、中世的遺制が残る生活領域のなかで聖性を顕現した象徴的空間であったことを明らかにした。

本章では、こうした状況下に成立した本島民家のダイドコの空間構成と聖性・祭儀との関連について論考した。以下に総括する。

①主屋の空間構成において平柱が設けられたダイドコの空間構成は、聖性・祭儀にもとづく象徴的体系のなかで、聖性・祭儀空間と生活の場による重層的空間として構成されていた。さらにダイドコは正月行事や農耕神を主とした祭儀が行われる聖性・祭儀空間であり、またナンドはウチノカミが祀られる聖的空間であることを明らかにした。これに対しザシキでは公式的な仏教行事が行われる非日常的空間観念の存在を指摘した。したがって、このことを基礎にして、ダイドコとナンドを同一のグループとみなし、ザシキ系と合せて二系のグループに大別することの妥当性と同時に本島民家の特徴をダイドコとナンドとを同一のグループとみなすことによって本島民家の主屋内は、ダイドコ・ナンド系とザシキ系による異なった空間観念を内在した二元的空間構成を成していたことを明らかにした。

②平柱は聖性の象徴的顕現であり、その形象として形成された。この平柱の形態の成立についてはイヤ（産後の胎盤）処理に関連する民俗的事例に着目し、構造的必要性より聖性の象徴的形態としての必要性を明らかにした。また、平柱はダイドコの周壁とコヤに特定して使用されることに視座をおき、平柱のダイドコでの使用はコヤに内在する聖的観念との同一性によることを検証し、ダイドコに設けられる蓋然性を明らかにした。

③平柱（長方形断面の柱）は本島を含め広い範囲からの出土がみられ、アジア東南部においては聖性の象徴的存在として捉えられる地域があり、本島の平柱と共通した観念の存在をも指摘した。また、平柱の一般性についての検証は、今後の研究課題として挙げた。

④平柱は見込に対する見附の平均比率は約2.4倍であり、明確な長方形断面を示し、各壁面での柱間寸法には規則性はみとめられなかった。

この平柱の偏在により、ダイドコの周壁では各壁面での強調された正面性

が認められた。特に出入口（ドージ）に対する正面性が顕著にみられた。さらに、ダイドコの上手ではナンドの聖性が、また下手においては「ホタケ」による聖性の各壁面意匠への影響を明らかにした。

ダイドコの空間構成では、出入口からみた生活上の正面性（A壁面）とダイドコとナンド境の壁面（B壁面）における祭儀性による正面性が認められたことから、ダイドコ内部における二重の正面性を明らかにした。

次に平柱の配置により各壁面にはダイドコの中心部および端部への2種の指向性が認められた。これを基にダイドコ内部における平柱の偏在した配置構成により隣室への指向を明らかにした。この指向は、さらに聖性・祭儀と関連した聖性を示す指向でありナンド方向への指向として顕現したことを明らかにした。

第4章「群倉を形成する対馬集落の空間構成と聖性」では、集落の空間構成について群倉を形成する集落を対象とし考察した。本章では集落構成と〈聖・穢〉観念との関連に視座をおき論考し、以下の3項目を明らかにした。

①群倉を形成するコヤの全島域で行われる祭儀としては「クラビラキ」、  
「ダラ正月」などの穀霊信仰と関連した正月行事がみられ、ダイドコの聖性と同一的観念の存在を明らかにした。群倉と聖性・祭儀との関連についてはコヤがもつ再生力、復活力の存在、特に産および死に対する観念は穀物の再生力、浄化力と同一観念上に成立したこと。さらに、群倉の不入域内部への成立は、群倉と不入域に内在する聖性との同一観念による蓋然性を指摘した。したがって、コヤは穀倉の性格を持ち、その集合体としての群倉は生活領域において再復活および浄化力をもつ聖的空間であることを明らかにし得た。

②本章では断面構成からみた集落形態を捨墓の配置構成から2タイプに大別し、さらに群倉の配置構成により4タイプに分類した（第4章 図-3）。

集落内部において《カミ・シモ》観念にもとづく〈聖・穢〉の空間観念を基に聖なる群倉は居住域に対する穢への忌避処理として配置構成された。また、聖的空間である山および群倉とにより俗的空間を囲む構成となり、俗域の聖化を明らかにした。よって、集落の構成は象徴的体系にしたがった〈聖・俗・穢〉空間の三つの構成要素による配置関係、つまり《カミ・シモ》観

念にしたがった象徴的体系のなかで「聖・俗・聖・穢」の順に秩序づけた構成原理が明らかとなった。

③民家内部に顕現する聖性を示す指向と〈聖・穢〉域との関連からみた集落の空間構成における主屋の向きは、集落の内外に成立する聖域または《カミ：山》の聖性にもとづき指向することを明らかにした。

第5章「対馬の群倉を形成しない集落の空間構成と聖性」では、コヤが点在または塊状を成す集落を対象とし、集落の空間構成と聖性・祭儀との関連を論考した。

本章では、民家から集落の空間構成にいたる一貫した構成原理を明らかにするため、その基層に存在する整序性を総合的観点にたち論考した。

本章では、以下の4項目を明らかにした。

①山に存在する聖域（不入域）および《カミ：山》の聖観念が集落構成に影響し、聖なるコヤは〈聖・穢〉観念にもとづいた《カミ：山》方向または居住域（俗域）内部に配置される。一方、捨墓は《シモ：海》方向への分布を原則とした。また、捨墓の《カミ》への分布に対し、《カミ》へのコヤの配置および準・両墓制の慣行による忌避的处理にもとづいた「居住域（俗域）」を聖化する空間観念を明らかにした。

②断面からみた集落の空間構成は忌避観念の顕現のため、準・両墓制の慣行による詣墓の俗域への配置および捨墓の《シモ：海》方向への配置を原則としており、《カミ》から《シモ》へ「聖・俗・穢」空間の順に配置構成される必然性を究明した。つまり、集落構成は忌避観念による一貫した整序性を基に象徴的体系の一系として成立したことを明らかにした。

③主屋の向きは主屋内部に成立する聖性を示す指向を基に《カミ》への指向が認められた。これは、群倉を形成する集落の結果と共通しており、本島における一般的性向と認められた。

④本島集落において群倉を形成するか、否かは集落周囲の《カミ》における聖域の有無によるものであり、集落内部の聖化観念によることを明らかにした。

本島集落の空間構成は、このような聖性・祭儀による強力な影響下に成立

したことが明らかとなった。したがって、対象とした2タイプの集落の空間構成は「聖」「俗」「穢」空間を基本的構成要素として《カミ・シモ》観念にしたがい秩序だてられた。さらに、民家主屋の向きは、ともに聖性との関連にもとづいて《カミ》への指向を示し、極めて明確な整序性の存在が明らかとなった。

以上より、本論文は本島集落の空間構成が民家主屋内の構成から集落の構成にいたるまで、生活領域に内在する《カミ・シモ》観念を基層におく、象徴的体系の中で俗域の聖化と穢からの忌避観念に基づく一貫した空間構成原理によって秩序だてられていると結論づけた。

以上の各章から得た知見を総合的に示し、結びとする。

本研究は聖性・祭儀に着目し、民家および集落の空間構成の基層に聖性を位置づけ聖的指向概念による空間観念の数量化を図り、一連の構成原理を実証的に論じたものである。

本研究における実証的研究方法は、同様の条件を具備した他の地域においても有効的手段である。さらに、本研究では近世民家および集落の空間構成を対象としており、現存する空間観念が伝統的脈絡のなかで成立するものである以上、近世以前の民家および集落に内在した空間観念への示唆、延いては空間構成の構成原理にいたる推論も可能であり、本研究分野における新しい研究方法となり得ることが指摘できる。

本研究における残された課題は、次のとおりである。

第1点に、本研究は聖性・祭儀に着目し、主として民俗学的視座にたち検証した。したがって、時間軸の概念の導入による歴史学的観点から民家および集落の空間構成と聖性・祭儀との関連を論じ、聖的指向概念の変遷を明らかにすることが必要である。さらに、民家および集落構成における聖的指向概念の成立時期の究明が残されている。

第2点に、平柱の分布は本島をはじめ日本々土においては古代の遺跡からの出土、また日本以外ではアジア東南部での分布とその象徴的存在が報告されている。しかし、日本国内においてもその全貌の解明には至っていないことを指摘できる。

第3点に、本研究で対象とした集落は2タイプのコヤの配置形態において準・両墓制の慣行が認められた集落である。したがって、豆殿および佐護を中心とする天道の聖域（山）と本島全域にわたる集落の空間構成との関連を総合的に究明することが残されている。

第4点に、本研究は対馬に限定した考察となった。他地域の民家および集落の空間構成・空間観念との比較をとおして、一般性への展開が残されている。

本研究では民家および集落の空間構成の整序性の究明を目的とし、聖性・祭儀との関わりを基に生活領域に内在する象徴的体系のなかで空間構成の構成原理を主に論じてきた。

本章に示した結論も民家および集落に対し、民俗学的観点から実証的方法が中心となっている。先に示した残された課題と併せて考察するとき、生活領域に成立する民家および集落に関わる問題の深遠を痛感する次第である。

## 研究目録

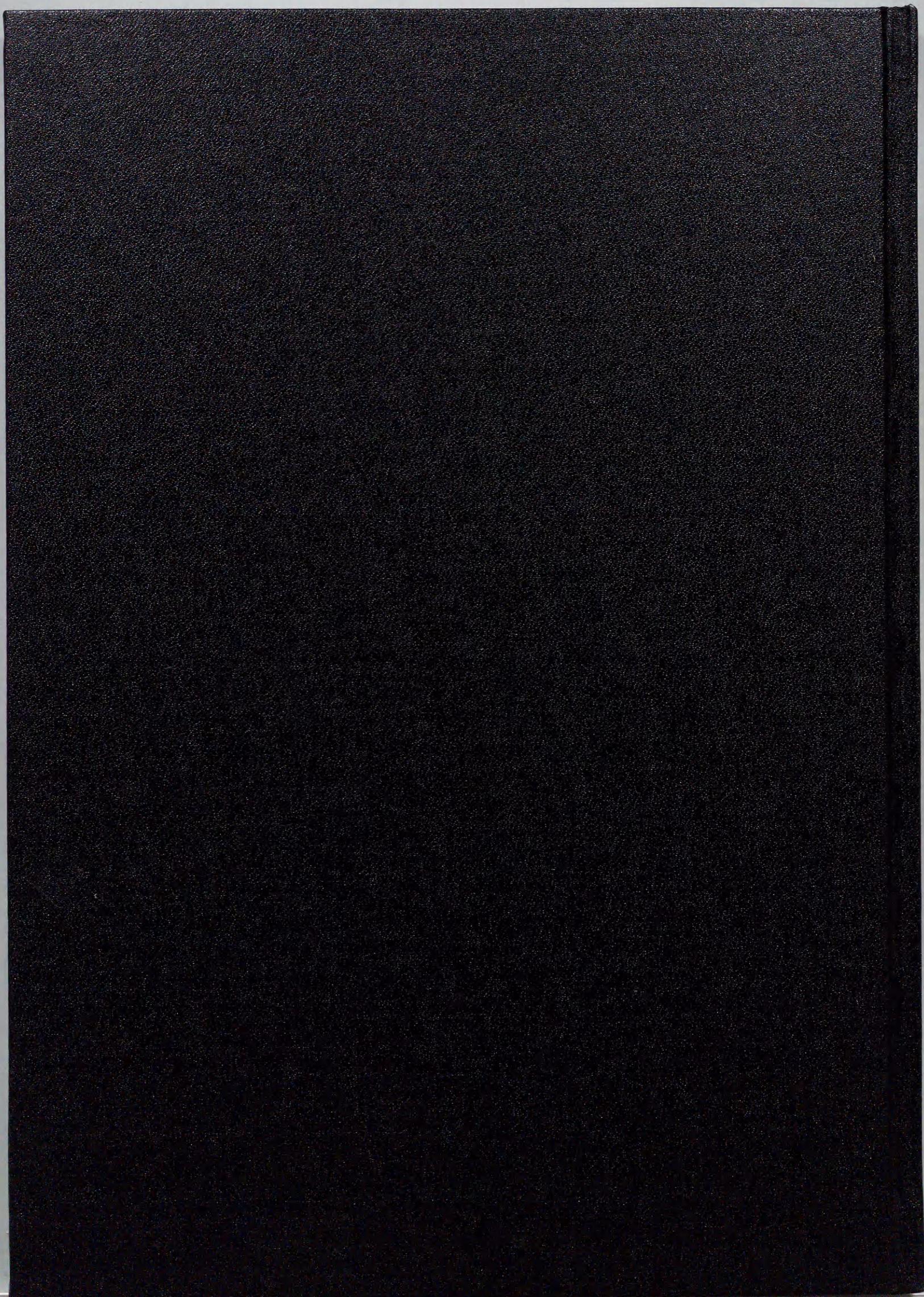
### 主論文

- (1) 全著者名 松永 達、高見敏志、北村速雄、永田隆昌、九十九誠  
論文題目 「対馬民家のダイドコにおける空間構成と祭儀」  
民家建築の空間構成と聖性に関する研究 その1  
1994年 4月 日本建築学会計画系論文集 第458号 PP. 155-162  
(第3章)
- (2) 全著者名 松永 達、高見敏志、永田隆昌、九十九誠  
論文題目 「群倉を形成する対馬集落の空間構成と聖性」  
民家建築の空間構成と聖性に関する研究 その2  
1995年 7月 日本建築学会計画系論文集 第473号 PP. 169-175  
(第4章)
- (3) 全著者名 松永 達、高見敏志、永田隆昌、九十九誠  
論文題目 「対馬の群倉を形成しない集落の空間構成と聖性」  
民家建築の空間構成と聖性に関する研究 その3  
1996年 3月 日本建築学会計画系論文集 第481号 PP. 205-211  
(第5章)
- (4) 全著者名 松永 達  
論文題目 「対馬民家の空間構成にみられる聖性について」  
民家の空間構成と聖性に関する研究  
1997年 5月 日本民俗建築学会『民俗建築』第111号 PP. 17-25  
(第1章)
- (5) 全著者名 松永 達、土田充義  
論文題目 「対馬の民家」  
民家の空間構成と聖性に関する研究  
1997年11月 日本民俗建築学会『民俗建築』第112号 PP. 3-10  
(第3章)

## 参考論文

- (1) 全著者名 野村孝文、沢村 仁、佐藤正彦、田中清章、松永 達、  
麻田貞信  
論文題目 「太閤酒造主家と北蔵の復元的研究」  
昭和52年11月30日 九州産業大学工学部研究報告 第14号 PP.137-153
- (2) 全著者名 野村孝文、沢村 仁、佐藤正彦、田中清章、松永 達、  
麻田貞信  
論文題目 「太閤酒造所蔵の古絵図について」  
1978年11月30日 九州産業大学工学部会誌 第15号 PP. 69-76
- (3) 全著者名 松永 達、平嶋道行  
論文題目 「水口町の民家について  
——宿駅街区の形成についての研究——」  
昭和54年2月 日本建築学会九州支部研究報告 第24号 PP. 359-362
- (4) 全著者名 松永 達  
論文題目 「対馬の民家について」  
昭和57年3月 日本建築学会九州支部研究報告 第26号 PP. 445-448
- (5) 全著者名 松永 達  
論文題目 「対馬の民家 ——ダイドコの性格について——」  
昭和57年10月 日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）  
PP. 2485-2486
- (6) 全著者名 野村孝文、松永 達、竹下幸栄  
論文題目 「大分県日田郡天瀬町の民家について」  
昭和60年3月 日本建築学会九州支部研究報告 第28号 PP. 309-312

- (7) 全著者名 野村孝文、松永 達、喜多村成雄  
論文題目「韓国鬱陵島の累木式民家について」  
昭和62年3月 日本建築学会中国・九州支部研究報告 第7号  
PP. 305-308
- (8) 全著者名 松永 達、高見敏志、永田隆昌  
論文題目「対馬民家のガイドコに於ける平柱の配置と祭儀性」  
民家建築に於ける祭儀空間に関する研究 その1  
1993年 3月 日本建築学会中国・九州支部研究報告 第9号  
PP. 485-488
- (9) 全著者名 松永 達、高見敏志、永田隆昌  
論文題目「群倉を形成する対馬集落の空間構成と聖性 I」  
1995年 8月 日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）  
PP. 223-224
- (10) 全著者名 高見敏志、永田隆昌、松永 達  
論文題目「群倉を形成する対馬集落の空間構成と聖性 II」  
1995年 8月 日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）  
PP. 225-226
- (11) 全著者名 永田隆昌、高見敏志、松永 達  
論文題目「群倉を形成する対馬集落の空間構成と聖性 III」  
1995年 8月 日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）  
PP. 227-228
- (12) 全著者名 松永 達、高見敏志、永田隆昌、九十九誠  
論文題目「対馬の群倉を形成しない集落の空間構成と聖性 I」  
1997年 3月 日本建築学会九州支部研究報告 第36号 PP. 513-516
- (13) 全著者名 永田隆昌、高見敏志、松永 達、九十九誠  
論文題目「対馬の群倉を形成しない集落の空間構成と聖性 II」  
1997年 3月 日本建築学会九州支部研究報告 第36号 PP. 517-520



inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

### Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



### Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19

